

大阪市平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告

IV

1998年度大阪市長吉東部地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2001.3

財団法人 大阪市文化財協会

長原遺跡東部地区発掘調査報告 IV

2001.3

本年度の調査では地下 8 mまでを調査の対象とし、旧石器時代から鎌倉時代にかけての遺構・遺物を検出した。

縄文時代では遺構・遺物は検出できなかったが、厚い水成層の間で古土壤の可能性が高い暗色帯が見つかった。

古墳時代中期では、2基の土壇状遺構と2時期の自然流路を検出した。土壇状遺構は、盛土の中に祭祀に係わる土器や玉類が大量に埋められていた。これらは須恵器出現直後の土師器の様相を示す良好な一括資料である。

このほか、弥生時代の溝や古墳時代後期の土手をもつ流路、平安時代の流路なども見つかった。

また、後期旧石器時代から縄文時代中期にかけて堆積した土壤を分析し、縄文海進期の前後における河内平野のようすを考察する。

大阪市平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告

IV

1998年度大阪市長吉東部地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2001.3

財団法人 大阪市文化財協会



古墳時代の土器

大阪市平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告

IV

1998年度大阪市長吉東部地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2001.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

本書は、1998年度に行った大阪市長吉東部地区土地区画整理事業に伴う発掘調査の成果を収録した『長原遺跡東部地区発掘調査報告』IVである。

調査地の平野区長吉六反地区は大阪市の南東部に位置する。近年の宅地化とともに水田は失われつつあるが、市内では比較的緑豊かな場所である。しかし、六反地区の歴史は水害との戦いの歴史であった。1995年から始まった発掘調査では各時代の遺跡とともに、地上の景色からは想像もつかない大規模な洪水の跡があちこちで見つかっている。これらは旧石器時代から現代にいたるまで、人間が水害に抗いながら、あるいは共存しながら逞しく暮らしてきたことを示していよう。調査で得られる資料は歴史の一部分であるが、それらを増やしてゆくことによって、やがて大きな事実が見えてくるであろう。これからも、できるだけ最新の成果を迅速に公表するため努力してゆく所存である。

最後に、発掘調査の開始から報告書刊行にいたるまで、数々のご協力を賜った関係各位の皆様に心より深謝の意を表する次第である。

2001年3月

財団法人 大阪市文化財協会

理事長 脇 田 修

例　　言

- 一、本書は財団法人大阪市文化財協会が1998年度に実施した、大阪市建設局長吉東部土地区画整理事務所による平野区長吉六反4丁目の土地地区調査事業に伴う発掘調査(NG98-19・20次、NGは長原遺跡を示す)の報告書である。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査部長水島輝臣(現)の指揮のもと、調査課調査員松本百合子・小倉徹也が行った。各調査の担当者・面積・期間などは第Ⅰ章第2節表2に示した。本書の編集は、水島・調査課長京崎覚・同課六反調査事務所長(現研究副主幹)趙哲済の指導のもとに、松本が行った。本書の執筆は松本が、趙・小倉と討議したうえで行った。文責は各節の末尾に示した。また、第Ⅱ章の表3長原遺跡の標準層序は、[趙哲済2001]を転載したものである。なお、英文目次・要旨の作成はRobert Condon氏と調査課調査員宮本康治が行った。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市建設局が負担した。
- 一、花粉・珪藻分析は川崎地質株式会社に委託し、分析結果を第Ⅳ章第1節に収録した。
- 一、造構写真は調査担当者が撮影し、遺物写真的撮影は徳永園治氏に委託した。
- 一、発掘調査で得られた遺物・図面・写真などの資料はすべて当協会が保管している。
- 一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には補助員諸氏の協力を得た。深く感謝の意を表したい。

凡　　例

1. 本書における地層名は、NG98-19・20次調査とも共通の地層番号を付けた。共通の番号を表記するばあい、一例をあげると「第7a層」というように「第」を冠したうえでアルファベットを小文字で表現している。ただし、図中では「第」・「層」を省略している。「長原遺跡の標準層序」との対比は【趙哲濱2001】に基づいて行い、表記は本文中では「長原7A層」として、「長原」を冠したうえでアルファベットを大文字で表現している。図表中では「長原」の略号である「NG」を冠して「NG7A層」とした。
2. 本書における遺構名の表記は、建物にはSB、柱穴・ピットにはSP、土壙にはSK、溝にはSD、自然流路にはNR、そのほかにはSXの略号を冠した。遺構番号は、「長原遺跡の標準層序」に対応する層序番号を冠し、そのあとに両調査地を通した遺構番号を続けて表記した。一例をあげると、長原4層に対応する溝SD01は「SD401」としている。
3. 本書における遺物番号は、すべて通し番号を1から順に付した。石器遺物については、当協会が弥生時代以前の石器遺物に対して個別に与えている石器登録番号を別表1に併記した。
4. 本書で用いた座標値は国土地理院直角座標(第VI系)に基づくもので、大阪市1級基準点を既知点とした基準点測量によって得た。水準点は、大阪市土木局管理の「南-49(大阪市立長吉南小学校内)」をもとに長吉東部土地区画整理事務所が設置したものを利用し、T.P.値(東京湾平均海面値)を用いた。なお、本文中では「TP」と略称した。
5. 本書で用いた地層の土色および土器の色調は【小山正忠・竹原秀雄1967】に従った。
6. 本書で用いた土器編年と器種名については、弥生土器は【佐原真1968】に、古墳時代の須恵器は【田辺昭三1981】に、古墳時代の土師器は【米田敏幸1991】に、飛鳥・奈良時代の土器は【奈良国立文化財研究所1976・1978】[古代の土器研究会1992]に、平安時代の土器は【佐藤隆1992】に、平安時代後期以降の瓦器は【鈴木秀典1982】に従った。
7. 本書の地層断面図・柱状図で用いた岩相の基本パターンは【趙哲濱1995】のそれに準じて表現している。
8. 註は各節末に、引用・参考文献と索引は巻末に掲載した。

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 長原遺跡東北地区の発掘調査	1
第1節 経緯と調査地の位置	1
1)発掘調査にいたる経緯	1
2)遺跡の立地と調査地の位置	5
第2節 発掘調査の経過と概要	7
1)NG98-19次調査	7
2)NG98-20次調査	7
第Ⅱ章 長原遺跡東北地区における層序	9
1)沖積層上部層	9
2)沖積層中部層	11
3)沖積層下部層	11
4)低位段丘構成層	11
第Ⅲ章 調査の結果	15
第1節 NG98-19次調査	15
1)地層と遺物	15
i)層序	
ii)各層出土の遺物	
2)弥生時代の遺構と遺物	23
i)土壤	
3)古墳時代の遺構と遺物	24
i)土壤状遺構	
4)小結	44
第2節 NG98-20次調査	45
1)地層と遺物	45
i)層序	
ii)各層出土の遺物	
2)弥生時代の遺構と遺物	61
i)土壤	

3) 古墳時代中期の遺構と遺物	61
i) 壁穴式住居	ii) 土壇状遺構
iii) 自然流路	
4) 古墳時代後期の遺構	72
i) 溝	
5) 平安・鎌倉時代の遺構と遺物	73
i) 流路	ii) 溝
6) 小結	76
 第Ⅳ章 遺構と遺物の検討	79
第1節 長原遺跡東北地区における花粉・珪藻分析	79
1)はじめ	79
2)試料について	79
3)分析方法および結果	80
4)花粉分帯	80
5)珪藻分帯	82
6)既知の資料との比較	84
7)花粉層序と火山灰層序の関係	84
8)古環境変遷	85
9)まとめ	88
第2節 土壇状遺構と出土土器の編年的位置づけ	89
1) 土壇状遺構について	89
2) SX701とSX702の土師器	90
3) SX701出土土器の編年的な位置づけ	92
4)まとめ	92
 第V章 まとめ	95
1) 縄文時代	95
2) 弥生時代から古墳時代中期	100
3) 古墳時代後期以降	100
別表	101
 引用・参考文献	121
 あとがき・索引	
 英文目次・要旨	

原色図版目次

- 1 NG98-19次調査 古墳時代の遺構
上：SX701検出状況(北東から)
下：SX701上層盛土中の遺物検出状況(中央部)
- 2 NG98-19次調査 SX701出土遺物
上：土師器 壺・壺・鉢
下：土師器 高杯
- 3 NG98-20次調査 遺構出土遺物
上：NR701・702出土遺物
下：SD401出土遺物

図版目次

- 1 NG98-19次調査 層序
上：東壁地層断面(第1～4cii層)
中：南壁地層断面(第6biii～7axiii層)
下：東壁地層断面(第7avi～9bii層)
- 2 NG98-19次調査 古墳時代の遺構(1)
上：SX701検出状況(北東から)
下：SX701周辺の地層断面(南壁)
- 3 NG98-19次調査 古墳時代の遺構(2)
上：SX701上層盛土中の遺物検出状況
(北東から)
下：SX701上層盛土中の遺物検出状況(北から)
- 4 NG98-19次調査 古墳時代の遺構(3)
上：遺物出土状況(南部)
中：遺物出土状況(中央部)
下：遺物出土状況(北部)
- 5 NG98-20次調査 層序(1)
上：南壁地層断面(第1～4civ層)
下：南壁地層断面(第5a～6c層)
- 6 NG98-20次調査 層序(2)
上：南壁地層断面(第6bi～7axiii層)
下：南壁中央部地層断面(第6bi～7axiii層)
- 7 NG98-20次調査 層序(3)
上：東壁地層断面(第8a～9ci層)
中：南壁地層断面(第9cii～12ai層)
下：南・西壁地層断面(第9ciii～14層)
- 8 NG98-20次調査 楩文時代中期以前の状況
上：第13a層下面の生糞化石と遺物出土状況
下：南壁地層断面(第12aii～14層)
- 9 NG98-20次調査 弥生時代の遺構
上：SD901・902(北西から)
下：SD903(北から)
- 10 NG98-20次調査 古墳時代の遺構(1)
上：SB701検出状況(西から)
下：SB701完掘状況(西から)
- 11 NG98-20次調査 古墳時代の遺構(2)
上：SX702検出状況(西から)
下：SX702の断面(東壁)
- 12 NG98-20次調査 古墳時代の遺構(3)
上：SX702の周溝状遺構完掘状況(西から)
下：SX702上層盛土中の遺物出土状況(西から)
- 13 NG98-20次調査 古墳時代の流路
上：NR701・702完掘状況(東から)
下：SD701と土手の断面(南壁)
- 14 NG98-20次調査 平安時代の遺構
上：SD401(西から)
下：第5a層上面検出状況(西から)
- 15 NG98-19次調査 SX701出土遺物(1)
16 NG98-19次調査 SX701出土遺物(2)
17 NG98-19次調査 SX701出土遺物(3)
18 NG98-19次調査 SX701出土遺物(4)
19 NG98-19次調査 SX701出土遺物(5)
20 NG98-19次調査 SX701出土遺物(6)
21 NG98-19次調査 SX701出土遺物(7)
22 NG98-19次調査 SX701出土遺物(8)
23 NG98-19次調査 SX701出土遺物(9)
24 NG98-19次調査 SX701出土高杯の組部
25 NG98-20次調査 各層出土遺物
26 NG98-20次調査 SX702出土遺物
27 NG98-20次調査 NR701・702出土遺物
28 NG98-20次調査 SD401出土遺物

挿 図 目 次

図1 長原遺跡の地区割と周辺の遺跡	1	図34 NG98-20次調査南壁地層断面図(西半)	51
図2 長吉東部区画整理事業施行予定地と既往の調査	2	図35 NG98-20次調査西壁地層断面図	52
図3 1998年度調査地の配置	4	図36 各層出土遺物(1)	57
図4 長原遺跡周辺の地形分類	5	図37 各層出土遺物(2)	58
図5 NG98-19次調査東壁地層断面図	18	図38 第13a層中遺物の出土位置	58
図6 NG98-19次調査南壁地層断面図	19	図39 SD901~903平・断面図	60
図7 第7axii層出土遺物	22	図40 SB701平・断面図	62
図8 第9bii層出土遺物	22	図41 SX702平面図	63
図9 第9a層上面検出遺構と第8b層出土遺物	23	図42 SX702の遺物出土状況	64
図10 SK901平・断面図	23	図43 SX702出土遺物	66
図11 SX701と周溝状の窪地	24	図44 NR701・702、SD701断面図	67
図12 SX701西壁地層断面図	25	図45 NR701平面図	68
図13 SX701と周溝状の窪地断面図	26	図46 NR701出土遺物(1)	69
図14 第7bv層上面検出状況	27	図47 NR701出土遺物(2)	69
図15 第7axii層上面検出状況	27	図48 NR702平面図	70
図16 SX701盛土中の遺物出土状況	28	図49 NR702出土遺物	71
図17 SX701盛土中の遺物出土位置(変)	30	図50 SD701と土手の平面図	72
図18 SX701盛土中の遺物出土位置(二重口縁壺)	30	図51 SD401・301平面図	74
図19 SX701盛土中の遺物出土位置(壺)	31	図52 SD401断面図	74
図20 SX701盛土中の遺物出土位置(高杯)	31	図53 SD401出土遺物	75
図21 SX701出土遺物(1)	32	図54 NG97-52・98-20次調査試料採取地点	79
図22 SX701出土遺物(2)	33	図55 NG97-52・98-20次調査地 花粉ダイアグラム	81
図23 SX701出土遺物(3)	35	図56 NG97-52・98-20次調査地 珪藻ダイアグラム	83
図24 SX701出土遺物(4)	36	図57 NG97-52・98-20次調査地 珪藻総合ダイアグラム	86
図25 SX701出土遺物(5)	37	図58 土壇状遺構SX701・702の位置	89
図26 SX701出土遺物(6)	39	図59 SX701出土土器	91
図27 SX701出土遺物(7)	40	図60 SX702出土土器	91
図28 SX701出土遺物(8)	41	図61 NG98-20次調査南壁地層断面図(東半)	96
図29 SX701出土遺物(9)	42	図62 NG98-20次調査南壁地層断面図(西半)	97
図30 SX701出土遺物(10)	43	図63 NG97-52次調査南壁中央地層断面図(東半)	98
図31 SX701直上出土遺物	43	図64 NG97-52次調査南壁中央地層断面(西半)	99
図32 NG98-20次調査東壁地層断面図	49		
図33 NG98-20次調査南壁地層断面図(東半)	50		

表 目 次

表1 長原遺跡東北地区におけるおもな調査	3	表4 NG98-19次調査地の層序	15-16
表2 1998年度実施発掘調査の期間など	6	表5 NG98-20次調査地の層序	46-47
表3 長原遺跡の標準層序2001	12-13		

写 真 目 次

写真1 NG98-19次調査風景	7	写真8 壺56の内面底部の炭化米	34
写真2 NG98-20次調査風景	8	写真9 第9ci層上面検出状況(南西隅)	54
写真3 第7aviii層上面出土の自然木	20	写真10 生痕化石と洞片255の出土状況	59
写真4 第9bi層以下の地層	21	写真11 SP701の断面	61
写真5 土製勾玉5の出土状況	29	写真12 NR702の遺物出土状況	71
写真6 滑石製勾玉6の出土状況	29	写真13 黒色土器321~323の出土状況	76
写真7 盛土出土の炭化米	34		

別 表 目 次

別表1 遺物一覧	102	別表4 NG98-20次調査	
別表2 NG98-19次調査		SX702出土の壺・壺・鉢類觀察表	118
SX701出土の壺・壺・鉢類觀察表	108	別表5 NG98-20次調査	
別表3 NG98-19次調査		SX702出土の高杯觀察表	119
SX701出土の高杯觀察表	112		

第Ⅰ章 長原遺跡東北地区の発掘調査

第1節 経緯と調査地の位置

1) 発掘調査にいたる経緯

八尾市との市境に接する大阪市平野区長吉出戸・六反地区は、全域が「長原遺跡」に含まれる。長原遺跡は総面積350万m²を越す旧石器時代から近世にいたる大複合遺跡であるため、報告書において、8つの地区を設定している(図1)。今回報告する調査地が所在する長吉六反4丁目は、そのうちの東北地区にあたる。

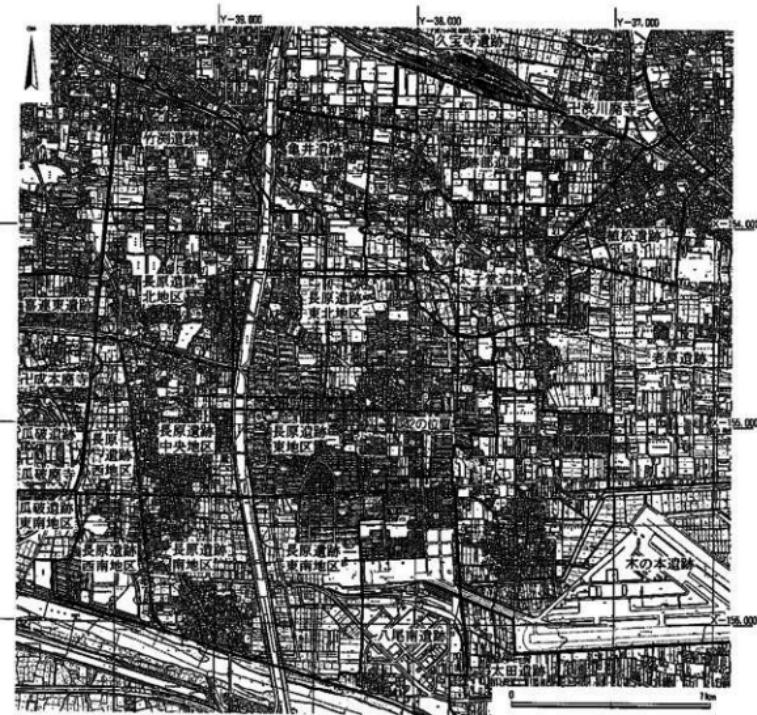


図1 長原遺跡の地区割と周辺の遺跡

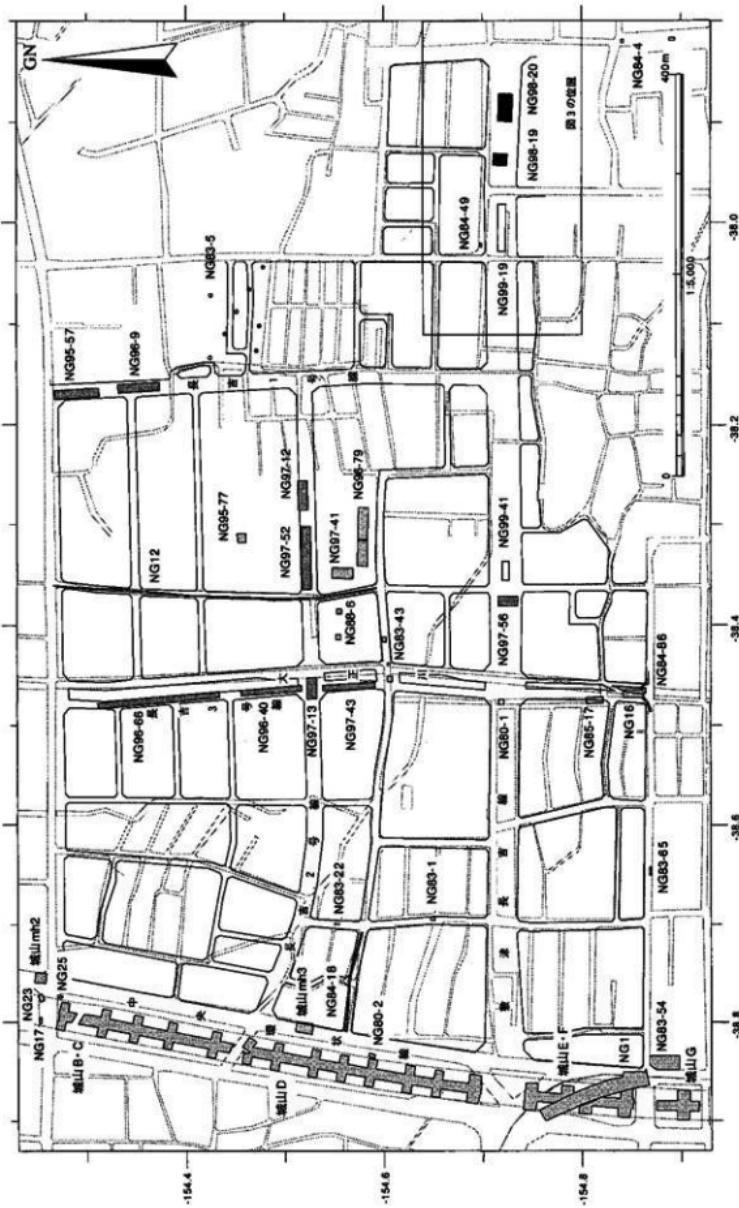


図2 長吉東部区画整理事業実施予定地と既往の調査

大阪市による長吉東部地区土地区画整理事業は、長原遺跡東北地区のほぼ全域が対象である。そのため、埋蔵文化財の取扱いについて、大阪市建設局長吉東部地区土地区画整理事務所(以下、区画整理事務所と略称する)、大阪市教育委員会文化財保護課(以下、文化財保護課と略称する)、財団法人大阪市文化財協会の3者により、1995年9月に事前協議を行い、「長吉東部地区埋蔵文化財に関する協定書」を締結した。発掘調査を実施するにあたっては、事業における埋蔵文化財の取扱い全般を協定書に定めた上で、各年度における具体的な内容は年度ごとの契約書で定めることとした。

初年度である1995年度の調査(NG95-57次)は、都市計画道路長吉1号線予定地の北端部(図2)を対象にして行った。この調査では、飛鳥時代および平安時代の掘立柱建物や古墳時代後期の氾濫性の堆積層・柵(しがらみ)とされた土手状遺構が出土した。その成果は翌1996年度に整理作業を実施

表1 長原遺跡東北地区におけるおもな調査

調査	おもな内容	文献
城山mh2	弥生前期～中期圓墳墓外造構、古墳	大阪文化財センター1980
城山mh3	弥生中期遺物、古墳大堤、奈良遺物	大阪文化財センター1980
城山B・C区	弥生中期方形周溝墓、古墳、飛鳥自然流路	大阪文化財センター1986
城山D・E・F区	弥生中～後期集落、古墳中期水田・土壤、飛鳥～平安溝、中世水田	大阪文化財センター1986
城山G区	弥生土墳群、飛鳥～中世水田	大阪文化財センター1986
NG1	弥生中期溝・土墳墓、古墳中期溝、飛鳥大堤	大阪市文化財協会1978
NG12	飛鳥村列・流路・土器墓つまり、平安土塙	大阪市文化財協会1979a
NG16	弥生～古墳中期遺物、弥生溝、古墳前・中期溝・井戸	大阪市文化財協会1979b
NG17	純文晩期・弥生・古墳中期遺物	大阪市文化財協会1979c
NG80-1	TP+7.2mで奈良溝、TP+6.9mで移層(NG8層)	大阪市文化財協会1980a
NG80-2	弥生・古墳遺物	大阪市文化財協会1980b
NG23	弥生中期遺物、古墳	大阪市文化財協会1980c
NG25	純文晩期・弥生中期遺物	大阪市文化財協会1980c
NG83-1	弥生中期住居、古墳中期住居	大阪市文化財協会1983a
NG83-5	TP+8.0mで砂層	大阪市文化財協会1983b
NG83-22	TP+7.6mで奈良包含層	大阪市文化財協会1983c
NG83-43	TP+7.8mで砂層	大阪市文化財協会1983d
NG83-54	TP+8.1mで砂層(NG5層か)	大阪市文化財協会1983e
NG83-65	弥生中期遺物、古墳中期土壤状追構	大阪市文化財協会1983f
NG84-4	古墳中期溝・土塙、飛鳥水田	大阪市文化財協会1984a
NG84-18	TP+8.2mで泥質土層	大阪市文化財協会1984b
NG84-49	TP+7.7mで砂層	大阪市文化財協会1984c
NG84-86	弥生後期～古墳中期遺物、庄内期井戸・建物、古墳中期土壤	大阪市文化財協会1984d
NG85-17	純文晩期遺物	大阪市文化財協会1985
NG85-6	TP+7.8mで砂層(飛鳥初期の須恵器が出土)、飛鳥包含層、奈良溝	大阪市文化財協会1988
NG95-57	TP+8.2mで砂層(古墳後期中葉の須恵器が出土)、古墳後原棚、平安集落	大阪市文化財協会1998
NG95-77	TP+8.0mで砂層(古墳後期前葉の須恵器が出土)、古墳後原棚	大阪市文化財協会1995
NG96-9	弥生後期末～古墳初期水田、TP+8.2mで砂層、飛鳥・平安集落	大阪市文化財協会1999a
NG96-40	TP+7.5～8.2mで砂層、飛鳥～平安溝	大阪市文化財協会1999a
NG96-66	弥生中期～庄内期遺物、TP+7.8mで砂層、古墳後期～奈良集落	大阪市文化財協会1999a
NG96-79	旧石器遺物、TP+7.5mで砂層、飛鳥・平安井戸・溝	大阪市文化財協会1995
NG97-12	旧石器遺物魚中部、純文遺物、古墳中期木製品、飛鳥窓屋・掘立柱建物	大阪市文化財協会2000
NG97-13	古墳自然流路、平安溝	大阪市文化財協会2000
NG97-41	平安時代溝・自然流路、古墳時代水田・弥生中期溝・弥生前期自然流路	大阪市文化財協会1997
NG97-43	弥生後期溝、古墳時代自然流路、飛鳥溝・土塙	大阪市文化財協会2000
NG97-52	旧石器遺物、純文遺物、古墳中期木製品、古墳後期土手状追構、飛鳥遺構	大阪市文化財協会2000
NG97-56	純文後期溝込み跡、平安時代土手状追構	大阪市文化財協会2000
NG98-19	古墳中～後期法溝・土器跡・須恵器・玉類・鰐塙土器	本書収録
NG98-20	古墳中～後期法溝・古墳中期土塙状追構・堅穴式住居・古代～中世耕疇	本書収録
NG99-19	1999年度東部地区区画整理事業関係調査	大阪市文化財協会1999b
NG99-41	1999年度東部地区区画整理事業関係調査	大阪市文化財協会1999c

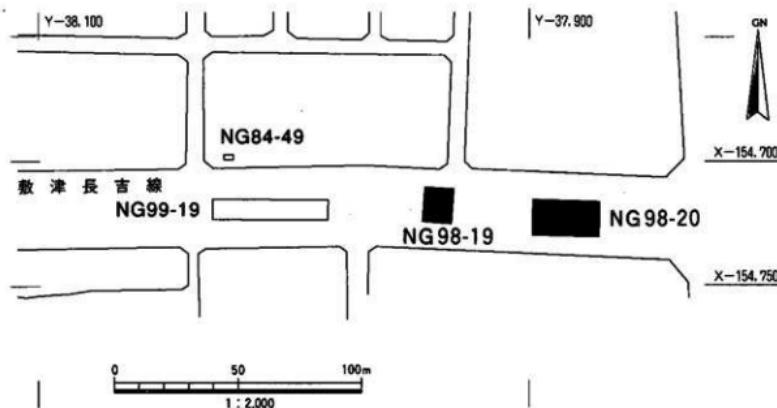


図3 1998年度調査地の配置

し、1997年度に「長原遺跡東部地区発掘調査報告」I [大阪市文化財協会1998]として刊行している。

1996年度の調査(NG96-9次)は、前年度の調査地の南側に位置する長さ42m部分(図2)を対象に行った。調査では、平安時代から鎌倉時代の遺構群、飛鳥時代の掘立柱建物、弥生時代後期から古墳時代初頭の水田などを検出した。また、この年度には大正川の西側に沿う都市計画道路長吉3号線予定地も調査の対象となり、文化財保護課と区画整理事務所の立会のもと、5月に2箇所の試掘調査を行った。この結果、1995年度の調査で検出した古墳時代後期の厚い洪水堆積層と同様の地層を確認した。古墳時代以前の遺構面はその下に存在することから、現地表下4mまでを調査の対象とすべきとの結論となった。この協議の結果をうけて、長吉2号線との交差点の北側にあたる部分で2箇所(NG96-40・66次)の調査を行った。調査では、古墳時代後期から飛鳥時代の掘立柱建物、平安時代の遺構群を検出した。その成果は翌1997年度に整理作業を実施した上で、1998年度に「長原遺跡東部地区発掘調査報告」II [大阪市文化財協会1999a]として刊行している。

1997年度の調査は、都市計画道路長吉2号線予定地で3箇所(NG97-12・13・52次)、同長吉3号線予定地で1箇所(NG97-43次)、同敷津長吉線予定地で1箇所(NG97-56次)の合計5箇所で行った(図2)。このうちNG97-52次調査では、現地表下8mの深さまで平面的な調査を行うことができた。調査では旧石器時代の石器製作跡、弥生時代中期初頭の水田、古墳時代の土手状遺構、飛鳥時代および平安時代の遺構群が見つかっている。中でもNG97-12次調査で見つかった旧石器時代の石器製作跡では、約50点のナイフ形石器や削器とともに14,000点に及ぶ剥片などが出土しており、後期旧石器時代の石器製作技法に係わる重要な資料として注目されている。その成果は翌1998年度に整理作業を実施した上で、1999年度に「長原遺跡東部地区発掘調査報告」III [大阪市文化財協会2000]として刊行している。

1998年度の調査は、長吉六反4丁目地内で都市計画道路敷津長吉線予定地の東端にあたる2箇所(NG98-19・20次)で行った(図2・3)。NG98-19次調査は、東西約12m、南北約14mの調査区

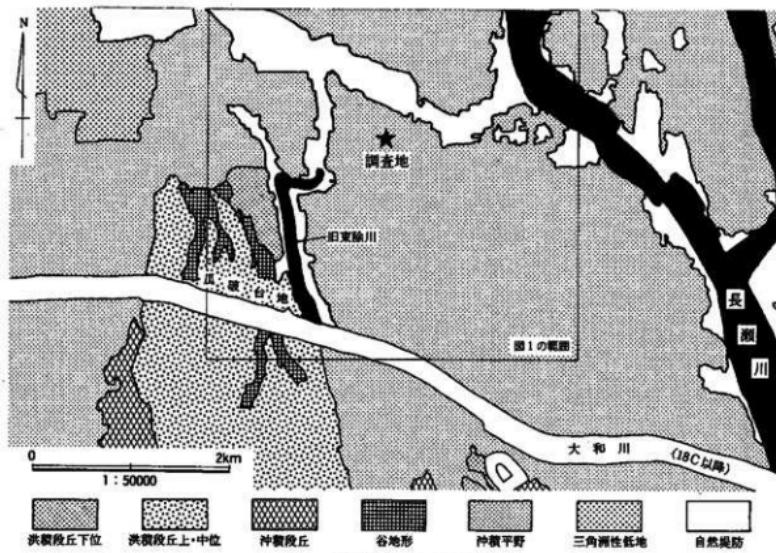


図4 長原遺跡周辺の地形分類

を設定し、1998年7月1日～同年10月6日にかけて実施した。シートバイルを打設し、土留支保工を行いながら現地表下8mまでの調査を予定していたが、約4m掘下げたところで古墳時代中期の遺物を大量に含む遺構が見つかったため、それ以下については地層の堆積状況を探るためのトレンチ調査に止めた。NG98-20次調査地はNG98-19次調査地の東方に位置する。調査は、東西約28m、南北約15mの調査区を設定し、1998年7月3日～1999年1月22日にかけて実施した。調査深度が現地表下約8mに及ぶと予想されたため、シートバイルを打設し、2段の土留支保工を行いながら調査を進めた。本書で報告するのは、これら2箇所の発掘調査の成果である。なお、整理作業は1999年度に行った。調査面積・担当者などについて表2に記した。

2) 遺跡の立地と調査地の位置

長原遺跡は大阪市平野区に位置し、旧石器時代から現代にいたる複合遺跡である。立地は瓜破台地と呼ばれる現大和川以北の河内台地の先端部にあたり、それに接する沖積平野にまたがる場所である(図4)。瓜破台地を形成する低位段丘構成層は、西縁では急な傾斜で沖積層の下に潜り込むが、東縁は北東に向って緩やかに沖積層の下へ埋没している。したがって、遺跡の西・西南・中央などの各地区(図1)では低位段丘面の埋没深度は比較的浅くなっている。一方、長原遺跡の北側に拡がる沖積平野には幾筋もの河川と自然堤防が見られる。これらの自然堤防上には、竹瀬・亀井・跡部・太子堂などの遺跡が立地し、さらにその北側には久宝寺遺跡・渋川廃寺、東側には木の本・八尾南遺跡が展開している。瓜破台地の東縁ではほぼ南北に延びる自然堤防は旧東除川によって形成されたもので、近

第Ⅰ章 長原遺跡東北地区の発掘調査

世以降に下る。また、長原遺跡の西側の台地上には瓜破遺跡が、その北側に喜連東遺跡が立地している。

区画整理事業施行予定地域は長原遺跡東北地区内にあり(図1)、地形的には沖積平野内にあたる。本年度調査したNG98-19・20次調査地は地区の東部にあたり、1995年度以来行われてきた東北地区の調査では未知の場所である。
(松本)

表2 1998年度実施発掘調査の期間など

計画道路名	調査次数	調査地番	東西×南北	面積	調査期間	担当者
敷津長吉線	NG98-19	平野区長吉六反4丁目6	12m×14m	168m ²	1998年7月1日～1998年10月6日	小倉徹也
	NG98-20	平野区長吉六反4丁目6	28m×15m	420m ²	1998年7月3日～1999年1月22日	松本百合子
調査面積合計	588m ²					

第2節 発掘調査の経過と概要

1) NG98-19次調査

調査地は平野区長吉六反4丁目の東西方向に延びる計画道路内に位置する。道路本来の幅は32.5mであるが、現在使用中の道路を除き、さらに工事車両の通行と作業空間を確保するために、調査区は東西12m、南北14mに設定した。調査に係わる全作業期間は表2のとおりであるが、実際に調査を行った期間は1998年7月22日～同年9月18日である。それ以外は、シートパイルによる土留支保工などの準備工と、埋戻しおよび撤収作業の期間である。

調査は7月22日から重機掘削を開始し、同時に水準点の移動を行った。掘削は現地表下1.2mの現代耕作土までとした。7月28日に調査区内の遺構検出を開始し、7月31日には1段目の切梁を架設した。8月5日には平安時代までの調査を終了し、8月6日から再び重機で古墳時代中期から飛鳥時代にかけて堆積した厚さ1.5mの水成層を掘削した。8月27日からは現地表下4mにある古墳時代中期の遺構を調査した。ここで大量の土師器を伴う土壇状遺構が見つかったために、調査の重点を古墳時代の遺構と遺物の検出に置くことになった。遺物が集中する部分の土壇は持ち帰り、水洗してさらに遺物の捕集を行った。

調査期間などの事情により、平面的な調査は現地表下4.5mの弥生時代の地層まで行った。その後、一部分を绳文時代中期の地層まで掘削し、断面の観察のみを行って9月18日に調査を終了した。したがって当初予定していた2段目の切梁は、調査が設置深度に達しなかったため、架設しなかった。



写真1 NG98-19次調査風景

2) NG98-20次調査

調査地はNG98-19次調査地の約50m東方にあたり、同じ計画道路内に位置する。道路本来の幅は32.5mであるが、現在使用中の道路を除き、さらに工事用車両の通行と作業空間を確保するために、調査区は東西28m、南北15mに設定した。調査に係わる全作業期間は表2のとおりであるが、実際に調査を行った期間は1998年8月24日～同年11月27日である。それ以外は、シートパイルによる土留支保工などの準備工と、埋戻しおよび撤収作業の期間である。

調査は8月24日から重機掘削を開始し、同時に水準点の移動を行った。重機による掘削は現地表下2.0mの平安時代の作土層までとした。8月28日から遺構検出を開始し、9月8日から1段目の切梁を架設した。9月14日には奈良時代から平安時代の調査を終了し、9月18日には調査区の西端部分の古墳時代後期と予想される暗色帶の調査を行った。9月21日には台風7・8号が接近したために、



写真2 NG98-20次調査風景

調査地周辺の整備を行い、翌日の暴風雨に備えた。9月25日から再び重機掘削を開始し、古墳時代中期から飛鳥時代にかけて堆積した厚さ1.2mの水成層を除去した。10月9日までには古墳時代の流路の調査を終え、それと併行して10月27日まで調査区東端で見つかった古墳時代中期の土壇状遺構を調査した。土壇状遺構の下位層からは竪穴式住居と弥生時代の溝が見つかったが、10月20日より西端から重機掘削をはじめていたため、東端の遺構検出部分を残しながらの掘削となった。重機掘削はいったん現地表下5.5mまで行い、縄文時代後期の暗色帯を調査したのち、10月29日には2段目の切梁架設工事に入り、11月4日から再び重機掘削を開始し、縄文時代中期から後期にかけて堆積した厚さ1.2mの洪水堆積層を掘削した。ただし、ここからは面積を2／3に減じて調査を行った。11月19日に縄文時代中期の暗色帯を調査したのち、さらに調査面積を半分に減らして、最後の重機掘削を行った。11月24日に現地表下7.5mで縄文時代前期と考えられる地層を確認し、そこから低位段丘構成層の上部まで調査を行った。11月27日には沖積層最下部の生痕化石中から、サヌカイト製剣片を1点検出して調査を終了した。

(松本)

第Ⅱ章 長原遺跡東北地区における層序

長原遺跡東北地区では、発掘調査の増加に伴って沖積地特有の地層のようすが明らかになってきた。また、長原遺跡内のほかの地区には存在しなかった古墳時代から平安時代にかけての地層や、縄文海進に係わる地層も発見されている。こうした成果をもとに「長原遺跡東北地区の基本層序」[大阪市文化財協会1999a]が提唱され、河内平野の南部にあたる沖積地の地層の特質が示された。

本年度の調査地は東北地区的東部にあたり、ここでも厚い沖積層が確認できた。各層の特徴は第Ⅲ章各節の「地層と遺物」に記してあるが、本書の記述の際の説明と地層の対比は、遺跡東南地区の台地部分を模式地とした「長原遺跡の標準層序」に準じて行った。従来のままでは対比しきれない地層は、必要に応じて追加・修正を行い、それによって改訂された「長原遺跡の標準層序2001」[大阪市文化財協会2001]を表3として転載した。新たに追加されたのは、長原7B0・12D・17~20層で、再整理されたのは長原7B・9A'・12C・12/13漸移帶層などである。

ここでは、今回の調査に関連する長原0~14層までを取り上げ、東北地区で観察できる層相を中心として概略を説明する。なお、詳細は表3および[越哲済2001]を参照されたい。

1) 沖積層上部層

長原0層：現代の盛土層および搅乱層である。

長原1層：現代の作土層である。

長原2層：おもに砂混りシルトで構成される作土層である。さらに細分が可能であり、各層で耕作に係わる小溝が検出されている。伊万里系の染付磁器など、国産陶磁器を含む。

長原3層：シルト～細粒砂で構成される作土層である。さらに細分が可能であり、各層で耕作に係わる小溝や島畠溝が検出されている。瓦器(C-IV~V期)・瓦質土器・陶器などを含む。

長原4A層：おもに中粒砂で構成される、斜行葉理の顕著な水成層である。下位層上面の人工河川を埋積している。土師器・瓦器(C-III~IV期)を含む。

長原4B層：おもに粘土質シルト～細粒砂で構成される作土層である。長原4Bi~iii層に細分されるが、数枚の水成層を挟む場所ではさらに細分が可能である。一部地域では集落地内での堆積状況も見られ、井戸・掘立柱建物などが検出されている。土師器・黒色土器・瓦器(C-I~III期)を含む。

長原4C層：おもに砂混りシルトで構成される作土層である。長原4Ci・ii層に細分されるが、数枚の水成層を挟む場所ではさらに細分が可能である。各層で溝や水田が検出されている。土師器・須恵器・黒色土器(平安時代I~III期)を含む。

長原5A層：遺跡の南・東南地区では砂礫を主体とした氾濫性の堆積層である。東北地区では奈良時代後半から平安時代初頭の土師器・須恵器を含む地層がこれにあたる。

長原6A層：遺跡の南部地域では作土層の長原6Ai層と水成層の長原6Aii層に細分される。東北地区では、飛鳥時代から奈良時代前半の土師器・須恵器を含む作土層がこれにあたる。

長原6B層：遺跡の南部地域では作土層の長原6Bi層と水成層の長原6Bii層に細分される。東北地区では明確な水成層はなく、長原6A層と同様、飛鳥時代の遺物を含む作土層がこれにあたる。

長原7A層：遺跡の南部地域では、作土層と粘土層の長原7Ai・ii層に細分される。東北地区では氾濫性の河成堆積層がこれにあたり、土師器・TK209型式の須恵器を含む。

長原7B0層：東北地区を模式地とする。砂礫～粘土質シルトで構成される氾濫性の河成堆積層である。下位層に由来する多時期にわたる遺物を含むが、最新の遺物はTK10型式の須恵器である。

長原7Bi層：遺跡の南部地域では、砂礫で構成される古土壤および作土層からなる。土師器・TK23～MT15型式の須恵器・埴輪を含む。東北地区では古土壤と、その下位にある氾濫性の河成堆積層がこれにあたる。

長原7Bii層：極細粒砂～粘土質シルトで構成される、氾濫性の河成堆積層である。東北地区では下位に植物遺体を多く含むシルト～粘土質シルトが堆積している。なお、長原7Bi・ii層堆積期に長原古墳群が造営されている。

長原7Biii層：おもに粘土質シルトで構成される古土壤および作土層である。遺跡の南部地域では古土壤の下限に層理面ではなく、下位層へ漸移している。弥生時代後期から古墳時代中期の遺物を含む。東北地区では北に向ってさらに細分が可能となる。

長原8A層：遺跡の南部地域では氾濫性の河成堆積層である。東北地区では極細～粗粒砂混り粘土となり、一部暗色化している。

長原8B層：上部は水漬かりの砂質シルトであり、下部はシルト質中粒砂で構成される古土壤である。遺跡の東南地区において畿内第Ⅲ・Ⅳ様式の弥生土器を伴う方形周溝墓が検出されている。

長原8C層：東北地区を模式地とする。長原8Ci・ii'・ii層に細分され、畿内第Ⅱ様式の弥生土器を含む。長原8Ci層は氾濫性の河成堆積層である。長原8Cii'層は長原8Cii層を耕起した作土層であり、導水路を伴う長原遺跡最古の水田が検出されている。長原8Cii層は水漬かりのシルト質粘土層である。

長原9A層：おもに砂質シルトで構成される古土壤で、一部は水漬かりの水成層となる。局所的に数枚の水成層を挟み、細分が可能である。長原式土器・畿内第Ⅰ様式の弥生土器を含む。

長原9B層：遺跡の南・南東地区を模式地として長原9Bi～v層に細分される。基本的には砂礫～シルト質粘土で構成される氾濫性の河成堆積層である。東北地区では厚く堆積する。

長原9C層：遺跡の南・南東地区を模式地として、長原9Ci～iii層に細分される。基本的には、砂礫～シルト質粘土で構成される氾濫性の河成堆積層と、一部水漬かりの古土壤からなる。長原9Ci層の上面では、縄文時代晩期の滋賀里IV式土器が見つかっている。

長原10層：砂礫～細粒砂で構成される氾濫性の河成堆積層である。東北地区からは縄文時代後期前半の北白川II～III式土器が見つかっている。

長原11層：砂礫～粘土質シルトで構成される氾濫性の河成堆積層である。

長原12A層：東北地区を模式地として広域に分布する。長原12Ai・ii層に細分されるが、長原12A

i層は数枚の水成層を挟むため、さらに細分が可能である。縄文時代中期末の北白川C式土器・里木II式土器を含む。

長原12B層：東北地区を模式地とする。長原12Bi～iv層に細分される。長原12Bi層は細粒砂質シルト～粘土で構成される。一部古土壤、一部水漬かりの暗色帶からなる。局所的には水成層を挟むため、さらに細分が可能である。長原12Bii層は粗粒砂～シルト質粘土で構成される氾濫性の河成堆積層である。東南地区では下位の長原13層を下方浸食する。本層と下位の長原12Biii層にまたがって、縄文時代中期前半の船元II式土器が見つかっている。長原12Biii層はシルト～粘土で構成される、一部古土壤、一部氾濫性の河成堆積層である。長原12Biv層は上半分がシルト質細粒砂、下半部がシルトであり、平行ラミナが発達する。分布深度が低い地域では、シルト～粘土からなる水漬かりの堆積状況を見せる。東南地区では古川辺谷と呼ぶ台地上の浅い谷を下方浸食して埋積している。

2) 沖積層中部層

長原12C層：東北地区を模式地とする。長原12Ci～iii層に細分される。長原12Ci層はおもに粗粒砂で構成され、小型の甲殻類のものと見られる巣孔の化石による擾乱が著しい。植物遺体が密に含まれるところもある。長原12Cii層はおもにシルトで構成される。本層および下位層にかけては、直径が4cm前後の甲殻類のものと見られる巣孔の化石による擾乱が著しい。長原12Ciii層は上半部が水漬かりのシルトで構成される。下半部は大型植物遺体を含む砂質シルト～砂層で、下底にはガラス質火山灰層(横大路火山灰、Ah火山灰)が挟まる。

長原12D層：東北地区を模式地とする。長原12Di・ii層に細分される。長原12Di層は細粒砂質シルトで構成され、上位層からの生痕化石により、擾乱が著しい。長原12Dii層は砂混りの砂層で、連続性の低いシルトの薄層を数枚挟む。本層も上位層からの擾乱を受ける。

3) 沖積層下部層

長原13A層：長原13Ai・ii層に細分される。長原13Ai層は細粒砂質シルトで構成される。長原13Aii層は阪手火山灰と考えられる火山灰層で構成される。後期旧石器時代後半の石器遺物を含む。

4) 低位段丘構成層

長原13B層：砂礫質粘土からなる長原13Bi層と、ガラス質火山灰層(平安神宮火山灰、AT火山灰)からなる長原13Bii層に細分される。後期旧石器時代の石器遺物を含む。

長原13C層：粘土質シルトで構成され、一部古土壤、一部水漬かりの堆積を見せる。

長原14層：上部がシルト質砂ないし砂質粘土で、下部が砂礫ないし砂質シルトで構成される。本層の下底付近からは、後期旧石器時代前半に属する石器遺物が出土している。

(松本)

表3 長原遺跡の標準層序 2001

層序	岩相	厚さ (m)	自然段	おもな遺構・遺物	C14yBP	時代	
NG0層	現成土	-				近代・現代	
NG1層	現代成土	13-25				近世	
NG2層	合織物底一青褐色シルト質砂	6-34	1小段落・底層 1中段落 1上段落	谷花・底漆・底戸物底 瓦器・底漆・底戸物 瓦器 (C-E-V期)	(400)		
NG3層	合織物底-灰褐色土質シルト	13-20					
NG4A層	金縫織物底-中段落	8-15				室町	
NG4B層	底灰褐色 織物底- シルト	an.30		灰褐色 底漆 底漆 土質	~木造漆 底漆 底漆 土質	(800)	室町
NG4C層	灰褐色シルト 現成土- シルト	an.15			瓦器 (C-I-V期)	平安	
NG5A層	灰色砂質シルト質砂	an.20		木造漆	平安 I - II 期		
NG5B層	青灰色砂質シルト	2-4			平安V ~ VI	奈良	
NG6A層	青灰色砂質-底漆	an.30	テニシ	木造漆	平安VII		
i	地盤色砂質シルト	an.5					
ii sp.	底土質シルト-底漆	an.10		ヒトと底漆の足跡			
iii	底土質シルト-底漆-青灰色砂質層の瓦器	an.15		木造漆			
NG6B層	合色-緑褐色-青褐色シルト質砂土	an.15	テニシ	瓦器	飛鳥		
i	底色織物-シルト-底漆質砂	an.5					
ii	底色織物-シルト-底漆質砂	an.5					
NG7A層	合色織物- 底色織物	an.10	電直	木造漆	飛鳥 I - II TR20		
NG7B層	明神織物-モリーブ-底色織物シルト	an.20		木造漆	TR15	古墳後期	
i	底色織物-底質土-底色シルト	an.35		長屋古墳	墳頂V期 - TR33-47 - MT15	古墳中期 古墳中期 古墳前期	
ii	緑色織物-底質土-モリーブ正型	an.20		木造漆	TR216		
iii	地盤色織物シルト	an.5		木造漆	方形周壁墓・第六丘房	古墳後期	
NG8A層	空灰-底灰-砂-砂-底土	an.40		木造漆	木造漆-円筒式・凸巻式石頭	古墳中期	
NG8B層	暗灰色シルト	an.30		木造漆	木造漆	古墳中期	
NG9C層	にぼ-青褐色-底漆-中段落	an.35		木造漆-底-ヒトの足跡	木造漆作法・側内底I様式・石頭	古墳中期	
i	灰色シルト質砂土	an.10					
ii	青褐色シルト質砂土	an.15					
NG9D層	底色織物-シルト質砂土	an.15	板直	木造漆の底	側内底I様式・底延式・石頭	古墳後期	
NG9E層	灰モリーブ-底色織物	an.50					
i	暗灰色シルト質砂土、植物片多合	an.40			側内底I様式・側外		
ii	モリーブシルト質砂土	3-14					
iii	モリーブシルト質砂土	an.30	アラシ イヌタガ	モリーブシルト モリーブシルト	底延式・石屏の例・等		
v	モリーブシルト-砂	an.35	アラシ イヌタガ	モリーブシルト モリーブシルト	一底延式底- 底延式石屏		
NG9F層	底延-底延合-シルト質砂土	2-8					
ii	底色シルト質砂土-砂	3-10					
iii sp.	オリーブ-底-底色シルト-植物砂質土	7-25					
iii bw.	底延色シルト-底土質織物	an.5	モリーブシルト (BB77)		飛文		
NG10層	底延-モリーブ-底色織物-シルト	an.30	一底延		北西川上層 I - Ⅲ式		
NG11層	灰色シルト質砂土	an.15	一底延				
NG12A層	青褐色質砂色織物シルト	an.15	一底延		黒木I式・北西川I式・石頭	- 470±140 (IGM-1494)	
i	モリーブ織物シルト質砂、織物	an.30				- 490±140 (IGM-1494)	
NG12B層	暗褐色織物質シルト	an.20		一底延?		黒木II式	
i	暗褐色織物質シルト-底色織物質砂	an.30					
ii	底延色シルト-モリーブ-底色シルト質砂土	an.30		シカ・トリの足跡			
iv	底延色織物-底色シルト質砂土	an.15					
NG13C層	底延色-モリーブ-底色シルト-底土	an.25					
i	底延色-底延織物	5-10					
ii	底延色シルト質砂土、植物片多合	an.30					
iii	底延色シルト-底土	an.40					
iv	モリーブ底延シルト	an.20					
NG12D層	底延色-モリーブ-底色シルト質砂土	an.35		ワ土壁 モリーブ作法	四辺式石屏	- 490±140 (IGM-1494)	
i	底延色-モリーブ-底色シルト-底土	an.35					
ii	底延色シルト質砂土	an.30					
iii	底延色シルト-モリーブ-底色シルト質砂土	an.30					
iv	底延色織物-底色シルト質砂土	an.15					
NG13E層	モリーブ底延織物質砂シルト	20-30			大井	伴我土器	

中位段階	上位段階	下位段階	岩相	地層名	記述	厚さ	特徴	層序	層序名
NG13A層	I	I	灰色細粒土、シルト層理を有する 灰色細粒シート	約40			有茎苔群落・無石刃		
		II	灰窯・合会式細粒シート（火山灰質） 黄褐色細粒シート・黄粘土	約3	一帶岩帶	△石器製作帯	網目・ナイフ形石器・刮削器・石核 刮片・石核		（15000）
NG13B層	I	I	黄褐色・灰黄色シート・黄粘土	約3	一灰岩				- 23000
		II	黄褐色細粒シート・黄灰土灰	約3	一平安神宮灰土灰層（AT）				
NG13C層	I	I	灰窯・鐵灰土・黃褐色シート・黃粘土	約12					
		II	灰窯・鐵灰土・黃褐色シート・黃粘土	約40			網目		
NG14層	I	I	灰窯・鐵灰土・黃褐色シート	約3			△石器製作帯	網目・ナイフ形石器・刮削器・片石器	
		II	灰窯・鐵灰土・黃褐色シート	約3					
NG15層	I	I	灰窯色・無灰色粘土・等厚層 シート・砂層	約450			△ノマツハグ △ラクサンブナの葉跡		
		II							
NG16A層	I	I	暗灰・灰青色シート・砾状り砂互层	約10					
		II	褐褐色花灰質粘土：複式地層	約30	一含石核・ナイフアンソウとオオノゾカの足跡化石 ○含サガリ山灰土灰層標本（As-4）				- 27000
NG16B層	I	I	褐褐色花灰質粘土：複式地層	約30	一含灰田川山灰層標本（Xt-6）				- 21000
		II	褐褐色花灰質粘土シート：鉄成～ 灰成層	約30	△ノラの足跡化石の凹み				
NG17A層	I	I	オーリー灰色砂質粘土：古土壤	約30					
		II	オーリー灰色砂質粘土シート：鉄成 層地層	約30	一ナラマンブウ白身（ラメラ片）				
NG17B層	I	I	褐褐色砂質粘土シート：鉄成～田沢性層	約30					
		II	褐褐色砂質粘土シート：鉄成層	約30					
NG18層	I	I	褐褐色砂質シート・鐵成色砂層	約65			△ノラの足跡化石の凹み		
		II	褐褐色砂質粘土～鐵成色砂層 に含む	約30					
NG19層	I	I	褐褐色砂質粘土～鐵成色砂層	約30					
		II	鐵成色砂質粘土シート：下部で粗粒 に含む	約30					

- : 上部検出位置 I : 下部検出位置 △ : 地層内検出位置

Ch. R. B. 土壌

[越智清 1995] を改変



第Ⅲ章 調査の結果

第1節 NG98-19次調査

1) 地層と遺物

i) 層序

本調査区における現地表面はTP+10.5m前後である。現地表面から深さ1.3mまでは現代の客土であり、それより下位に現代の作土以下の地層が良好に遺存していた(図5・6、図版1)。ここでは層序の概略を記し、「長原遺跡の標準層序2001」[大阪市文化財協会2001]との対比を行う。層序番号は次節のNG98-20次調査と共通である。各層の厚さなど、詳細は表4を参照されたい。なお、層位ごとに調査できなかった地層は、表4の遺物の行をまとめて記載している。また、調査深度の都合により第9bv層以下の地層は部分的なトレンチ内の観察である。

表4 NG98-19次調査地の層序

層序	基準標準層序	層相	厚さ(cm)	遺構	遺物	自然現象	特徴
第0層	NG0	現代客土	ave. 130				作土
第1層	NG1	暗灰質色(25Y4/2) 砂質シルト	2~15				作土
第2ai層		暗オーリーブ灰色(23Y4/1) 塵粒粘質シルト	5~15			伊万里焼・官窯 信楽焼・土師器	作土
第2ai層	NG2	暗緑灰色(25G Y4/1) シルト～粘質砂	7~17				作土
第2b層		暗オーリーブ灰色(23G Y3/1) 合織繊維シルト質粘砂	6~20			伊万里焼・瓦器 土師器・信楽器・麻色土器	作土
第3ai層		暗緑灰色(25G Y4/1) 合織繊維シルト質粘砂	5~13				作土
第3ai層	NG3	暗オーリーブ灰色(23G Y4/1) 合織繊維砂質シルト	4~17	▲踏込み		土師器・瓦質土器・瓦器	作土
第3aa層	NG4A	灰オーリーブ色(23Y4/2) 中～粗粒砂					水成
第3bi層		灰色(20Y4/1) 粗粒砂質シルト～中粒砂	6~23				作土
第3bi層		灰色(25Y4/1) 粗粒砂質シルト～細粒砂	5~24	▲踏込み			作土
第3ci層		灰色(23Y4/1) 合織繊維シルト	5~14			土師器・瓦器	作土
第3di層		暗オーリーブ灰色(23G Y4/1) 合織繊維砂質シルト	5~17	▲踏込み			作土
第3di層		灰色(20Y4/1) 合シルト～中粒砂	5~15			土師器・須恵器	作土
第3e層		暗オーリーブ灰色(23G Y3/1) シルト質粘砂	5~15				作土
第4a層		オリーブ灰色(20G Y3/1) 細繊維～粗粒砂	5~31				水成
第4bi層		灰オーリーブ色(23Y4/2) 粗粒砂	5~32			黒色土器B・て字口鋸風	作土
第4bi層	NG4 Biii	灰色(20Y4/1) 粗粒砂	5~22				水成
第4ci層		灰色(20Y4/1) 合シルト～粗粒砂	5~21				作土
第4ci層		灰(23Y4/1) 中～粗粒砂	5~15			土師器・須恵器・瓦器 黑色土器B・銀雀土器	水成
第4ci層	NG4 C	オリーブ褐色(20Y3/1) 粗粒砂質シルト	5~20	▲踏込み			作土
第4ci層		暗オーリーブ灰色(23G Y4/1) 中～粗粒砂	5~5				水成
第5a層	NG5A	灰色(20Y4/1) 粗粒砂質シルト	5~20	▲踏込み		土師器・須恵器・黑色土器	作土
第6bi層	NG7 A	灰(20Y4/1) シルト～粗粒砂	25~37				水成
第6bi-a層	NG7 B0	灰(20Y4/1) 粗粒砂～シルト	6~32				植物遺体 水成
第7ai層	NG7 Bi	灰(20Y4/1) シルト～粗粒砂	3~17				水成
第7ai層		オリーブ褐色(20Y3/1) 粗粒砂	4~16				水成
第7aa層	NG7 Bi	オリーブ褐色(20Y3/1) 粗粒砂～シルト	2~13				水成

表4 NG98-19次調査地の層序(続き)

層序	長標標準層序	層相	thickness (cm)	造構	遺物	自然現象	特徴
第7ab層	NG7Bii	灰色 (30Y4/1) シルト	2~10				水成
第7av層		灰色 (30Y4/1) シルト	3~17				水成
第7aw層		オリーブ黒色 (5Y3/1) 含植物遺体シルト～粗粒砂	6~22		木製品	植物遺体 昆蟲化石	水成
第7avd層		黄灰色 (25Y4/1) シルト～粗粒砂	8~25			植物遺体	水成
第7avf層		オリーブ黒色 (10Y3/1) シルト	≤6		木製品	植物遺体 昆蟲化石、炭化物	水成
第7ax層		暗オリーブ灰色 (25G Y3/1) シルト～粗粒砂	4~9				水成
第7az層		オリーブ黒色 (10Y3/1) シルト～粗粒砂	4~16		木製品	炭化物	水成
第7axd層		オリーブ黒色 (10Y3/1) シルト～粗粒砂	2~9				水成
第7axf層		オリーブ黒色 (5Y3/1) 粗粒砂	≤6	▲隙込み	土器部・木製品	植物遺体	水成
第7axm層		オリーブ黒色 (5Y3/1) シルト～粗粒砂	≤8		弥生土器・土器部 木製品	植物遺体 高麗小器 二次貝化石	水成
第7axn層		オリーブ黒色 (10Y3/1) シルト～粗粒砂質シルト	4~14			炭化物 高麗小器	水成
第7axo層		オリーブ黒色 (5Y3/1) シルト～粗粒砂	≤5				水成
第7bi層	NG7Biii	オリーブ黒色 (5Y3/1) シルト質粗粒砂 第7axv-xv層の発達を含む	4~19	▲隙込み	土器部 (5世紀前半) 須恵器・織錦土器 弥生土器・縄文土器 木製品・炭化木	堅乱・穂子 巻き貝化石	雨露状 斑状風化土
第7bii層		オリーブ黒色 (5Y3/1) 含植物シルト質粗粒砂	≤19		土器部 (5世紀前半) 須恵器・織錦土器 土輪・土器部 弥生土器・骨・金 炭化木	植物遺体 昆蟲化石・穂子	SX701 盛土
第7bir層		黒色 (5Y2/1) 中～粗粒砂質シルト	≤10		土器部・織錦土器 弥生土器	炭化物	SX701 盛土
第7bw層		黒色 (5Y2/1) 粗粒砂質シルト	≤15	▲SX701 (土層状況)	弥生土器・土器部 織錦土器・木製品	穂子・暗赤色	
第8ai層	NG8A	オリーブ黒色 (5Y3/1) 含粗粒砂質シルト	≤13		弥生V様式		
第8bi層	NG8B	オリーブ黒色 (7SY3/1) 粗粒砂質シルト	≤12	▼SK801			
第9ai層	NG9A	オリーブ黒色 (7SY3/1) 含中粒砂粗粒砂質シルト	≤18		長原式土器・弥生土器	暗色帶	
第9aii層		暗オリーブ色 (2SY G Y3/1) 粗粒砂質シルト	≤3			堅乱	水成
第9aiii層		黒色 (7SY2/1) 粗粒砂質シルト	15~30			暗色帶	
第9aiii層		オリーブ黒色 (5Y3/1) 粗粒砂質シルト	≤20				水成
第9aiii層		暗オリーブ灰色 (25G Y4/1) 中～粗粒砂	≤32	▲隙込み		堅乱	水成
第9aiii層		黄褐色 (25Y3/1) 細～中粒砂	≤14		長原式土器	暗色帶	
第9aiii層		綠褐色 (10G Y3/1) 細粒砂	≤31			炭化物 植物遺体	水成
第9aiii層		オリーブ黒色 (10Y3/2) 粗粒～粗粒砂	≤10				水成
第9aiii層		灰オリーブ色 (7SY5/2) 粗粒砂～中粒	≤40				水成
第9aiii層		灰オリーブ色 (7SY4/2) 粗粒砂～中粒	≤13				水成
第9aiii層		灰オリーブ色 (5Y5/2) 粗粒砂～細緻	≤18				水成
第9aiii層		灰色 (5Y5/1) 粗粒砂～細緻	≤26				水成
第9aiii層	NG9Biv	灰色 (5Y4/1) 細～粗粒砂	≤19			炭化物 植物遺体	水成
第9aiii層		黑褐色 (25Y3/1) 粗粒砂	2~5			暗色帶	水成
第9aiii層		黑褐色 (25Y3/1) 粗粒砂	5~12			炭化物 植物遺体	水成
第9aiii層		オリーブ黒色 (5Y3/2) 粗粒砂～シルト	5~10			暗色帶	水成
第9aiii層		黑色 (5Y2/1) シルト	5~10			炭化物 植物遺体	水成
第9aiii層		暗オリーブ色 (25G Y4/1) 細～粗粒砂	1~8				水成
第9aiii層		黑色 (5Y2/1) シルト	20±			暗色帶	
第9aiii層	NG9C	黑色 (5Y2/1) 粘土質シルト～粗粒砂	17~30			暗色帶	
第10a層	NG10	暗オリーブ灰色 (25G Y4/1) シルト	50~55				水成
第10b層		灰色 (10Y4/1) 粗粒砂	8~10				水成
第11a-b層	NG11	灰色 (7SY4/1) シルト～粗粒砂 a-b	5~15				水成
第12a層	NG12A	黑色 (5Y2/1) シルト	20±			暗色帶	

▲：上面後出造構 ▼：下面後出造構

沖積層上部層

第0層は現代の盛土層である。

第1層は厚さ約15cmの、近・現代の作土層である。調査区の全面に分布し、長原1層に相当する。

第2層は総厚約35cmの、粗粒砂混り砂質シルトからなる近世の作土層である。調査区の全面に分布し、a・b層に大別できる。18世紀以降の伊万里焼・京焼・信楽焼を含み、長原2層に相当する。

第2ai層：暗オリーブ灰色極粗粒砂質シルト層である。下面で耕作に係わる小溝を検出した。

第2aii層：暗緑灰色シルト質中粒砂層である。層中および下面で耕作に係わる小溝を検出した。

第2b層：暗オリーブ灰色砂礫混りシルト質細粒砂層である。下底部に水成の細粒砂を多く含む。

第3層は総厚30~60cmで、中世の作土層と水成層の互層で構成される。作土層は耕起が不充分で粗粒砂の偽蹠が多く認められることから、洪水と耕作が短い期間に繰返されていたことがわかる。調査区の全面に分布し、a~e層に大別できる。鎌倉時代から室町時代の瓦器・瓦質土器を含むことから、第3ai・ii層は長原3層に、第3aiii層は長原4A層に、第3bi~e層は長原4Bi・ii層に相当する。

第3ai層：暗緑灰色極細粒砂混りシルト質細粒砂からなる作土層である。下部に水成層に由来する中粒砂を含む。

第3aii層：暗オリーブ色極細粒砂混りシルト層である。

第3aiii層：灰オリーブ色中~粗粒砂からなる水成層である。

第3bi層：灰色細粒砂質シルトからなる作土層である。下部に水成層に由来する中粒砂を含む。

第3bii層：灰色細粒砂質シルトからなる作土層である。上面で踏込みを検出した。下部に水成層に由来する細粒砂を多く含む。

第3ci層：灰色細粒砂混りシルトからなる作土層である。土師器・瓦器を含む。

第3di層：暗オリーブ灰色砂礫混り細粒砂質シルトからなる作土層である。上面で踏込みを検出した。

第3dii層：灰色シルト混り中粒砂からなる作土層である。部分的に下部に水成の粗粒砂を含む。

第3e層：暗オリーブ灰色シルト質細粒砂からなる作土層である。第4a層の細粒砂を耕起している。土師器・瓦器を含む。

第4層は総厚20~40cmの、作土層と水成層の互層で構成される。上部では耕起が不充分な所も認められる。調査区の全面に分布し、a~c層に大別できる。平安時代の土師器・黒色土器を含むことから、第4a~cii層は長原4Biii層に、第4ciii・iv層は長原4C層に相当する。

第4a層：オリーブ灰色極細~細粒砂からなる水成層である。厚さは約30cmで第3・4層の水成層の中ではもっとも厚いが、残っているのは大畦畔SR301・302の基底部だけである。ラミナは水平方向に見られ、堆積は広範囲に及んでいたと考えられる。

第4bi層：灰オリーブ色細粒砂からなる作土層である。

第4bii層：灰色粗粒砂からなる水成層である。

第4ci層：灰色シルト混り粗粒砂からなる作土層である。下部は粗粒砂を多く含む。

第4cii層：灰色中~極粗粒砂からなる水成層である。

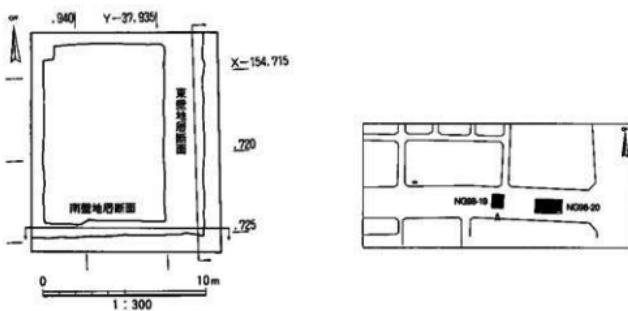
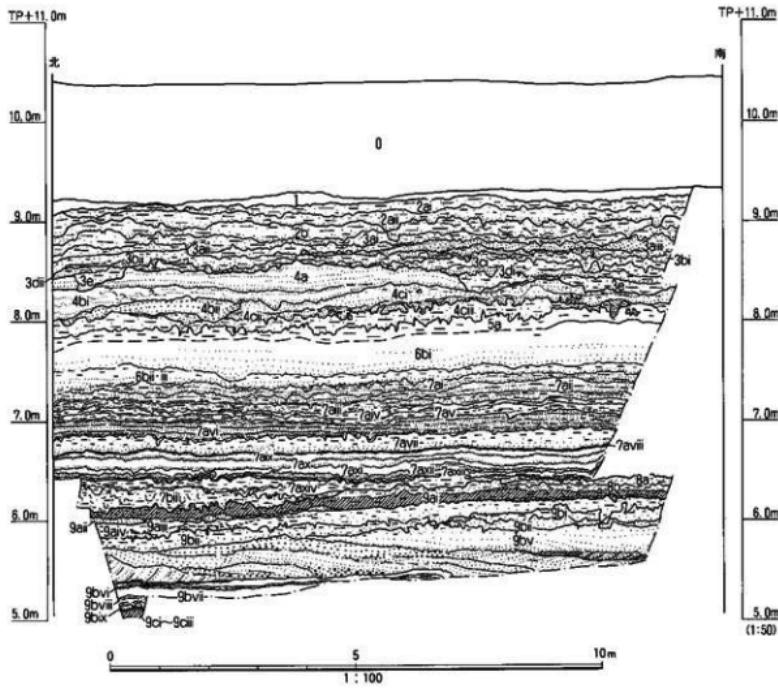


図5 NG98-19次調査東壁地層断面図

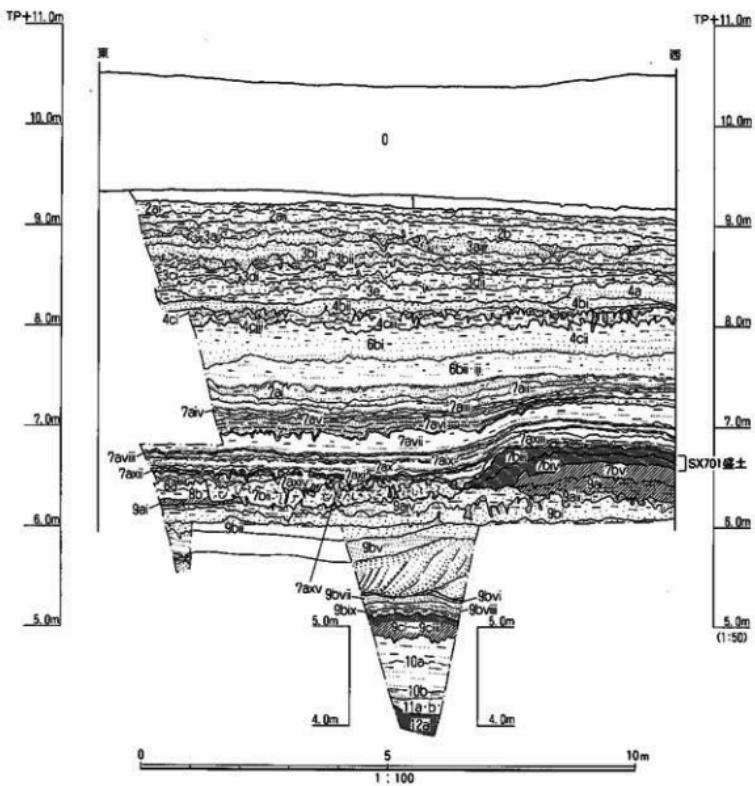


図6 NG98-19次調査南壁地層断面図

第4ciii層：オリーブ黒色極細粒砂質シルトからなる作土層である。上・下面で踏込みを検出した。

第4civ層：暗オリーブ灰色中～極粗粒砂からなる水成層である。第5a層上面の踏込み内に残る。

第5層は厚さ約10cmの作土層である。調査区の北東部に分布するが下面は漸移的であり、第6bi層と区別することが困難である。奈良時代から平安時代の土師器・須恵器・黒色土器をわずかに含み、長原5A層段階の地層に相当する。

第5a層：灰色極細粒砂質シルトからなる作土層である。上面で顯著な踏込みを検出した。わずかに生物擾乱が認められる。下位の第6層との境界は明らかでない。やや暗色化する。

第6b層は総厚約50cmの水成層である。シルト～細粒砂の細かな堆積物で構成される。ラミナが水平方向に見られ、穏やかな流水で堆積している。長原7A層に相当する。本調査区ではNG98-20次調査地に見られるような第6a層に相当する地層はない。

第6bi層：灰色シルト～極細粒砂からなる水成層である。

第6bii・iii層：灰色極細粒砂～シルトからなる水成層である。下底部に黄灰色細粒砂と植物遺体のラミナを含む。

第7a層は総厚70～100cmの水成層である。シルト～極細粒砂の細かな堆積物で構成され、植物遺体を大量に含む部分がある。ラミナが水平方向に見られ、程やかな流水で堆積したようすがわかる。古墳時代中期以降の地層と考えられ、長原7Bii層に対応する。

第7ai層：灰色シルト～極細粒砂からなる水成層である。

第7aii層：オリーブ黒色極細粒砂からなる水成層である。中部にシルトの薄層が挟在する。

第7aiii層：オリーブ黒色極細粒砂～シルトからなる水成層である。

第7aiv層：灰色シルトからなる水成層である。やや暗色に見える。

第7av層：灰色シルトからなる水成層である。やや暗色に見える、炭化物のラミナを含む。

第7avi層：灰色・オリーブ黒色シルト～極細粒砂からなる水成層である。炭化した植物遺体の薄いラミナが無数に集積しており、黒色に見える。種子・木製品・自然木・昆虫化石を含む。

第7avii層：黄灰色シルト～極細粒砂からなる水成層である。中部に植物遺体の薄いラミナを挟む。上面は踏込みにより凸凹している。

第7aviii層：オリーブ黒色シルトからなる水成層である。上面に自然木が集中する部分がある(写真3)。中～下底部に炭化物と植物遺体のラミナを多く含む。昆虫化石を含む。

第7aix層：暗オリーブ灰色シルト～極細粒砂からなる水成層である。

第7ax層：オリーブ黒色シルト～極細粒砂からなる水成層である。上面と上部に炭化物のラミナを含む。中部に極細粒砂の薄層を挟む。

第7axi層：オリーブ黒色シルト～極細粒砂からなる水成層である。

第7axii層：オリーブ黒色極細粒砂からなる水成層である。上部と下部に2枚の植物遺体のラミナを含む。上面で踏込み状の凹凸を検出した。板状の木製品1が出土している。

第7axiii層：オリーブ黒色シルト～極細粒砂からなる水成層である。植物遺体のラミナを含む。このほか高師小僧・二枚貝化石を含む。

第7axiv層：オリーブ黒色シルト～細粒砂質シルトからなる水成層である。第7axv層の偽礫を多く含む。上面で踏込み状の凹凸を検出した。

下底部に炭化物のラミナを含む。

第7axv層：オリーブ黒色シルト～細粒砂からなる水成層である。第7bii層上面の踏込み内に残る。

第7b層は総厚30cm以下の粗粒砂混り砂質シルトを主体とする暗色帶である。土壌状遺構SX701と周溝状の窪地に関連する地層である。第7bii層は長原7Bii層に、第7bv層は長原7Biii層に相当する。

第7bii層：オリーブ黒色シルト質細粒砂層で

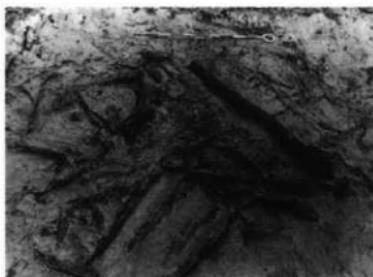


写真3 第7aviii層上面出土の自然木

ある。土壌状遺構SX701の東側を取囲む周溝状遺構内に堆積する。上・下面ともに踏込みや擾乱によって凹凸が著しい。層中には第7axiv・xv層の偽縫を多く含む。5世紀前半の土師器・須恵器・製塙土器および長原式土器を含む。

第7biii層：オリーブ黒色細礫混りシルト質細粒砂層で、オリーブ灰色シルトの偽縫を含む。土壌状遺構SX701の盛土の上層部分で、炭化物を含んで黑色化している。層厚は5~15cmで、5世紀前半の土製品・製塙土器・玉類・炭化米・灰および繩文土器・弥生土器を含む。

第7biv層：黒色中～細粒砂質シルト層である。土壌状遺構SX701の盛土の下層部分で、炭化物を含んで黑色化している。層厚は5~15cmで、5世紀前半の土師器・須恵器および弥生土器を含む。

第7bv層：黒色細粒砂質シルトからなる暗色帶である。土壌状遺構SX701の基底となった地層である。弥生土器・土師器を含む。

第8層は総厚約20cmの、砂質シルトを主体とする暗色帶である。a・b層に大別できる。弥生土器を含むことから長原8層に相当する。

第8a層：オリーブ黒色細粒砂混り砂質シルト層である。やや暗色化し、弥生土器3・4を含む。

第8b層：オリーブ黒色細粒砂質シルトからなる暗色帶である。

第9層は総厚140~160cmで、暗色帶と水成層で構成される。a~c層に大別できる。堆積状況と出土遺物から、第9ai~bii層は長原9A~Biv層に、第9bv~ix層は長原9Bv層に、第9ci~iii層は長原9C層に相当すると考えられる。なお、第9bi層以下は部分的なトレンチ内の観察である(写真4)。

第9ai層：オリーブ黒色中粒砂混り細粒砂質シルトからなる暗色帶である。長原式土器・弥生土器を含む。

第9aii層：暗オリーブ灰色細粒砂質シルト層である。調査区の北西部に分布する。

第9aiii・iv層：黒～オリーブ黒色細～粗粒砂質シルト層である。やや暗色化する。

第9bii層：暗オリーブ灰色中～粗粒砂からなる水成層である。生物擾乱が認められる。

第9biii層：黄灰色細～中粒砂からなる暗色帶である。長原式土器2を含む。

第9bv層：緑灰色・灰色極細粒砂～中疊からなる水成層である。氾濫性の堆積層で、斜行葉理が顕著に見える。ラミナの方向から流水は南西から北東方向とわかる。上部に炭化物のラミナを、下底部に多くの植物遺体を含む。

第9bvi層：黒褐色極細～細粒砂からなる水成層である。炭化物・植物遺体を含み、暗色化する。

第9bvii層：オリーブ黒色極細粒砂～シルトからなる水成層である。暗色に見える。

第9bviii層：黒色シルトからなる水成層である。炭化物・植物遺体のラミナを多く含み、暗色に見える。

第9bix層：暗オリーブ灰色細～極細粒砂からなる水成層である。平面では霜降り状に見える。



写真4 第9bi層以下の地層

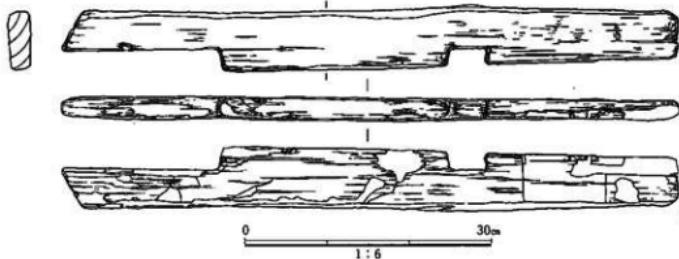


図7 第7axii層出土遺物

第9ci～iii層：黒色粘土質シルト～極細粒砂からなる暗色帯である。上部はより暗色化が進み、粘土質が強い。下面是植物根と考えられる生痕の影響で凸凹している。

第10層は総厚60cmの水成層である。細粒砂～シルトで構成される。ラミナは水平方向に見られ、穏やかな流水で堆積したようすがわかる。a・b層に大別できる。長原10層に相当する。

第10a層：暗オリーブ灰色シルトの水成層である。上・下層に大別できる。上半部は暗色化する。

第10b層：灰色細粒砂からなる水成層である。

第11層は厚さ20cmの灰色シルト～極細粒砂からなる水成層である。炭化物・植物遺体のラミナを含む。長原11層に相当する。

沖積層中部層

第12層は厚さ20cm以上の黒色シルトからなる暗色帯である。長原12A層に相当する。

ii) 各層出土の遺物

各層から縄文時代晩期から江戸時代にいたる各時代の遺物が出土している。しかし、土壤状遺構SX701に関係する地層以外は、ほとんどが水成層や作土層であるため遺物の包含量は非常に少ない。わずかに出土した土器もすべて小さな破片であった。

第7axii層出土遺物(図7・15)

1は建築部材と考えられる細長い板状の木製品である。表裏面とも平らに加工されている。長辺の片側には、深さ2.4cmの「コ」字形と「L」字形の刻込がある。短辺の一方は直角に加工されているが、もう一方は斜めに欠損している。

第9bii層出土遺物(図8)

2は長原式土器鉢の口縁部である。器壁の厚さは0.4～0.6cmで、内・外表面は平滑にナデ調整する。突堤は口縁のごく先端に貼付けられ、幅は0.7cm、高さは0.6cmである。刻目は先端の鋭利な工具で斜めに浅く施され、間隔は1.1cm前後である。胎土は灰黄褐色で、1mm大の角閃石を含む生駒西麓産である。縄文時代晩期から弥生時代前期に属する。

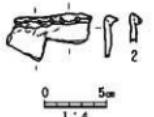


図8 第9bii層出土遺物

2) 弥生時代の遺構と遺物

i) 土壙

SK901(図9・10)

調査区の北西で検出した、長さ3.9m、幅0.4m、深さ0.1mの土壙である。検出面は第9ai層上面である。南北に細長い形状で、横断面は浅いU字形である。埋土は2層に分かれるが、いずれもシルト～細粒砂である。土壙内から遺物は出土しなかったが、上位の第8b層から弥生土器壺3・壺4が出土している。3は広口壺の口縁部、4はタタキのある壺の体部である。両方とも胎土は粗く色調は黄灰白色である。

第9ai層の上面は、西側が微高地となっており、東に向って緩やかに低くなる。SK901の南方および東方など、数個所に踏込みが密集した部分が認められた。

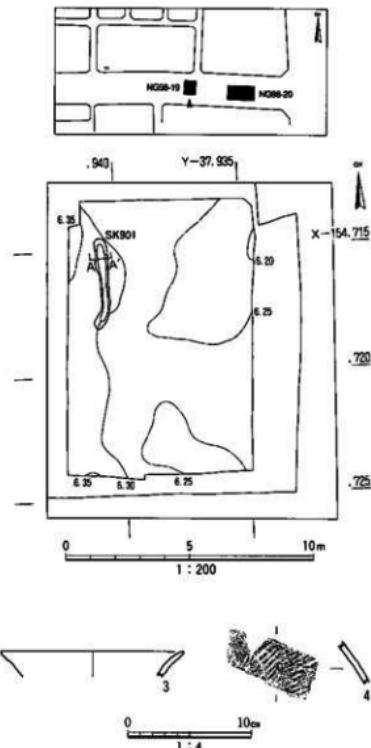


図9 第9ai層上面検出遺構と第8b層出土遺物

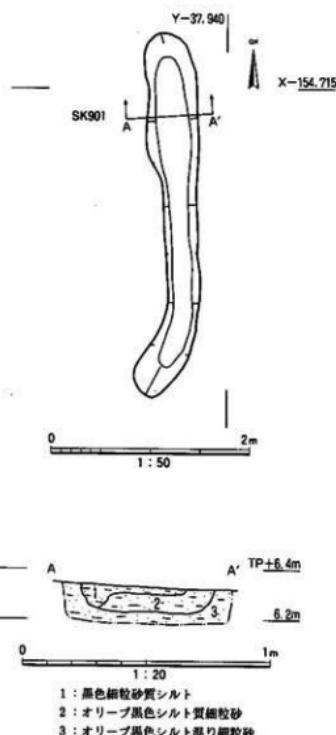


図10 SK901平・断面図

3) 古墳時代の遺構と遺物

i) 土壇状遺構

SX701(図11～20、原色図版1・2、図版2～4)

調査区の西部で第7a層の水成層を除去したところ現れた土壇状遺構である。検出面は第7bv層上面である。遺構の西側および南側が調査区外であるため全体の規模は不明だが、確認できた部分は東西約4.5m、南北11.5mであった。現状での平面形は南北に長い方形であるが、北端部分は周囲からの突出度が弱いために輪郭が不明瞭である。それに対し東側は突出度が強く、輪郭も明瞭で直線的であ

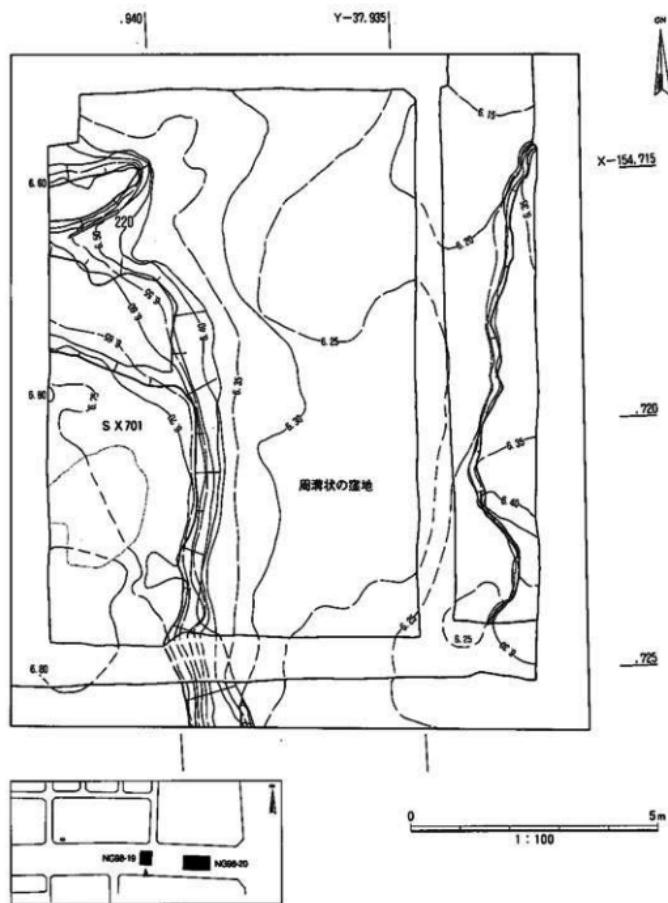


図11 SX701と周溝状の墓地

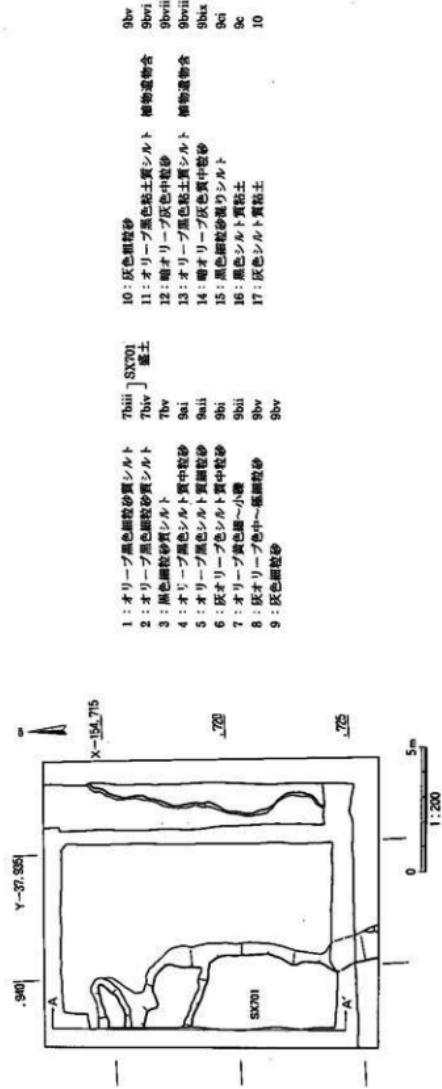
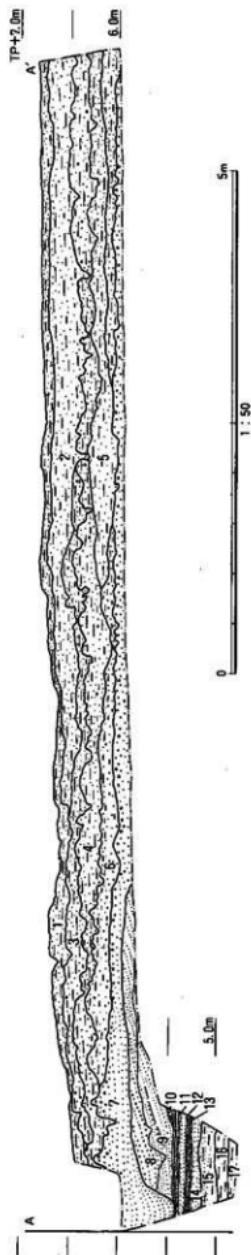


図12 SX701西壁地層断面図

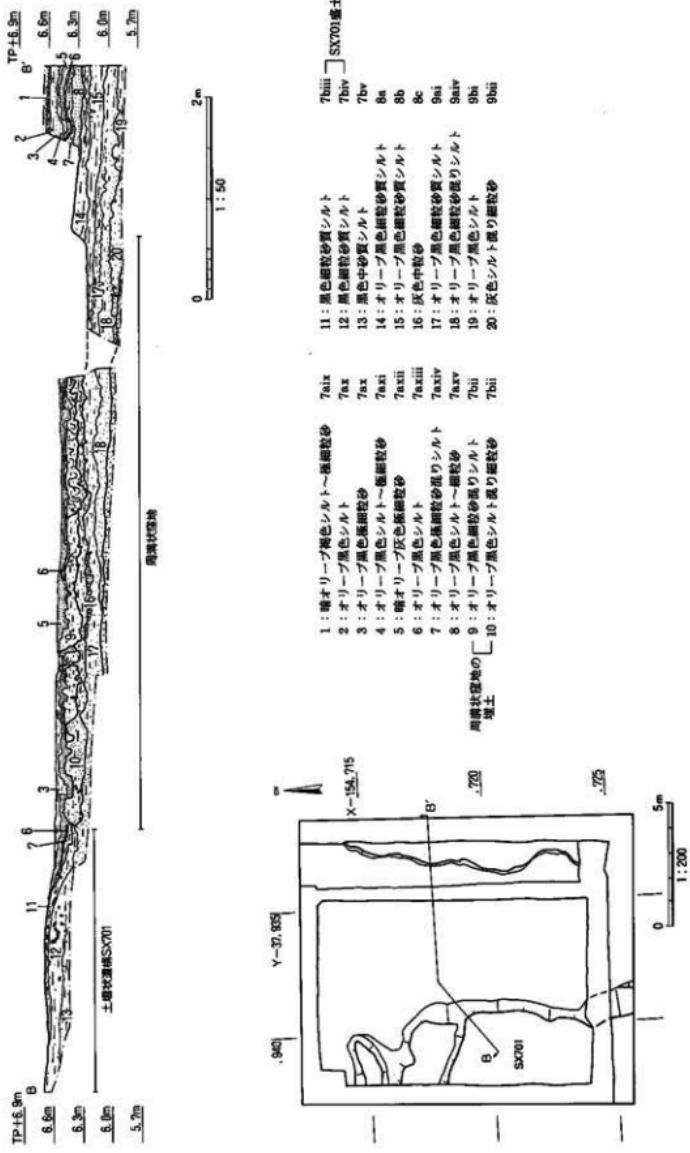


図13 SX701と周溝状の窪地断面図

る。上面は平坦であるが、北部は0.1mほど低い。柱穴などの遺構は確認できなかった。

盛土は暗色帯の第7bv層を基底にして、南側で厚さ0.4m、北側で厚さ0.2mである(図12)。上・下層に分けられるが、両方とも層相はシルトや細粒砂を含むシルトで、細かな炭粒を含んで黒色化していた。この層相は炭粒を含むこと以外は下位層の第8a~9aiv層の特徴と一致している。盛土の上層である第7biii層には、土壌状の高まりの肩部や斜面に沿って淡緑色シルトの偽礫が分布していた。偽礫中にはラミナ構造があるため、別の場所で水成層として堆積していたものが運ばれてきたものとわかる。ただし、もとの堆積場所は調査区内で確認できなかった。

SX701の東側には幅5.5~8.0m、深さ約0.2mの浅い周溝状の窪地が拡がっている。下面是第9aiv層まで及んでおり、凸凹している(図13)。埋土の第7bii層は主としてシルト~細粒砂からなる。上半は上位にある第7axii~xv層の偽礫を含み、堆積構造が観察できないほど擾乱されていた。第7axii層の上面には踏込みが見られた。以上の状況から、周溝状の窪地はSX701の盛土を採取した場所と考えられる。また、第7a層によって埋積される過程で人や動物が活動していたことがわかる。

土壌状遺構SX701が築かれた場所は、第9a層の段階にはすでに微高地であったが(図9)、古墳時代の第7bv層段階でも周囲より約0.3m高くなっていた(図14)。SX701はその地形を利用して造られている。すなわち、微高地の縁辺部に厚く盛土を施して周囲より明確に突出させ、さらにシルトの偽礫を含む盛土で上面を平坦に成形している。SX701が完成した時点では、東側に周溝状の窪地があり、さらに東方に平らな地面が拡がっていた。その後は、間もなくして周溝状の窪地が極細粒砂で埋り、やがてシルト~粘土で全面が埋りはじめたようである。水成層は低い所だけでなく、同時にSX701の上部も薄く覆っている。全面が埋る過程では何度も地表が安定した時期があり、人や動物が出入りした痕跡も認められた(図15)。第7ai層が堆積するころにはほとんど表面は平らになり、高まりの痕

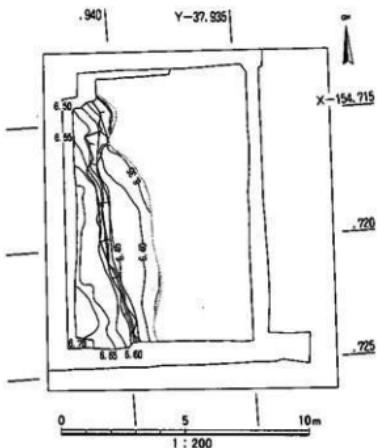


図14 第7bv層上面検出状況

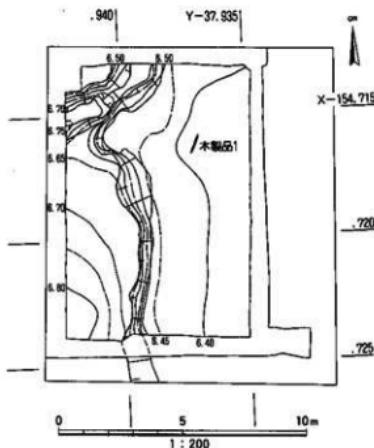


図15 第7axii層上面検出状況

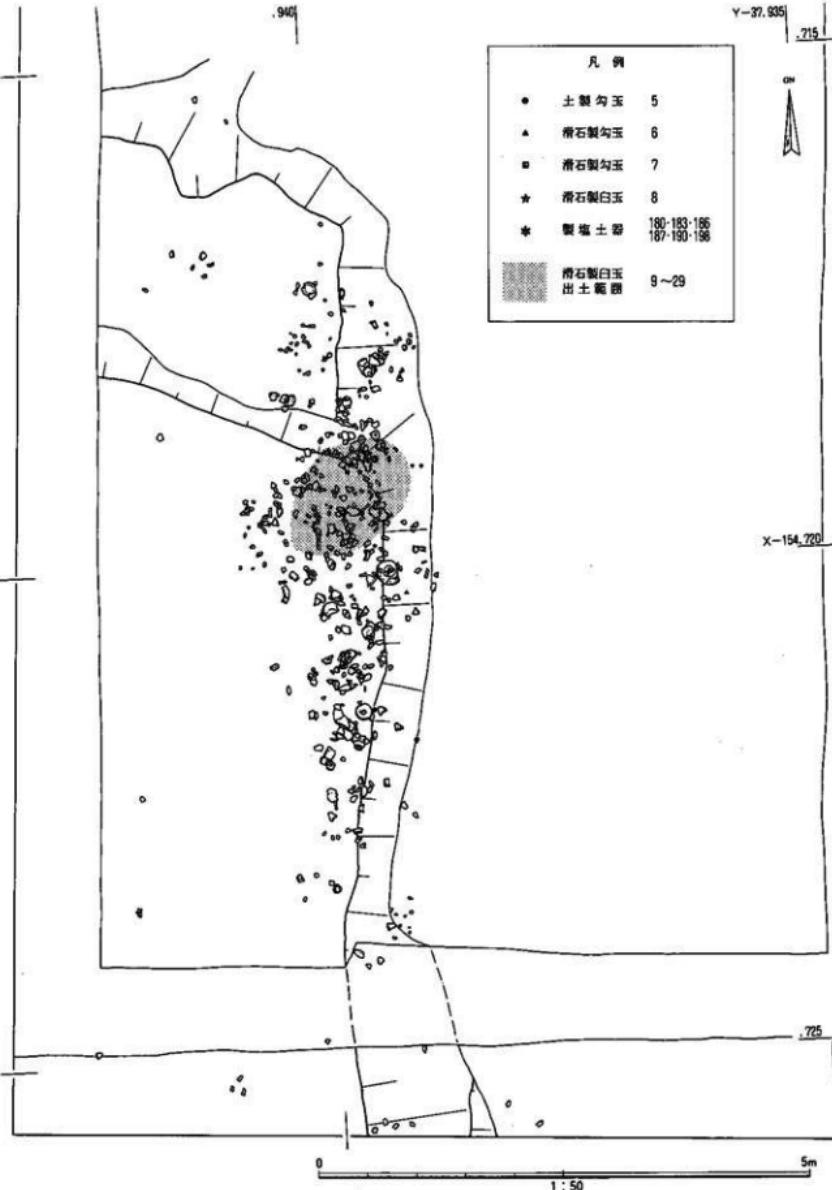


図16 SX701盛土中の遺物出土状況

跡は地表からは見えなくなっていたようである。

遺物はほとんどが盛土の中から出土した(図16、原色図版1、図版3・4)。東斜面の幅3m、長さ10mの範囲に帯状に分布しており、特に中央部に集中していた。ほかにも周溝状の窪地や第7axi層といった上位の水成層からも土器の破片が見つかっているが、盛土中の遺物と比べて出土量は少ない(図版2)。また、このうちのいくつかは盛土中の土器と接合することから、もともと盛土中に含まれていたものがのちの擾乱によって移動したものとわかる。盛土は上・下層ともに遺物を含んでいるが、上層に含まれる遺物の方が多い。ただし、これも上・下層に含まれる土器が相互に接合することから、2層の盛土は一連の作業として積み上げられたことがわかる。図16では上層の盛土である第7biii層中で見つかった遺物について具体的な検出状況を示した。図17~20は土師器の器種ごとの破片の出土位置をドットで示したものである。ただし、周溝状の窪地に示した1mグリッド内のドットは破片の有無を表したものであり、実際の出土位置ではない。

遺物はほとんどが土師器である。中には完形に近いものや、破片であっても完形に復元できるものもあるが、いずれもどこかが欠けていたり叩いたような痕跡がある。また、明らかに打欠いたとわかる破片もあることから、いくつかの土器は故意に壊されて盛土の中に埋められたとわかる。ただし、器種ごとに出土位置が偏るなどの規則性はなく、並べて埋められていた痕跡も見い出せなかった。さらに、部分的な小さな破片も数多く含まれていることから、不要な土器片もあわせて捨てられていると考えられる。中央部では炭や灰とともに、通常の煮炊きとは異なる二次的な熱を受けた土器が密集していたが、周辺の土に焼けた痕跡はなかった。以下、遺物ごとの出土状況を見てゆく。

玉類は、土製勾玉が1点、滑石製勾玉が2点、滑石製白玉が破片も含めて24点出土した(図16)。滑石製勾玉7と白玉8~29は、遺物がもっとも集中する中央部で見つかった。これらは紐で綴られていたようすではなく、すべてばらばらで炭や灰に混って埋っていた。土製勾玉5と滑石製勾玉6はそれより南方に離れた場所で単独で見つかった(写真5・6)。

製塙土器は中央部と北部で見つかった(図16)。2cm以下のような小さな破片が少量だけ散在しており、最初から破片の状態で埋められたようである。

甕・壺類は破片の量がもっとも多い。分布も広範囲に及んでいるが(図17~19)、周溝状の窪地内

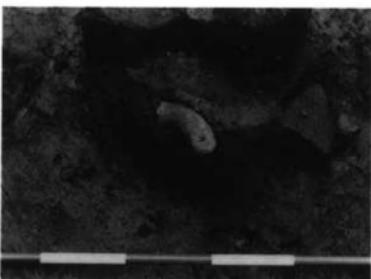


写真5 土製勾玉5の出土状況



写真6 滑石製勾玉6の出土状況

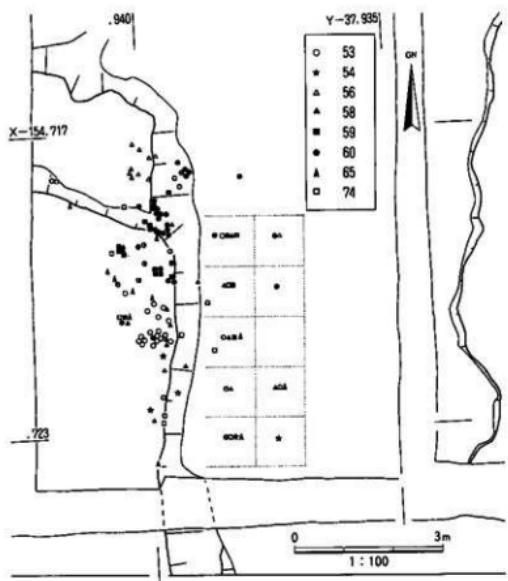


図17 SX701盛土中の遺物出土位置(壺)

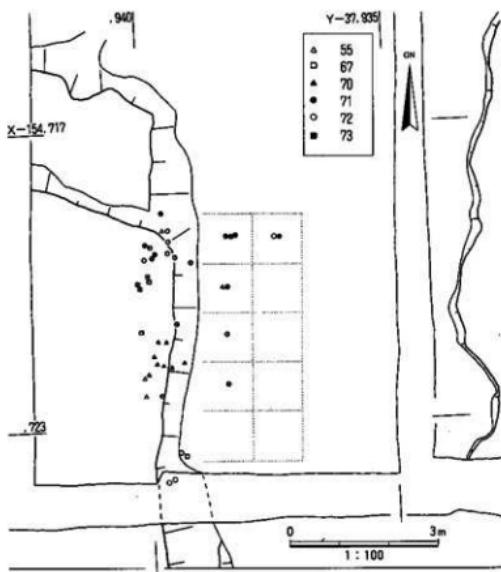


図18 SX701盛土中の遺物出土位置(二重口縁壺)

に流出したもの以外は、埋土内において個体ごとにかたまる傾向がある。調査区内で小さな破片も含めて個体数を判別できたものは、須恵器壺1点、土師器壺約40点、壺約10点、小型丸底土器約15点、中型の壺約10点、弥生土器壺約5点である。

土師器壺のうち、完形に復元できたものは53・60である。壺54・58・59、二重口縁壺70・71については全体の $1/2$ 以上の破片が残っているが、直接に接合しなくても同じ個体とわかる破片が多数認められることから、これらも完形に近い姿に復元できると考えられる。ほかの壺・壺はじめから破片の状態で捨てられたか、あるいは盛土中に混入していた古墳時代中期以前の遺物であると考えられる。壺56の破片が集中している場所の東側では、焦げて黒く固まつた米粒や炭化米(写真7)が出土したが、これらはもと56の中にあったものが周囲にこぼれ出たものであろう。

唯一の須恵器である壺65は、中央部の平坦面から出土した(図17)。見つかったのは口縁部の $1/8$ と体部のごく一部である。完形には復元できないが、明らかに上層の盛土中に含まれており、ほかの土師器と共に伴関係にある。

小型丸底土器および中型の壺のうち完形に復元できたものは75~

78・82である。中型の壺は直口壺83が図面上で復元できたほかは、口縁部の一部が残るのみである。ミニチュア壺193は、中央部の遺物が集中する場所で逆位に出土した。

高杯はもっと多くの個体数が確認できた。破片の量は甕について多いが、分布は個体ごとにまとまっている(図20)。個体数が判別できたものは、杯部が楕形のもの約35点、杯部が平底で底部と口縁部を明瞭に区別する種をもつもの約20点、平底で稜をもたないもの約10点、その他が3点である。このほか脚部のみが約45点出土している。脚部は杯部の破片と接合しないものも多いことから、高杯は全体で70個体以上あったと推定できる。完形に復元できたものも95・97・105・106・114・115・123・124・130・141と、ほかの器種よりも多い。123・132は4.0mの範囲に散在していた。また、図20に記した108・125・132・141や、96・101・104・105・107・111・113・116・118・142・148は個々の破片が非常に細片化しており、かつ広範囲に分散していた。134・145は口縁部がすべて打欠かれており、底部だけの破片が出土している。

木製品220はSX701の直上から出土している(図11)。

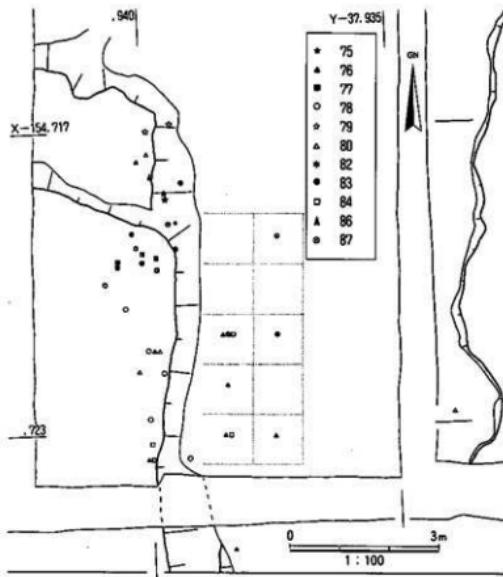


図19 SX701盛土中の遺物出土位置(壺)

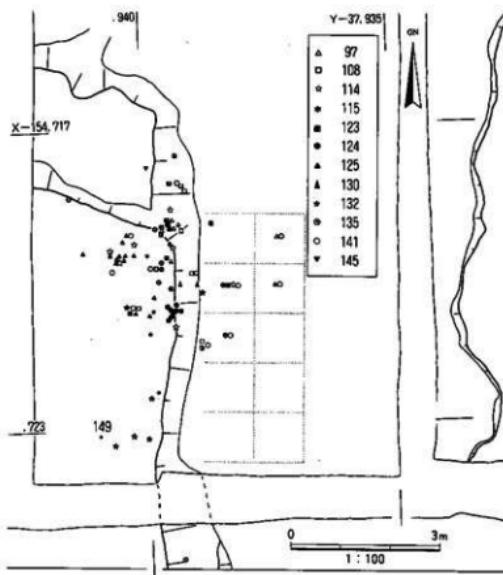


図20 SX701盛土中の遺物出土位置(高杯)

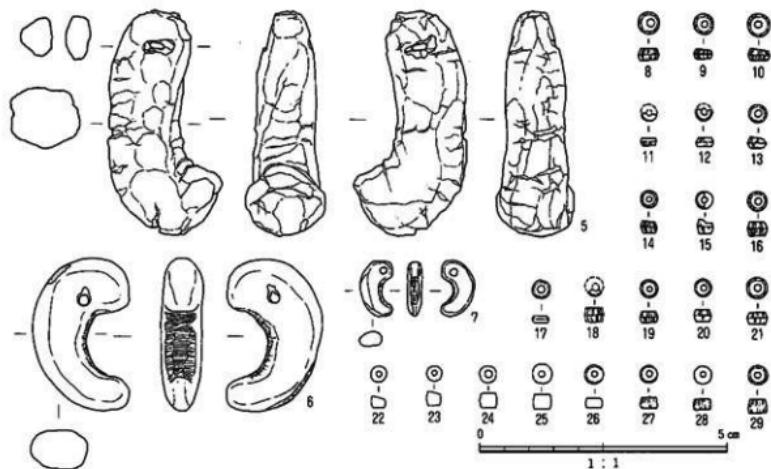


図21 SX701出土遺物(1)

出土遺物

玉類(図21、図版22)

5は土師質の土師勾玉である。胎土には砂粒を含まず、黒褐～暗赤灰色を呈する。重さは11.7g、全長4.5cmである。直径1.3cmほどの粘土棒を扁平に押潰したあと、下端を「し」字形に曲げている。この時、粘土棒の水分が少なかったために、腹部にはシワがあり、背部にはヒビ割れが生じている。下端部には曲げた時につけた指先の爪痕が残る。孔は細い串状の工具で焼成前に開けられている。

6・7は滑石製勾玉である。6は重さ6.3gで暗オリーブ灰色を呈する。左図上端の背部には粗割り段階の面が残る。また、腹部の全面と背部の下端には粗仕上げを行った横方向の研磨痕が残っている。それ以外の面は滑らかに磨かれている。孔はまっすぐに両面穿孔されており、上方に向けて紐ずれの痕跡がある。7は6と同様の暗オリーブ灰色の滑石を用いているが、重さ0.3gでさらに小さく、扁平である。腹部の全面に粗仕上げ時の横方向の研磨痕が残る。それ以外の面は滑らかに磨かれている。

8～29は滑石製白玉である。図化したもののはかにも2個体分の破片が出土している。すべて縁がかった灰～黒色を呈し、重さは0.1gに満たない。直径は3.0～4.5mm、厚さは1.2～3.0mmで、孔の直径は1.0～1.8mmである。8～16・18～21・27～29は側面を粗く縦方向に研磨しており、8～16・18～21には中央にそろばん玉状の鈍い稜線をつくる。27～29は側面の研磨が1方向であるため稜線はつくらない。17・22～26は側面の研磨痕をていねいに磨いて消している。そのため稜線は鈍くなり、縦断面は樽形となる。

須恵器(図23、巻頭原色図版、図版18)

65は唯一出土した須恵器である。見つかったのは壺の口縁部と体部の破片で、復元口径は33.8cmである。口径から推定すると器高が50cmを越す大型壺であったと考えられる。体部の上端に口頭部をのせ、内・外面に粘土を足して接合している。口縁端部は回転ナデ調整で丸くおさめ、外面の2cm下がつ

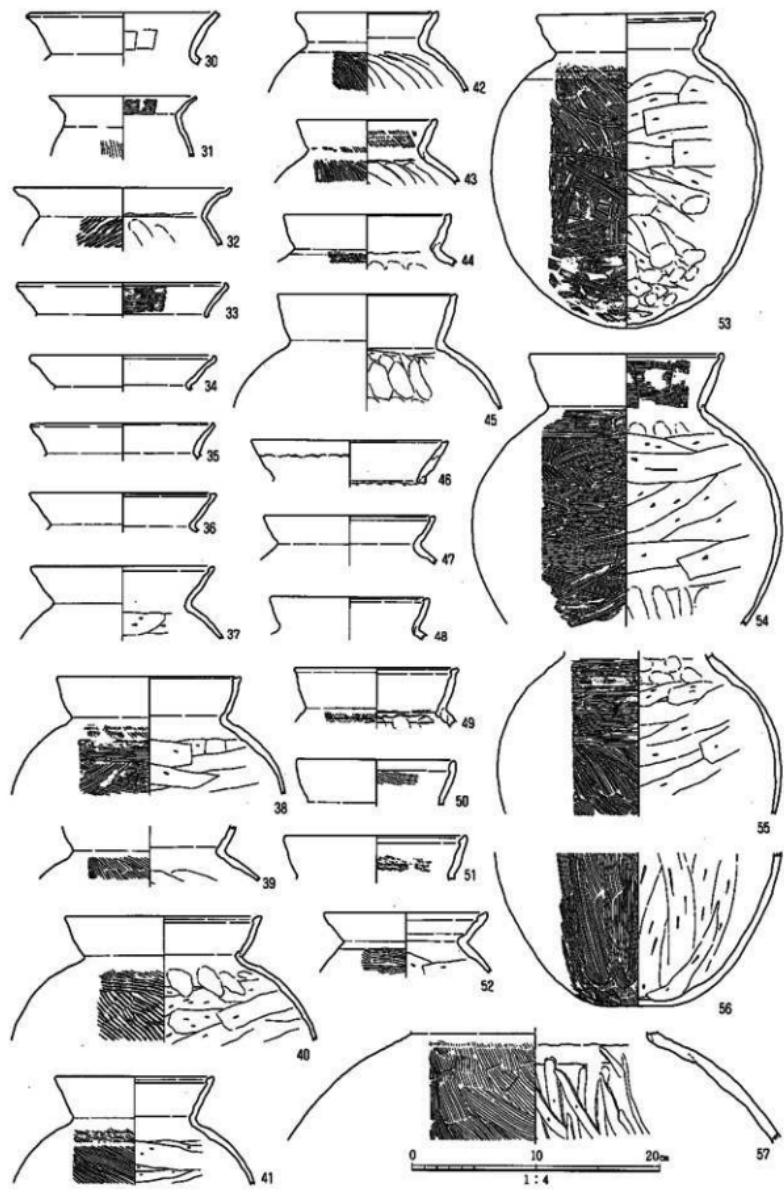


图22 SX701出土遗物(2)

た所に高さ4mmの突帯を貼付ける。突帯は先端が丸く、下側に明瞭な段をつくる。口頭部は内・外面にナデ調整を加える。頭部の内・外面は粘土の接合痕を消すために強くナデ調整を加える。体部は肩が張った器形で、外面はていねいなナデ調整を行う。内面には刻目がない丸い當て具痕が残る。焼成はやや不良で、灰白色を呈する。断面の所々に気泡を含み、器壁は薄く層状にはがれやすくなっている。体部の厚さは1.0cm前後である。大庭寺遺跡TG232号窯[大阪府教育委員会・大阪府埋蔵文化財協会1995]出土の大型壺に類似し、初期須恵器に相当する。

土器器(図22~28、原色図版2、図版15~22・24)

30~35は庄内式系の壺である(図22、図版17)。30は口縁部が外反し、端部に面をもつ。31は口縁端部が薄く、口縁部の内面と体部外面はハケによって調整する。32は口縁部が外反し、端部がやや受け口状である。体部外面の調整はタタキである。33~35は口縁端部を少しつまみ上げ、面をつくる。36~57は口縁端部が肥厚する、もしくは端部に面をもつ壺である(図22、図版15・17)。36は口縁端部が内側に肥厚し、断面三角形につくる。37は口縁端部が内側に肥厚する。体部内面は頭部付近までヘラケズリを加える。38は口縁部が内湾し、端部を肥厚させて上部に面をもつ。体部は外面にハケ、内面の肩部以下はヘラケズリによって調整する。39は体部外面にハケによる調整を加え、内面はナデ調整する。40は口縁部が内湾し、端部を肥厚させる。体部外面はタタキを施す。内面はユビオサエを行ったのち、肩部以下をヘラケズリで調整する。外面の肩部以下に煤が付着する。41は口縁部が直線的に開き、端部を肥厚させる。体部外面はハケによる調整を行い、内面はユビオサエののち肩部以下にヘラケズリを加える。外面の全面に煤が付着する。42・43・44は口縁端部に面をもつ。体部外面はハケによって調整し、内面は頭部以下をナデ調整する。45は口縁部が直線的に伸び、端部に水平な面をもつ。体部内面はユビオサエを行ったのち頭部のみヘラケズリを加える。46は口縁部が直線的に広がり、端部に面をもつ。体部は頭部以下にヘラケズリを加え、器壁を2mm以下に薄くする。47・48は口縁部が内湾し、端部に面をもつ。49は口縁上部が強いナデ調整によってくびれ、端部に面をもつ。体部外面はハケによる調整、内面はユビオサエを加える。50・51は口縁端部が内側に肥厚し、内面にハケによる調整を行う。52は口縁端部を内側に肥厚させる。体部外面はハケによる調整、内面は肩部以下にヘラケズリを加える。53はほぼ完形である。口縁端部は内側に垂下するほど肥厚する。体部は

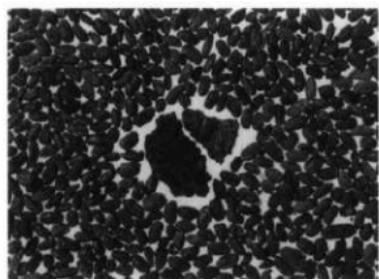


写真7 盛土出土の炭化米



写真8 壺56の内面底部の炭化米

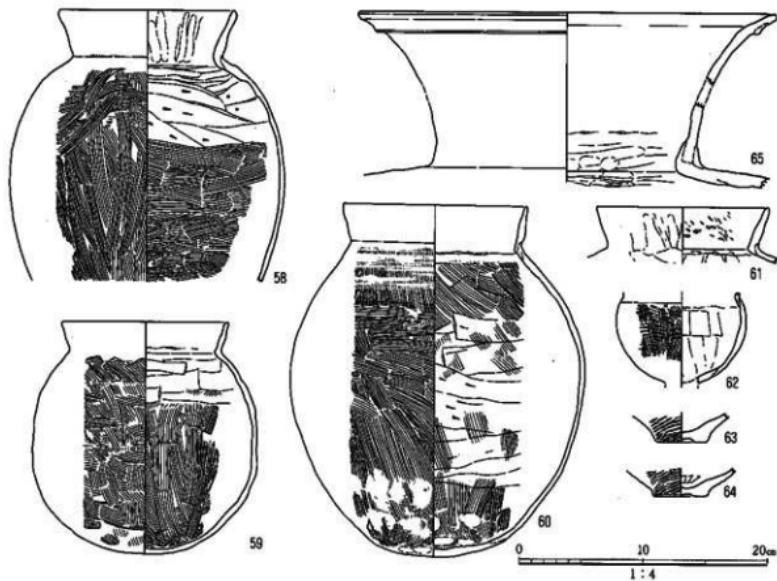


図23 SX701出土遺物(3)

底部がやや尖った球形である。外面の全面にハケによる調整を行い、内面はユビオサエを加えたあと肩部以下にヘラケズリを行う。外面の全面に煤が付着する。54は口縁部が直線的に伸び、端部を薄くしたのち内側に丸めている。内面はハケによって調整する。体部は球形で外面をハケによって調整し、内面はユビオサエを加えたあと肩部以下にヘラケズリを行う。内面の底部付近に焦げ痕が残る。55は体部上半の破片である。外面はハケによって調整し、内面はユビオサエを行ったあと肩部以下にヘラケズリを加える。56は体部下半の破片である。体部は長胴ぎみで、底部は平らである。外面は下部が「し」字状になるタテハケで調整し、内面は縦方向のヘラケズリを行う。内面の底部付近に米粒が焦げ付いている(写真8)。

57は大型の壺の肩部である(図22)。器壁が1.0cm前後と厚く、復元すると体部の最大径が45cmを超える。外面の調整はハケを行い、内面はまばらな縦方向のユビナデ調整を施す。

58~61は口縁端部が肥厚しない壺である(図23、図版15・17)。58は長胴形のもので、体部外面の全面にハケによる調整を行い、内面は肩部にヘラケズリを加えたあと下半部にハケによる調整を行う。外面の下半部に煤が付着する。59は口縁部が短く、体部が球形のものである。体部外面はハケによって調整し、内面は肩部以下をハケによって調整したあと頸部以下にヘラケズリを加える。外面の全面に煤が付着する。60は長胴形のものである。体部外面はハケによって調整し、内面はハケによって調整したあと中位にヘラケズリを行う。外面の下半部に煤が付着する。61は全面にナデ調整を行う。口頸部の内面には焼成前にいた爪痕が残る。

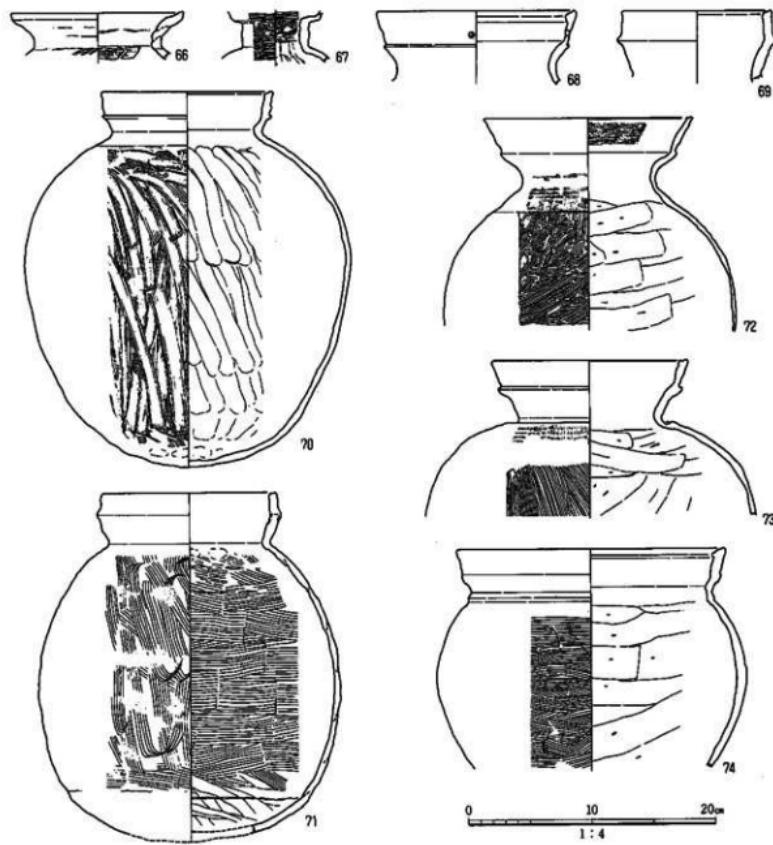


図24 SX701出土遺物(4)

62は台付鉢である(図23、図版18)。口縁部と台部を欠損する。畿内第V様式系のものである。

63・64は壺の底部である(図23、図版18)。外面はタキを施し、底部は凹んでいる。内面はハケによる調整とナデ調整を行う。畿内第V様式系のものである。

66は広口壺(図24、図版17)である。頭部は強く外反し、端部に面をもつ。体部外面の調整はタキ、内面はハケを行う。口縁部には粘土の継目が残る。

67~73は二重口縁壺である(図24、図版15・17・18)。67は頭部が直立する。外面全体と内面の口頭部に艶が出るほど密なヘラミガキを施す。庄内式系のものである。68~73は強く外反する頭部に擬口縁をつくり、口縁部を貼付けている。屈曲部には突帯状の稜が巡る。68は口縁端部が肥厚し、断面三角形となる。70は口縁端部が肥厚しない。体部は倒卵形で外面の調整はハケ、内面はナデを行う。71は体部がやや長胴化する。外面は粘土紐の継目が顕著で、強いハケで調整するが凸凹している。内

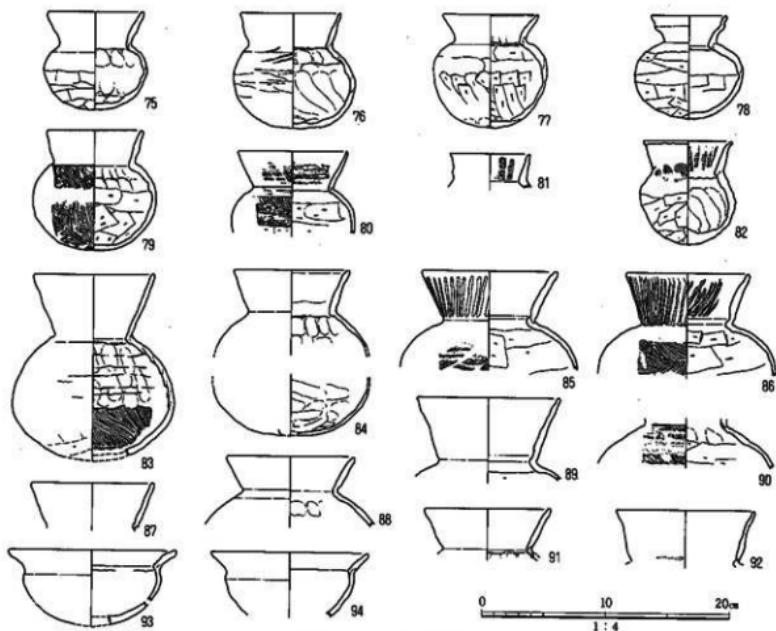


図25 SX701出土遺物(5)

面は底部のナデ調整のあと、上半部をハケによって調整する。72は口縁端部が面をなし、内面をハケによって調整する。体部外面の調整はハケ、内面は肩部以下にヘラケズリを加える。73は口縁端部が少し肥厚する。体部外面はハケによって調整し、内面は頸部以下にヘラケズリを加える。

74は二重口縁をもつ大型鉢である(図24、図版18)。外反する頸部に直立する口縁部を付ける。屈曲部には突帯状の稜が巡る。体部外面の調整はハケ、内面は頸部以下にヘラケズリを加える。

75~82は小型丸底土器である(図25、図版16)。体部上端の内側に口頭部を貼付けており、口頭部の下端が突出するものが多い。75は口頭部が開き、体部が扁球形である。体部外面の下半はヘラケズリを、内面はユビオサエを行う。外面の全体に焦が付着し、内面の下半部に焦げ痕がある。76は体部外面にヘラケズリを行ったあとナデ調整する。内面はユビナデ・ユビオサエを施す。頭部に3条のヘラ記号がある。77は内・外面とも下半部にヘラケズリを加える。78は口縁部が屈曲し、体部を扁球形に作る。遺存部分に注水孔はないが、須恵器體を模したものと考えられる。体部外面にヘラケズリを加え、内面は上半部と下半部の継目が顕著に残る。79は外面にハケによる調整を行い、内面はヘラケズリを行う。80は口縁の内・外面と体部の外面をハケによって調整し、体部の内・外面の下半部にヘラケズリを加える。82は口縁部にハケで調整したあとナデ調整を行う。体部は球形で、外面にヘラケズリを行い、内面を強いユビナデで調整している。81も82と同様のものである。

83~92は中型の壺である(図25、図版16・18)。83・84・91は体部上端の内側に口頭部を貼付けて

おり、口頸部の下端が下方に突出する。85~90・92は体部上端に擬口縁をつくり、その上面に口頸部を貼付けるものである。83は口頸部が長く伸びる直口壺である。体部は下半部を輪形につくったのち、粘土紐を積み上げて上半部を成形する。84は口縁端部の内面に凹線をなす。85・86・90は口頸部に縦方向のヘラミガキを行うものである。85は太くまばらに、86は内・外面に細く密に行う。90は口頸部の外面に縦方向のヘラミガキを行ったのち、頸部に横方向のヘラミガキを行う。体部外面の調整はハケ、内面はヘラケズリを行う。

93・94は鉢である(図25、図版16)。体部上端の内側に口頸部を貼付けており、口頸部の下端が下方に突出する。口縁部はナデ調整によって強く外反し、体部の最大径よりも大きく開く。体部は浅い半球形である。焼成はやや不良でにぶい橙色を呈する。

95~122は杯部が輪形の高杯である(図26、図版19・20・24)。95~104・108~113は杯部の口縁が外反し、端部は面をなす。杯部外面は1~3段の放射状ハケによって調整し、内面は1~3段のハケを行ったあとナデ調整する。脚部外面はヘラミガキのあとナデ調整する。内面は柱状部をヘラケズリするものとしないものがある。端部の面はヘラ切りのままか、ナデを加えるものがある。96の口縁部には打欠き状の欠損がある。108~113はハケによる調整が粗い。105~107は口縁部が外反せず、端部に面をなすものである。114は杯部が半球形に近いものである。杯部は端部が外方に小さく折れ曲がる。脚部は裾部が明瞭に屈曲し、外面をていねいにナデ調整する。内面は柱状部に2段のヘラケズリを加える。裾端部は面をなし、接地部をつまみ出す。115は杯部がラッパ形に開くものである。口縁端部の内面に面をなす。内・外面ともナデ調整するが、粘土紐の継目が顕著に残る。脚部は外面にヘラミガキを行ったのち裾部にかけてナデ調整する。内面は柱状部に3段のヘラケズリを行う。裾端部はナデ調整し、つまみ上げている。116~118は杯部の口縁が外反し、端部をつまみ上げるものである。116は杯部外面の底部にヘラケズリを行い、脚部外面はヘラミガキをしたあと下半部にヘラケズリを加える。119~122は高杯の杯・脚接合部である。95~113・116~118・122は脚上部に粘土塊を充填したのち杯部を形成しており、脚内面に刺突痕がある。114・115・119~121は刺突痕がない。

123~127は杯部が平底で、底部と口縁部が明瞭に区分できる高杯である(図27、図版21・24)。口縁部は外反し、端部に面をなす。胎土は精良で明るい橙色である。杯部は内・外面ともハケによって調整したあとナデ調整を行い、最後に特徴的なヘラミガキを密に行う。ヘラミガキは似通っているが、施された順序や場所がそれぞれ異なっている。脚部は大きく開き、外面にヘラミガキを行い、裾部をナデ調整する。内面は1ないし2段のヘラケズリを加え、裾部をハケによって調整する。123・125は杯・脚接合部の外面に1条のヘラミガキを行う。製作方法は、脚上部を粘土板で塞いで杯部を成形している。杯部は底部の端に擬口縁をつくってから、大きく立上がる口縁部を貼付けている。そのため、底部と口縁部を接合した部分は強く屈曲し、外面に明瞭な突起状の稜が巡る。128・129の製作方法は123~127と同じだが、ヘラミガキがない(図27)。130は大きさ、形ともに123と酷似しているが、全体的に仕上げが雑でハケによる調整やヘラミガキが行われていない。脚内面に刺突痕もなく、胎土も粗い(図27、図版21・24)。131・132は杯部が深く、端部が外反するものである(図27、図版20・21・24)。132には内・外面に粗いヘラミガキを施す。133~135・145は杯部の底部のみの破片

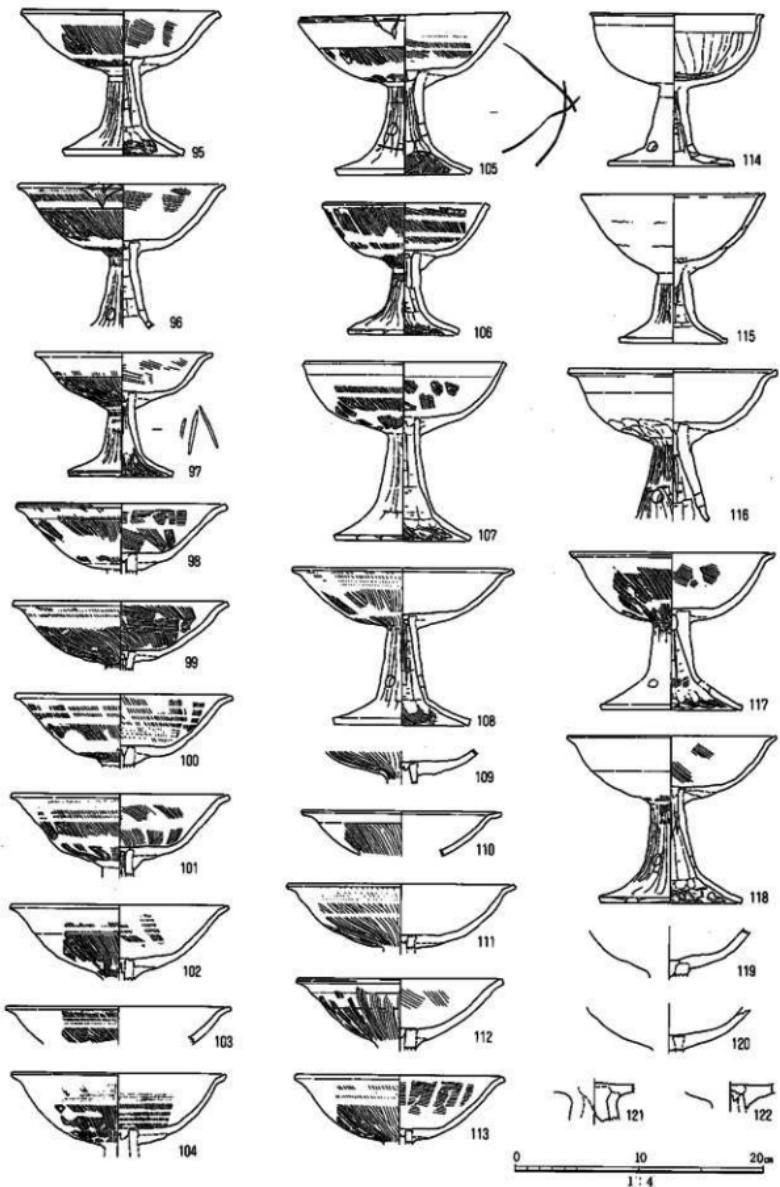


图26 SX701出土遗物(6)

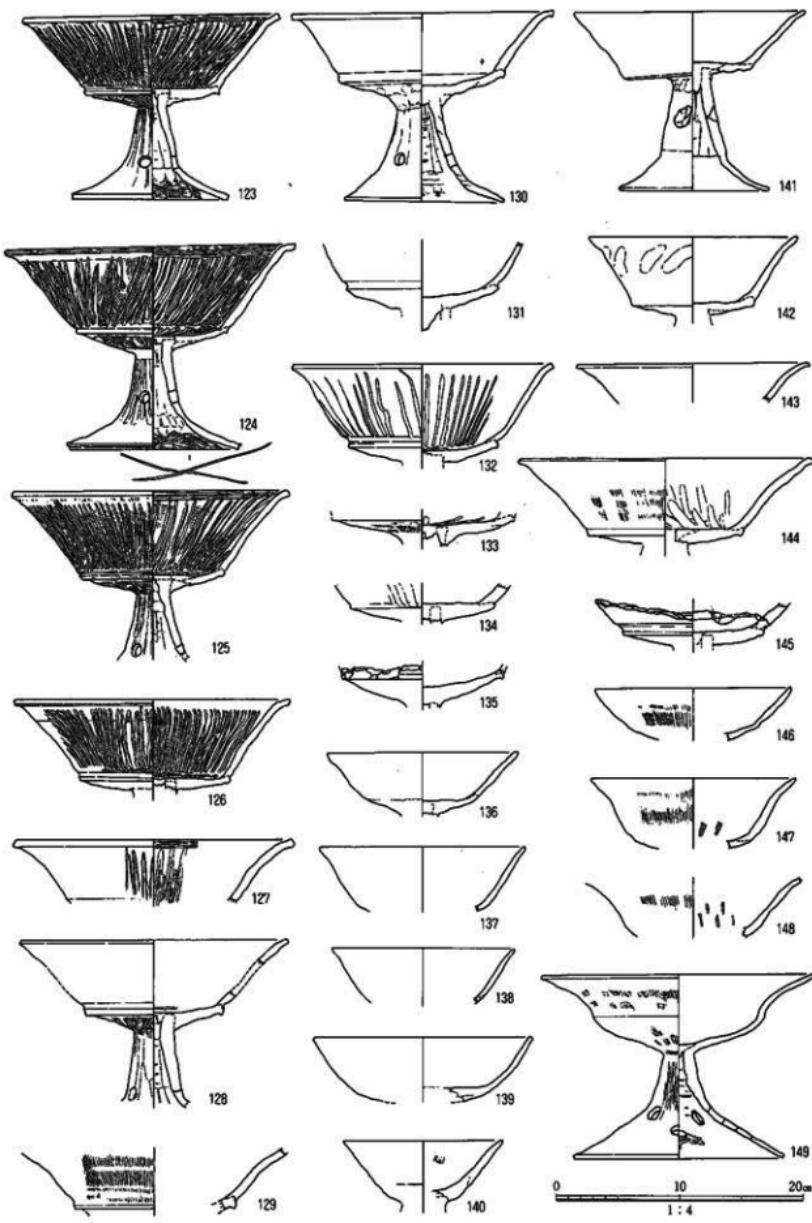


图27 SX701出土遗物(7)

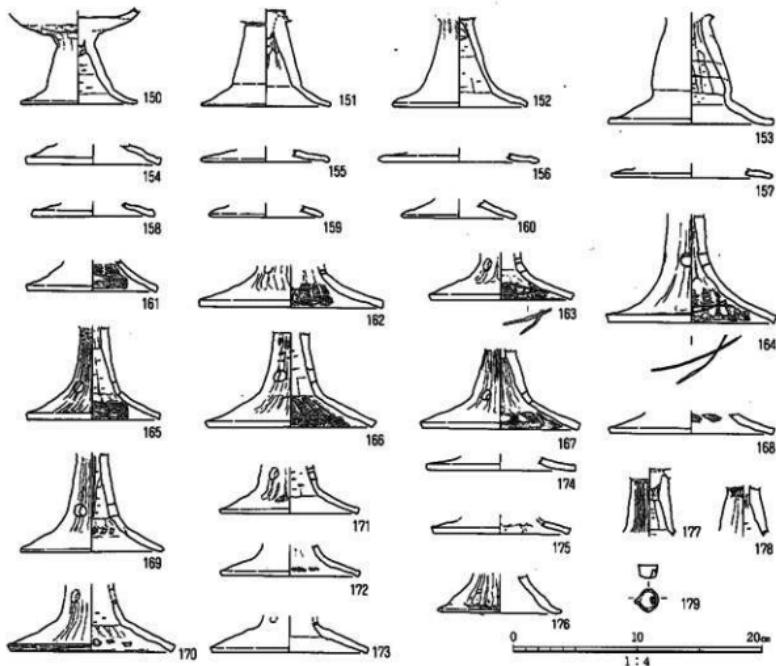


図28 SX701出土遺物(8)

である(図27、図版20)。これらは口縁部を故意に内・外面から打欠いており、底部だけが円板状に残っている。136~139は口縁部が直線的に伸びるものである(図27、図版20)。底部と口縁部の屈曲部に稜はない。140は杯部がラッパ形に開くものである(図27)。粘土の継目が顕著に残る。141~144は口縁部がやや外反し、端部に面がないものである(図27、図版21・24)。底部と口縁部の屈曲部に稜が巡る。141は脚裾部が明瞭に屈曲し、柱状部の中ほどに破壊を目的とした刺突痕がある。149は口縁部が2段に大きく開き、屈曲部に稜をなすものである(図27、図版21)。脚部は大きく開き、2段の円形スカシ孔をもつ。全体の1/2の破片があり、出土状況もほかの土器と同様であることから、下位層を盛土とした際の混入品とは考えにくい。146~148は杯部の破片である(図27)。

150~179は高杯の脚部などである(図28、図版22・24)。150~160は裾部が明瞭に屈曲するものである。150は杯部の屈曲部に稜がなく、底部外面にヘラケズリを加える。151は杯・脚接合部にヘラミガキを行う。151・152は脚内面に刺突痕がなく、152はていねいに粘土をなでつけている。161~172・177・178は裾部が緩やかに開くものである。外面はタテハケのあとヘラミガキを行い、裾端部をナデ調整する。内面は柱状部にヘラケズリを加えたあと、裾部を1~2段のハケで調整する。178は杯・脚接合部の外面をヘラミガキによって調整する。173~176は裾内面をハケによって調整しない。176は外面にヘラケズリを行う。179は杯・脚接合部に充填した粘土塊である。刺突痕が残る。

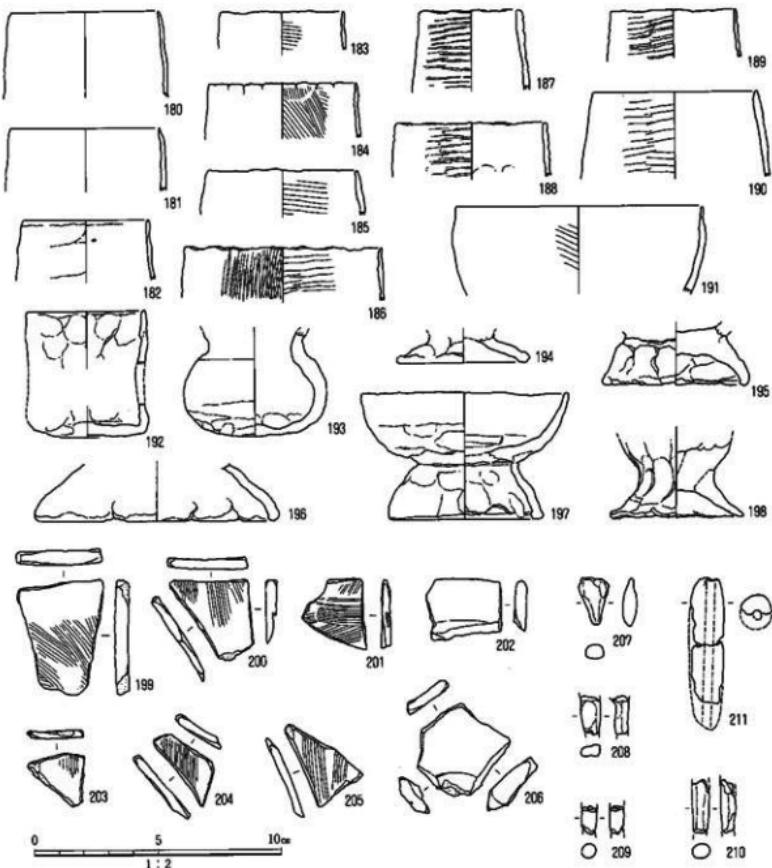


図29 SX701出土遺物(9)

製塙土器(図29、図版23)

すべて0.5~2.0cm大に細片化している。180~190は器壁の厚さが1~2mmの円筒状である。丸底のものと考えられる。187・188は口縁端部を丸くつくるが、ほかのものは薄くつくる。外面調整は180~185がユビオサエないしユビナデ、186が縦方向の貝殻によるナデ、187~190は横方向のタタキである。内面調整は180~182・187~190がユビナデ、183~186が貝殻によるナデである。焼成時の変形が著しいため口径を復元するのは困難であるが、おおむね4~7cmである。色調は灰白~褐灰色で、胎土は精良である。191は口径が大きい椀形の丸底のものである。器壁は3mmとやや厚い。外面に貝殻によるナデを行う。色調はにぶい褐色で、胎土に細かな砂粒を含む。焼成はやや不良である。192は器壁が薄い円筒状のものであるが、底が平らで粘土の緋目が顕著に残る。色調は黒色で、二次

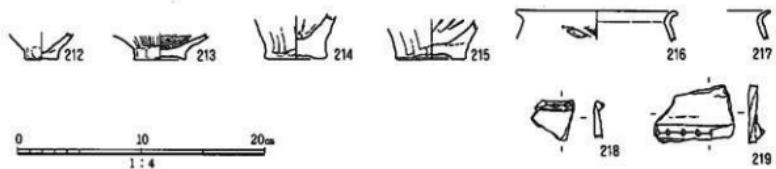


図30 SX701出土遺物(10)

的に被熱した痕跡が認められる。194~196・198は脚台式の台部である。すべて手づくね成形で、ユビオサエ痕が顕著である。

研磨痕がある土師器片(図29、図版23)

199~206は破断面に研磨痕がある土師器片である。199~201・203~205は、壺の体部片である。破断面の1~3面を研磨している。202は鉢の口縁部片である。1面を研磨している。206は高杯の杯底部片である。3面を研磨している。研磨の方向はすべて長軸方向で、中ほどが凹レンズ状に窪んでいる。複数の破断面が研磨されているものが多いことから、もともと小さくなっていた破片を手に持って、何かにこすりつけたものとわかる。

ミニチュア土器(図29、図版23)

193は土師器ミニチュア壺である。口縁部を欠いているほかに欠損はない。内・外側ともていねいにユビナデを行い、底は平らである。色調は黒~褐灰色で、胎土に砂粒は含まない。197はミニチュア器台である。ユビナデ・ユビオサエで調整する。色調は黒~灰褐色で、胎土に砂粒は含まない。193・197は焼成、胎土、調整ともに共通している。

土製品(図29、図版23)

211は土師質の管状土鏡である。長軸方向に直径4mmの孔がある。色調は灰色で、胎土に細かな砂粒を含む。207~210はすべて土師質の不明土製品である。207は平面が三角形で、図29において上部とした薄く幅の広い面に接合痕がある。色調はにぶい橙色で、胎土に0.5mm大の砂粒を含む。208~210は直径5mmの棒状のものである。色調は灰白色で、1mm大の砂粒を多く含む。

弥生土器(図30、図版23)

212~215は壺・壺類の底部である。213は内・外側にヘラミガキを行う。214・215は外側にタテハケ、内側にヨコハケを行う。底部外側は凹んでいる。すべて褐灰~灰黄色を呈し、1~2mm大の砂粒を多く含む。216・217は壺の口縁部である。口縁部は小さく外反し、端部を丸くおさめる。体部外側は弱い斜め方向のハケで調整する。胎土は生駒西麓産で灰黄褐色を呈し、1mm大の角閃石を含む。これらは弥生時代前期から中期のものであり、下位層を盛土とした際の混入品である。

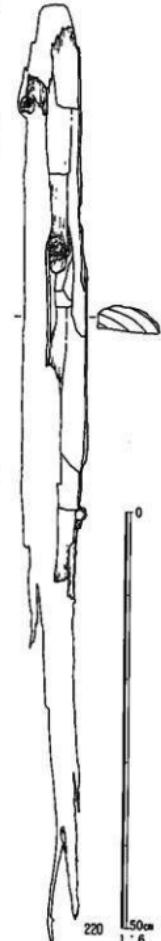


図31 SX701直上
出土遺物

長原式土器(図30、図版23)

218は深鉢の口縁部である。突帯は口縁部の先端よりも上位にかぶさるように貼付けられている。幅7mm、高さ6mmで、刻目の間隔は9mmである。体部の厚さは5mmである。219は深鉢の体部と突帯部分である。突帯は幅11mm、高さ6mmで、刻目の間隔は12mmである。218・219とも胎土は生駒西麓産で灰褐色を呈し、1mm大の角閃石を多く含んでいる。焼成は良好である。縄文時代晩期から弥生時代前期のものであり、下位層を盛土とした際の混入品である。

木製品(図31)

220は柱状の木製品である。表皮や節を鋭利な工具で平らに除去し、全体を面取り状に加工している。現状は縱に裂けているが、本来は芯が通った直径12cmほどの柱材であったと考えられる。

4) 小結

NG98-19次調査では、古墳時代中期の土器や玉類を大量に包含する土壇状遺構SX701を検出した。土器が土手などの斜面からまとまって見つかる例は、流路や環濠のような大溝で多数報告されているが、これらは不要なものを居住区側の斜面に投棄したのであり、今回のように土壇状の高まりを造る時に盛土の中に埋められたものとは出土状況が異なっている。SX701の遺物には、小さな土器片に混って滑石製の玉類や故意に欠損させた完形に近い土器が含まれていることから、単に不要なものを捨てたのではないようである。

土壇状遺構SX701から見つかった遺物は、盛土を行った時点での一括性が非常に高い資料である。これらは初期須恵器に相当する須恵器壺65や模倣壺78の出土により、古墳時代中期の中でも5世紀前半の早い時期に位置づけられると考えられる。土師器は明らかに下位層からの混入品とわかる30~35・62~64・66・67などを除き、ほとんどが布留式期IV[米田敏幸1991]の時期に納まるものである。ただし、高杯149は庄内式期の特徴をそなえており、出土状況からみても古い要素を残したもののが同時に存在していたと考えるべきであろう。

(松本)

第2節 NG98-20次調査

1) 地層と遺物

i) 層序

本調査区における現地表面はTP+10.5m前後である。現地表面から深さ1.2mまでは現代の客土であり、それより下位に現代の作土以下の地層が良好に遺存していた(図32~35、図版5~8)。ここでは層序の概略を記し、「長原遺跡の標準層序2001」[大阪市文化財協会2001]との対比を行う。各層の厚さなど、詳細は表5を参照されたい。なお、第10biv層以下の地層については花粉・珪藻分析を行っている。分析結果は第IV章を参照されたい。

沖積層上部層

第0層は現代の盛土層である。

第1層は層厚約10cmの、近・現代の作土層である。調査区の全面に分布し、長原1層に相当する。

第2層は総厚約40cmの、粗粒砂混り砂質シルトで構成される近世の作土層である。調査区の全面に分布し、a・b層に大別できる。伊万里焼・京焼・瀬戸焼を含むことから長原2層に相当する。

第2ai層：暗灰黄色粗粒砂混り砂質シルトからなる作土層である。下面でSK201を検出した。

第2aai層：暗灰黄色粗粒砂混り砂質シルトからなる作土層である。層中に無数の極細粒砂の薄層を挟むが、耕作ごとの小溝の重なりであるため細分しなかった。

第2b層：黄褐色中粒砂混り砂質シルトからなる作土層である。調査区の西部では、下底部に細粒砂のラミナを含む。

第3層は総厚約50cmで、室町時代から鎌倉時代の作土層と水成層の互層で構成される。作土層は耕起が不充分で粗粒砂の偽礫を多く含むことから、洪水と耕作が短い期間に繰返されていたことがわかる。調査区の全面に分布し、a～e層に大別できる。第3ai・ii層は長原3層に、第3aaiii層は長原4A層に、第3b～e層は長原4Bi・ii層に相当する。

第3ai層：暗オリーブ灰色粗粒砂混り砂質シルトからなる作土層である。土師器・瓦器・中世の陶器を含む。

第3aaiii層：灰黄褐色粗粒砂混り砂質シルトからなる作土層である。下底部に中粒砂のラミナおよび偽礫を含む。

第3aiii層：オリーブ褐色粗粒砂からなる水成層である。調査区東部に分布する。

第3bi層：灰黄褐色粗粒砂質シルトからなる作土層である。中粒砂の偽礫を多く含む。

第3bii層：黄褐色中粒砂からなる水成層である。

第3ci層：暗灰黄色中粒砂混り砂質シルトからなる作土層である。偽礫は見られず、比較的よく耕起されている。上面で踏込みを検出した。土師器・瓦器を含む。

第3cii層：暗灰黄色中粒砂からなる水成層である。第3di層上面の踏込みの中に残る。

第3di層：黄灰色粗粒砂混り砂質シルトからなる作土層である。上面で踏込みを検出した。

表5 NG98-20次調査地の層序

層序	長編標準剖面	剖面	厚さ (cm)	辺境	遺物	自然現象	特徴
第0層	NG0	現代灰土第1層	100				底土
第1層	NG1	オリーブ風色 (IOY3-/1) 合粗粒砂質シルト	20				作土
第2a層	NG2	暗灰黄色 (2SY4-/2) 合粗粒砂質シルト	25	▼SK201			作土
第2b層		黄褐色 (2SY5-/3) 中粒砂質シルト	≤40				作土
第3a層	NG3	黄褐色 (2SY4-/2) 合粗粒砂質シルト	30~45		戸戸篠・京焼・伊万里焼		作・木
第3aⅡ層		暗灰黄色 (IOY4-/1) 合粗粒砂質シルト	10~30		土師器・瓦器・陶器		作土
第3aⅢ層	NG4A	オリーブ褐色 (2SY4-/3) 粗粒砂	≤10				水成
第3b層		灰褐色 (IOY4-/2) 合粗粒砂質シルト	≤10				作土
第3bⅡ層		黄褐色 (2SY5-/3) 中粒砂	≤10				水成
第3c層		暗灰黄色 (2SY4-/2) 合中粒砂質シルト	≤10	▲踏込み	土師器・瓦器		作土
第3cⅡ層	NG4B-i	暗灰黄色 (2SY4-/2) 中粒砂	≤10				水成
第3d層		黄褐色 (2SY5-/1) 合粗粒砂質シルト	≤10	▲踏込み		一塊	作土
第3dⅡ層		暗灰黄色 (2SY4-/2) 合小粒粗粒砂	≤5				水成
第3e層		灰色 (IOY4-/1) 合粗粒砂シルト質粘土	≤30	▲SD301 ▲踏込み	土師器(平安中期)・瓦器		作土
第4a層		オリーブ灰色 (SG Y5-/1) 中粒砂	≤25	▲SR301 -302			水成
第4aⅡ層	NG4B-ii	暗オリーブ灰色 (SG Y4-/1) 合粗粒砂質シルト	≤20	▲踏込み ▲SD401	黒色土器B(平安中期)・土師器 て字口縁皿		作土
第4b層		オリーブ灰色 (SG Y5-/1) 粗粒砂	≤10				水成
第4c層		灰色 (IOY6-/1) 合粗粒砂質シルト	≤10	▲踏込み	土師器・黒色土器A(平安中期)		作土
第4cⅡ層		灰色 (IOY4-/1) 粗粒砂	≤5				水成
第4cⅢ層	NG4C	灰色 (IOY4-/1) 合粗粒砂シルト質粘土	≤20	▲踏込み			作土
第4d層		暗オリーブ灰色 (SG Y4-/1) 粗粒砂	≤5				水成
第5a層	NG5A	暗オリーブ灰色 (SG Y3-/1) シルト質粘土	15	▲踏込み	土師器・須恵器(平安Ⅱ～平安Ⅰ期) 製塩土器	桃核	作土
第5b層	NG5B	暗オリーブ灰色 (SG Y4-/1) 粘土	5				水成
第6a層	NG6A・B	暗オリーブ灰色 (SG Y5-/1) 中粒砂質粘土	10		土師器・須恵器(飛鳥II～平城初期)	桃核	作土
第6b層	NG6A・B	暗緑色 (05G Y3-/1) シルト・シルト質粘土・粘土	30~60				水成
第6bⅡ層	NG7A	暗緑色 (05G Y3-/2) シルト・シルト質粘土・粘土	10~20				水成
第6c層	NG7B	オリーブ灰色 (IOY3-/1) シルト質粘土	≤15	▲SD701 土手			炭化物ラミナ
第6cⅡ層		オリーブ黑色 (7SY3-/2) 粘土質シルト	10				炭化物ラミナ
第6cⅢ層		灰色 (7SY1-/1) 合中粒砂シルト	≤10	▲SD701 土手			暗色带
第7a層	NG7B-i	オリーブ灰色 (5Y6-/4) 粗・粗粒砂	≤20				水成
第7aⅡ層		灰白色 (5Y7-/2) オリーブ風色 (5Y3-/2) 中・粗粒砂	≤20		土師器・須恵器(TK47)	植物遺体 暗帶	水成
第7aⅢ層		暗オリーブ灰色 (2SG Y3-/1) シルト質粘土	≤25	▲NR702			水成
第7aⅣ層		オリーブ黑色 (NOY2-/1) シルト質粘土	≤10				水成
第7aⅤ層		オリーブ黑色 (IOY3-/1) シルト質粘土	≤5				水成
第7aⅥ層		灰色 (IOY4-/1) 粘土・暗オリーブ灰色 (SG Y3-/2) 粘土	10				炭化物ラミナ
第7aⅦ層		暗オリーブ灰色 (SG Y4-/1) 粗細粒砂～粘土	30				水成
第7aⅧ層		灰色 (IOY4-/1) シルト質粘土	≤15				水成
第7aⅨ層		灰色 (IOY4-/1) 粘土質シルト	≤15				炭化物ラミナ
第7aⅩ層	NG7Bii	オリーブ黑色 (IOY3-/1) シルト質粘土・粗粒砂	30~40		須恵器(TK216)	生痕 植物遺体	水成
第7aⅪ層		オリーブ黑色 (IOY3-/1) 粉質シルト・中粒砂	≤20		須恵器(TK216)・木製壺	生痕	水成
第7aⅫ層		オリーブ黑色 (7SY3-/2) シルト・粗粒砂	≤10			生痕	水成
第7aⅬ層		灰色 (IOY4-/1) 粉質シルト・粗粒砂	≤25		須恵器(TK216)	生痕 植物遺体	水成
第7aⅭ層		灰色 (IOY4-/1) 粉質シルト	≤10				水成
第7aⅮ層		灰色 (IOY4-/1) 粗粒粒砂	≤5	▲NR701			水成
第7b層		オリーブ黑色 (IOY3-/1) 合中粒砂粘土	≤15	▲踏込み	土師器		作土
第7bⅡ層	NG7Bii	オリーブ黑色 (2SY3-/1) 合粗粒砂質シルト	≤20	▲踏込み	土師器(5世紀前半)・製塩土器		周溝状樹 地斑土・ 作土
第7bⅢ層	NG7Bii	黑色 (7SY2-/1) 合粗粒砂シルト質粘土	≤25		土師器(5世紀前半)・製塩土器	SX702 底土	
第7bⅣ層		黑色 (5Y2-/1) 合粗粒砂シルト質粘土	≤25	上面に灰土	土師器(5世紀前半)・製塩土器 白玉	SX702 底土	
第7bⅤ層	NG7Bii	オリーブ黑色 (5Y3-/1) 合粗粒砂質シルト	≤5	▲土壤状盤 →SB701	生痕土・土師器	暗色带	

番号	長導標序	層相	厚さ (cm)	地塊	地物	自然現象	特徴
第8a層	NG8A	灰色 (5Y4/1) 合粗粒粘土	≤25		生土色・變復土色 サヌカイト		
第8b層	NG8B	オリーブ褐色 (5Y3/1) 粘土質シルト	5				
第8c層	NG8C	灰色 (5Y5/1) 粗粒砂・暗緑褐色 (5G Y3/1) 粘土	≤5				水成
第9ai層	NG9A	黒色 (5YR3/1) 中粒砂～粘土質シルト	≤30	▲SD901 902-903	長底式土器・紫生土器 サヌカイト	生痕 暗色帶	
第9ab層		オリーブ褐色 (5Y5/1) 粘土	≤10				水成
第9ac層		黒褐色 (25Y3/1) 粘土質シルト	≤5			暗色帶	水成
第9ad層		灰色 (5Y5/1) 粘土質シルト	≤5			植物遺体	水成
第9ae層		オリーブ褐色 (5Y3/1) 粘土質シルト	≤5			暗色帶	水成
第9af層		灰色 (25Y4/1) シルト質粘土	≤25				水成
第9ag層		オリーブ褐色 (5Y3/2) 粘土質シルト	≤10			生痕	水成
第9bh層	NG9Biv	黑色 (25G Y2/1) 合粗粒砂シルト	≤20			暗色帶	水成
第9bi層		灰オリーブ色 (5Y6/2) 粗粒砂～細砂	≤95			植物遺体	水成
第9bm層		灰色 (5Y4/1) 中粒砂	≤5				水成
第9bo層		黒褐色 (25Y3/2) 粘土～シルト	≤15			暗色帶	水成
第9bv層	NG9Bv	黄褐色 (25Y4/1) 中～粗粒砂	≤70			植物遺体	水成
第9bw層		灰色 (5Y4/1) 粗粒砂	≤5				水成
第9bx層		オリーブ褐色 (5Y3/1) シルト～粘土質シルト	≤10			炭化物ラミナ	水成
第9by層		黑色 (25Y2/1) 粘土	≤10				水成
第9bz層		暗オリーブ色 (25G Y4/1) 細粗粒砂	≤5				水成
第9ci層	NG9Ci	黑色 (5Y2/1) シルト質粘土	10			木根痕・暗色帶	
第9cj層	NG9Cii	黑色 (75Y2/1) シルト質粘土	≤5				水成
第9ck層		黑色 (25Y2/1) シルト質粘土	≤5			暗痕・暗色帶	
第9cl層	NG9Ciii	黑色 (5Y2/1) シルト	≤5				水成
第9cm層		黑色 (25Y2/1) 粘土質シルト	≤5			暗痕・地色帶	
第9cw層	NG9Civ	オリーブ褐色 (5Y3/1) 細粗粒砂	≤5			暗痕	水成
第9cw層		灰色 (5Y4/1) 賢賀シルト	10			暗帶・暗色帶	水成
第10a層		暗オリーブ色 (25G Y4/1) シルト～中粒砂	20				水成
第10b層		暗オリーブ色 (5G Y3/1) 中～粗粒砂	30～50				水成
第10ba層	NG10	暗オリーブ色 (5G Y3/1) 細粗粒砂～シルト	10			炭化物ラミナ	水成
第10ba層		暗オリーブ色 (5G Y4/1) 粗粒砂	10				水成
第10bb層		灰色 (5G Y4/1) 合粗粒砂シルト	10			生痕・炭化物ラミナ	水成
第11a層		灰色 (5Y5/1) 粗粒砂	≤60				水成
第11a層		灰色 (5G Y5/1) 粗粒砂	≤30				水成
第11b層		オリーブ褐色 (5Y5/1) 粘土	≤10			生痕・炭化物ラミナ	水成
第11c層		灰色 (5Y5/1) シルト～細粗粒砂	≤5				水成
第12a層	NG12A	黑色 (5Y2/1) シルト質粘土	10			木根痕・暗色帶	
第12a層		灰色 (25Y4/1) シルト質粘土	5				水成
第12a層		オリーブ褐色 (5Y5/1) 粘土質シルト	5			暗色帶	水成
第12a層		灰色 (25Y4/1) 粘土質シルト	10				水成
第12b層	NG12Bi	オリーブ褐色 (5Y5/1) シルト質粘土	10			暗色帶	水成
第12b層		暗オリーブ色 (5G Y4/1) 細～中粒砂	30				水成
第12b層	NG12Bii	灰オリーブ色 (5G Y4/1) 細～粗粒砂	40				水成
第12b層		灰色 (5Y5/1) 細粗粒砂・シルト・粘土	15				水成
第12b層		灰色 (5Y4/1) 中粒砂	≤5			生痕	水成
第12b層	NG12Biv	オリーブ褐色 (5Y5/1) 細粗粒砂・シルト・粘土	≤25			植物遺体・炭化物ラミナ	水成
第12b層	上部	褐灰色 (5G Y4/1) 細粗粒砂	≤5				水成
第12c層	NG12Biv	オリーブ褐色 (5Y3/2) 粘土質シルト	≤10			炭化物	水成
第12d層		黑色 (25Y2/1) 粘土	≤2			炭化物	水成
第12e層		黑色 (25Y2/1) 合粗粒砂粘土質シルト	≤5			炭化物・生痕	水成
第12f層	NG12Ci	暗褐色 (5GYR3/1) シルト質粗粒砂	≤5			生痕	
第13a層	NG12Cii ～13A	暗褐色 (25Y3/1) 粘土質シルト	≤5		サヌカイト・礫石	生痕・變大跡火山灰 歟火山灰	
第13b層		褐色 (25Y5/2) 粘土・シルト質粗粒砂				生痕	
第13c層	NG13B	暗灰褐色 (25Y5/2) シルト質火山灰	≤3			平安神宮火山灰	
第14層	NGC14	黃褐色 (25Y5/1) 粘土質シルト					

▲：上面被出追跡 ▼：下面被出追跡 ←：層中被出追跡

第3dii層：暗灰黄色小礫混り粗粒砂からなる水成層である。調査区の西部に分布する。

第3e層：灰色粗粒砂混り砂質シルトからなる作土層である。調査区の西部に分布する。上面でSD301を検出した。土師器・瓦器221を含む。

第4層は総厚30~60cmの、オリーブ灰色粗粒砂～シルト質粘土を主体とする水成層と作土層の互層で構成される。作土層は耕起が不充分で粗粒砂の偽礫を多く含むことから、洪水と耕作が短い期間に繰返されていたことがわかる。調査区の全面に分布し、a～c層に大別できる。第4a～cii層は長原4Biii層に、第4ciii・iv層は平安時代の土師器・黒色土器を含むことから長原4C層に相当する。

第4a層：オリーブ灰色中粒砂からなる水成層である。厚さは約20cmで、第3・4層の水成層の中ではもっとも厚く、調査区のほぼ全面を覆う。ラミナが水平方向に見られ、砂粒の堆積は広範囲に及び、水流は穏やかであったことがわかる。調査区の東部を流れるSD401を最終的に埋める場所では灰色粘土～極細粒砂となる。上面に第4a層を削って盛り上げた南北方向のSR301・302が造られ、間の低地部分は耕地となっている。

第4bi層：暗オリーブ灰色粗粒砂混り砂質シルトからなる作土層である。粗粒砂の偽礫や生物擾乱が顕著に見られる。上面でSD401と踏込みを検出した。黒色土器B類・土師器を含む。

第4bii層：オリーブ灰色粗粒砂からなる水成層である。

第4ci層：灰色粗粒砂混り砂質シルトからなる作土層である。粗粒砂の偽礫や生物擾乱が顕著に見られる。上面で踏込みを検出した。黒色土器A類222・土師器を含む。

第4cii層：灰色粗粒砂からなる水成層である。

第4ciii層：灰色粗粒砂混りシルト質粘土からなる作土層である。比較的よく耕起されている。上面で踏込みを検出した。

第4civ層：暗オリーブ灰色粗粒砂からなる水成層である。第5a層上面の踏込み内に残る。

第5層は総厚10~15cmの、シルト質粘土を主体とする作土層と水成層である。全面に分布し、a・b層に大別できる。奈良時代から平安時代の遺物を含むことから、長原5層段階の地層に相当する。

第5a層：暗オリーブ灰色シルト質粘土からなる作土層である。上面で踏込みを検出した。奈良時代後半から平安時代初頭の土師器223・224・229、須恵器・製塩土器を含む。

第5b層：暗オリーブ灰色粘土からなる水成層である。

第6層は総厚50~140cmの、粘土～極細粒砂を主体とする水成層および砂質シルトの暗色帯である。水成層は堆積物が細粒でラミナが水平方向に見られることから、広範囲に穏やかに堆積したことがわかる。調査区全面に分布し、a～c層に大別できる。第6a層は長原6層に、第6bi層は長原7A層に、第6bii・iii層は長原7B0層に相当する。第6c層は暗色帯で、長原7Bi層の最上部に相当する。

第6a層：暗オリーブ灰色中粒砂混り砂質粘土からなる作土層である。下面で踏込みを検出した。

奈良時代の土師器225~228・231・239、須恵器230・232~236・241、製塩土器243~247、砥石251を含む。

第6bi層：暗緑灰色シルト～粘土からなる水成層である。土師器240・TK209型式の須恵器242を含む。SD701の上部にあたる窪みには、細粒砂が堆積している。

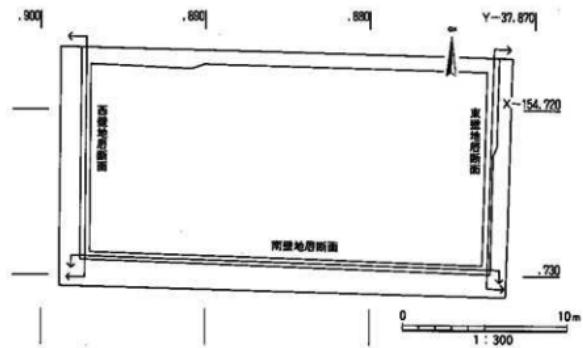
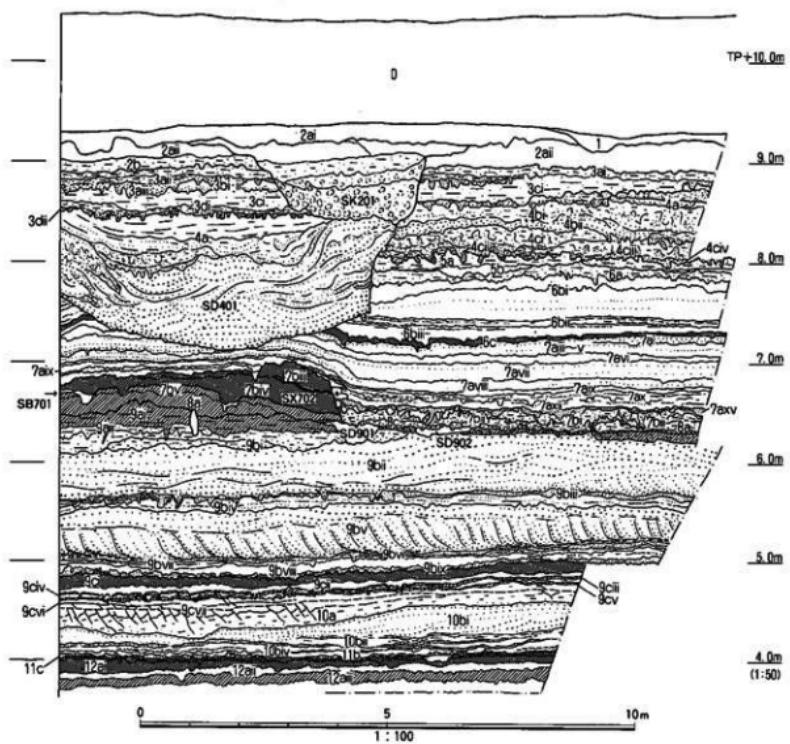


図32 NG98-20次調査東壁地層断面図

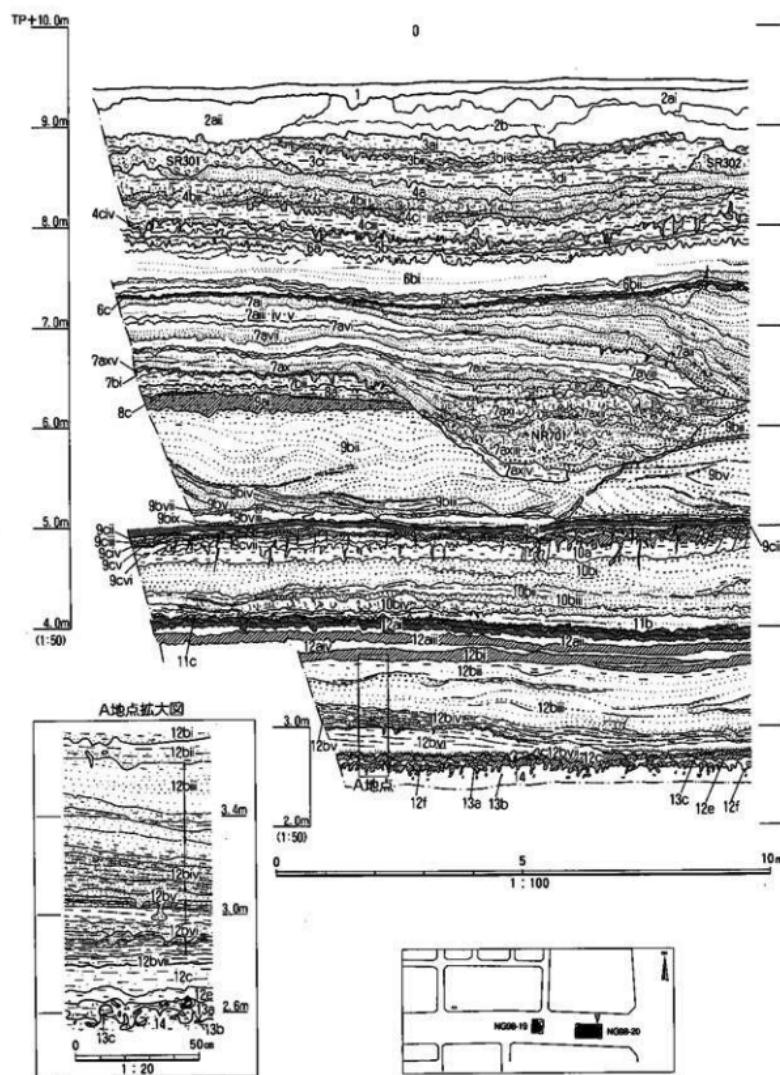


図33 NG98-20次調査南壁地層断面図(東半)

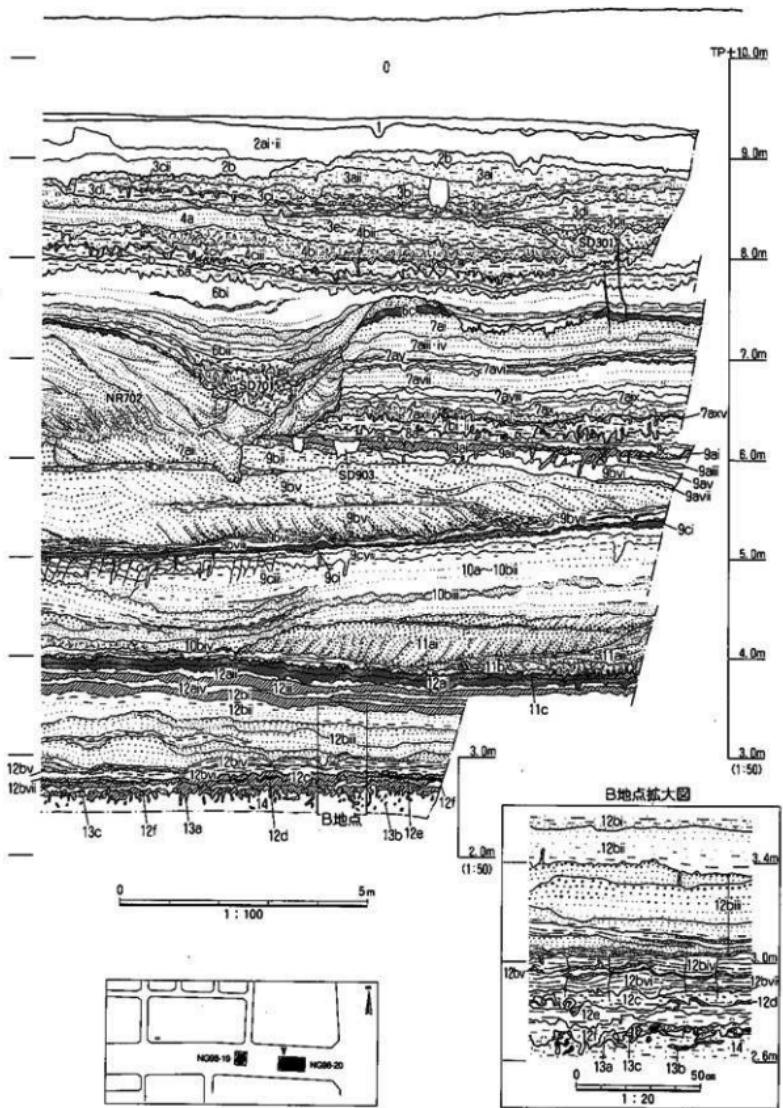


図34 NC98-20次調査南壁地層断面図(西半)

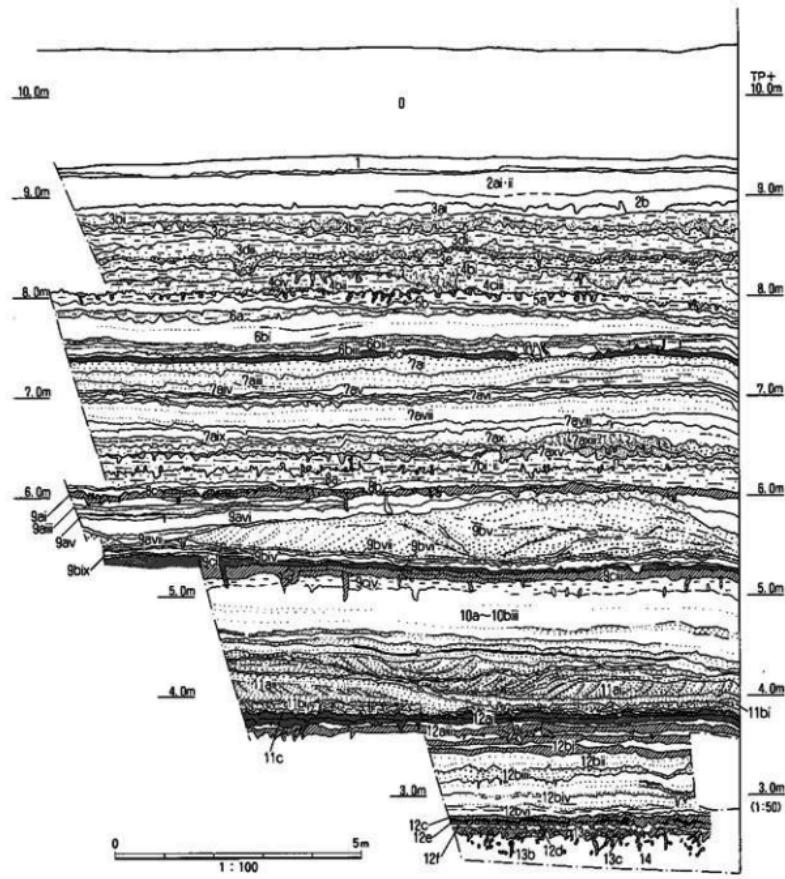


図35 NG98-20次調査西壁地層断面図

第6bii層：オリーブ黒色シルト質粘土からなる水成層である。炭化物のラミナを多く含む。

第6biii層：オリーブ黒色粘土質シルトを主体とする水成層である。炭化物のラミナを少し含む。

第6c層：黒色中粒砂混りシルトからなる古土壤である。上面でSD701とそれに伴う土手および乾痕を検出した。上面は東に向って低くなる傾向があるが、SD701の東岸は第7a層の噴砂によって盛り上がっている。

第7a層は総厚80~180cmの水成層である。基本的に粒径の細かい砂粒が下位に、粗い砂粒が上位に水平堆積しており、逆級化構造を示している。調査区中央のNR701・702にはいずれも粗い砂礫が堆積しており、流水の激しさを示している。出土遺物から第7ai・ii層は長原7Bi層に、第7aiii~xv層は

長原7Bii層に相当する。

第7ai層：オリーブ黄色細～粗粒砂からなる水成層である。

第7aii層：灰白色・オリーブ黒色中～粗粒砂からなる水成層である。斜行葉理が顯著で、植物遺体を含む。おもにNR702を埋積する。土師器307～309、TK47型式の須恵器305・306を含む。

第7aiii層：暗オリーブ灰色シルト～細粒砂からなる水成層である。

第7aiv層：オリーブ黒色シルト質粘土からなる水成層である。

第7av層：オリーブ黒色シルト質粘土からなる水成層である。

第7avi層：灰色粘土からなる水成層である。調査区の西半部では炭化物の薄層が2層に分かれて間に暗オリーブ灰色粘土を挟むが、東半部では同化して1層の暗色帯となる。

第7avii層：暗オリーブ灰色極細粒砂～粘土からなる水成層である。

第7aviii層：灰色シルト質粘土からなる水成層である。炭化物のラミナを含む。

第7aix層：灰色粘土質シルトからなる水成層である。炭化物のラミナを含み、やや暗色に見える。

第7ax層：オリーブ黒色シルト質粘土～細粒砂の水成層である。植物遺体と炭化物のラミナを含む。NR701を埋積する部分では生物擾乱によるラミナの歪みが見られる。

第7axi層：オリーブ黒色砂質シルト～中粒砂からなる互層からなる水成層である。NR701の上部に堆積し、生物擾乱や踏込みによるラミナの歪みが顯著である。土師器・TK216型式の須恵器302・杭状の木製品304を含む。

第7axii層：オリーブ黒色シルト～粗粒砂の互層からなる水成層である。生物擾乱によるラミナの歪みが顯著に見られる。

第7axiii層：灰色砂質シルト～粗粒砂の互層からなる水成層である。生物擾乱によるラミナの歪みが顯著に見られる。土師器297～300・須恵器303が出土している。

第7axiv層：灰オリーブ色砂質シルトからなる水成層である。NR702の最下部に堆積する。

第7axv層：灰色極細粒砂からなる水成層である。第7bi・ii層上面の踏込み内に残る。

第7b層は総厚40cm以下の、粗粒砂混り砂質シルトを主体とする暗色帯である。土壇状遺構SX702および周辺の耕作地に関連する古墳時代中期の地層である。第7bi～v層は長原7Bii層に相当する。

第7bi層：オリーブ黒色中粒砂混り粘土からなる作土層である。調査区の西部で南東～北西方向の畦畔を、また上・下面で踏込みを検出した。古墳時代中期の土師器を含む。

第7bii層：オリーブ黒色粗粒砂混り砂質シルトからなる作土層である。土壇状遺構SX702を囲む周溝状の窪地に堆積する。上・下面是凸凹し、第8c層の偽礫を含む。古墳時代中期の土師器を含む。

第7biii層：黒色粗粒砂混りシルト質粘土を主体とする、SX702を構成する盛土の上層である。オリーブ灰色粘土の偽礫を含む。古墳時代中期の土師器・製塙土器を含む。

第7biv層：黒色粗粒砂混りシルト質粘土を主体とする、SX702を構成する盛土の下層である。黒色砂質粘土の偽礫を含む。古墳時代中期の土師器・製塙土器・白玉を含む。上面に厚さ0.5cmほどの炭化物の薄層がある。

第7bv層：オリーブ黒色細粒砂混り砂質シルトからなる暗色帶である。第8a層との境は漸移的で不明瞭である。本層掘削中にSB701を検出した。

第8層は総厚15～30cmの暗色帶と水成層である。a～c層に大別できる。弥生土器を含むことから長原8層に相当する。

第8a層：灰色粗粒砂混り粘土層である。弥生土器248・249、サスカイト252を含む。

第8b層：オリーブ黒色粘土質シルトからなる水成層である。調査区の西半部に分布する。

第8c層：調査区の東半部では灰色粗粒砂、西半部では暗緑灰色粘土からなる水成層である。

第9層は総厚80～200cmの氾濫性の堆積層および暗色帶である。調査区の全面に分布し、a～c層に大別できる。第9c層の上面は、標高が西部より東部の方が約60cm低い。そのため東部では水成層を挟んで暗色帶が3層に分かれて堆積している。出土遺物と堆積状況から、第9ai～bix層は長原9A～B層に、第9ci～vii層は長原9C層に相当する。

第9ai層：黒色中粒砂～粘土質シルトからなる暗色帶である。東に向って標高が高く、厚くなる傾向がある。上面でSD901～903を検出した。長原式土器250、弥生土器、サスカイト253・254を含む。西半部では植物根の生痕が顕著である。

第9aii層：オリーブ黒色粘土からなる水成層である。南西隅の窪地に堆積する。

第9aiii層：黒褐色粘土質シルトからなる水成層である。南西隅の窪地に堆積する。やや暗色に見える。

第9aiv層：灰色粘土質シルトからなる水成層である。南西隅の窪地に堆積する。

第9av層：オリーブ黒色粘土質シルトからなる水成層である。南西隅の窪地に堆積する。暗色に見える。

第9avi層：灰色シルト質粘土からなる水成層である。南西隅の窪地に堆積する。

第9avii層：オリーブ黒色粘土質シルトからなる水成層である。南西隅の窪地に堆積する。やや暗色化している。生痕が認められる。

第9bi層：黒色粗粒砂混りシルト層である。上部はシルト質が強い。

第9bii層：灰オリーブ色粗粒砂～細礫からなる厚い水成層である。下底部に植物遺体を多く含む。

第9biii層：灰色中粒砂を主体とする水成層である。調査区の東部に分布し、(ほぼ)水平に堆積している。本層と第9biv層は堆積物が細粒であるため、安定した流水で堆積しているが、第9bii層をもたらした水流によって、調査区の中央部では大きく上下にうねっている。

第9biv層：黒褐色粘土～シルトの水成層である。炭化物のラミナを多く含む。調査区の東部に分布し、上面に踏込み状の凹凸がある。

第9bv層：黄灰色中～粗粒砂からなる厚い水成層で、斜行葉理が顕著である。下底部に植物



写真9 第9ci層上面検出状況(南西隅)

遺体を多く含む。ラミナの方向から、流水の方向は北東-南西とわかる。

第9bvi層：灰色細粒砂からなる水成層である。ラミナはほぼ水平堆積し、本層から第9bix層までは安定した流水のもとで堆積している。

第9bvii層：オリーブ黒色シルト～粘土質シルトからなる水成層である。炭化物ラミナを含む。

第9bviil層：黒色粘土からなる水成層である。

第9bix層：暗オリーブ灰色極細粒砂からなる水成層である。平面では霜降り状に見える。

第9ci層：黒色シルト質粘土からなる暗色带である。上面には第9bv層をもたらした水流による圧痕が、南東-北西方向に蛇行する溝となって残る(写真9)。下面に植物根による生痕がある。古土壤と考えられる。

第9cii層：黒色シルト質粘土からなる水成層である。調査区の東部に分布する。

第9ciii層：黒色シルト質粘土からなる暗色带である。調査区の西部では厚い。上面に乾痕が見られる。下面に植物根による生痕が顕著に見られる。古土壤と考えられる。

第9civ層：黒色シルトからなる水成層である。調査区の東部に分布する。

第9cv層：黒色粘土質シルトからなる暗色带である。上面に乾痕が見られ、古土壤と考えられる。

第9cvi層：オリーブ黒色極細粒砂からなる水成層である。やや暗色に見える。

第9cvii層：灰色砂質シルトからなる水成層である。やや暗色に見える。下面に植物根による生痕がある。調査区東部では地震による水平断層や、それに引きずられた深さ10~30cmの地割れが無数に見られる。水平断層は厚さ約3mmの灰オリーブ色粘土の薄層となって残る。地割れは水平断層によって横方向に引っぱられているため、平面では鱗状のヒビ割れとして観察できる。

地層のずれた方向は、南東-北西である。

第10層は総厚40~100cmの氾濫性の堆積層である。全面に分布し、a・b層に大別できる。長原10層に相当する。上半部には第9c層から延びる生痕化石が見られる。生痕内の埋土は灰色粘土である。

第10a層：暗オリーブ灰色シルト～中粒砂からなる水成層である。ほぼ水平に堆積している。

第10bi層：暗オリーブ灰色中～粗粒砂からなる水成層である。ほぼ水平に堆積している。

第10bii層：暗オリーブ灰色極細粒砂～シルトからなる水成層である。炭化物のラミナを含む。

第10biii層：暗オリーブ灰色粗粒砂からなる水成層である。

第10biv層：灰色粗粒砂混りシルトからなる水成層である。炭化物のラミナを含み、生物擾乱によるラミナの歪みが顕著に見られる。

第11層は総厚10~50cmの氾濫性の堆積層である。調査区全面に分布し、a～c層に大別できる。長原11層に相当する。

第11ai層：灰色細～粗粒砂からなる水成層である。調査区の北西部に厚く堆積する。ラミナの傾斜から、水流の方向は北西-南東とわかる。

第11aii層：灰色粗粒砂からなる水成層である。調査区の南西部に厚く堆積する。

第11b層：オリーブ黒色粘土からなる水成層である。炭化物のラミナを含み、生物擾乱によるラミナの歪みが顕著に見られる。

第11c層：灰色シルト～極細粒砂からなる水成層である。平面では霜降り状に見える。

沖積層中部層以下

第12層は総厚120～150cmの水成層および暗色帯である。調査区全面に分布し、a～f層に大別できる。第12a層は長原12A層、第12b～e層は長原12B層、第12f層は長原12Ci層に相当する。擾乱のない部分はラミナが水平であることから、安定した水流で堆積したものとわかる。

第12ai層：黒色シルト質粘土からなる暗色帯である。下面に植物根による生痕が見られる。

第12a ii層：灰色シルト質粘土からなる水成層である。

第12a iii層：オリーブ黒色粘土質シルトからなる水成層である。やや暗色化する。

第12a iv層：灰色粘土質シルトからなる水成層である。

第12bi層：オリーブ黒色シルト質粘土からなる水成層である。やや暗色化する。調査区の中部や西部では2層に分かれ、間に灰色シルト質粘土からなる水成層を挟む。

第12bii層：暗オリーブ灰色極細～中粒砂からなる水成層である。

第12biii層：灰オリーブ色細～粗粒砂からなる水成層である。

第12biv層：灰色極細粒砂・シルト・粘土の互層からなる水成層である。

第12bv層：灰色中粒砂からなる水成層である。生物擾乱が認められる。

第12bvi層：オリーブ黒色極細粒砂・シルト・粘土の互層からなる水成層である。それぞれの厚さは2cm以下である。明瞭な炭化物のラミナを2～3枚含み、全体に微細な植物遺体を含む。

第12b vii層：褐色極細粒砂からなる水成層である。

第12c層：オリーブ黒色細粒砂混り粘土質シルトからなる水成層である。1mm大の炭粒を多く含み、極細粒砂のラミナがわずかに認められる。上・下面とも擾乱が著しい。暗色化している。

第12d層：黒色粘土からなる水成層である。層厚は3cm以下と薄く、切れぎれな状態で調査区の西部に分布する。ほとんど炭化物のラミナで構成される。

第12e層：黒色細粒砂混り粘土質シルトからなる水成層である。1mm大の炭粒を含む。調査区の西部に分布し、生痕による擾乱がある。第12c層と同様に沼地状の堆積である。暗色化している。

第12f層：黒褐色シルト質細粒砂層である。層厚約5cm以下で、調査区のほぼ全面に分布する。生痕による擾乱が著しい。上・下面是凸凹している。

第13層は総厚約10cmの暗色帯である。調査区の全面に分布し、a～c層に大別できる。第13a・b層は長原12Ci～13A層に、第13c層は長原13B層に相当する。

第13a層：黒褐色粘土質シルト層である。生痕による擾乱が著しく、層中や下面に直径約4cm、深さ15cm以下の細長い果穴状の生痕化石が顕著に見られる。上面の標高はTP+2.65m前後である。横大路火山灰のガラス・阪手火山灰層のガラスや角閃石を含むことから、後期旧石器時代から縄文時代早期末にかけての地層と考えられる。サヌカイト剥片255、軽石256・257を含む。

第13b層：黒色粘土・シルト質細粒砂層である。第13a層に重複する生痕化石の埋土である。生痕化石は直径約3cm、深さ15cm以下で、先端が細かい。第13a層との先後関係は、両者の生痕による擾乱が著しいために不明である。

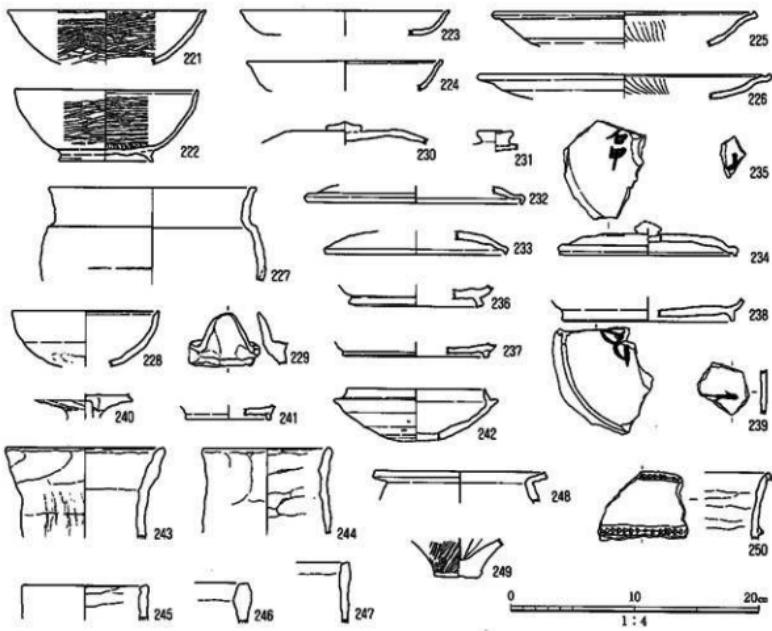


図36 各層出土遺物(1)

第13c層：暗灰黄色シルト質火山灰層である。二次的に堆積した平安神宮火山灰のガラスを多量に含む。調査区の全面に分布するが、上位の生痕化石によって破壊され、まだらに残る。

第14層は黄灰色砂礫混り粘土質シルト層である。長原14層に相当し低位段丘構成層以下にある。
ii)各層出土の遺物

第3e層出土の遺物(図36)

221は瓦器碗である。口縁内面に浅い凹線が巡る。内面は口縁付近に細かいヘラミガキを行い、それ以下に太く粗いヘラミガキを行う。外面はヘラケズリを加えたあと、上部に横方向のヘラミガキを、下部に弧状のヘラミガキを施す。平安時代IV期古段階、C-I期に属する。

第4ci層出土の遺物(図36、図版25)

222は黒色土器A類の碗である。高台は高く細く、ていねいなヨコナデによって貼付けられている。口縁内面に浅い凹線が巡る。内面は底部に太く密なジグザグのヘラミガキを行ったあと、側面に太く密な横方向ヘラミガキを施す。外面は粗い横方向ヘラミガキを施す。平安時代II期に属する。

第5a層出土の遺物(図36、図版25)

223は土師器皿である。口縁はわずかに外反し、内面に面をもつ。224は土師器杯である。口縁内面に凹線が巡る。229は土師器の把手部分である。体部との接合部から直線的に立上がる。体部の器壁は厚さ0.5cmである。これらは奈良時代後半から平安時代初頭に相当する。

第6a層出土の遺物(図36・37、図版25)

225・226は土師器高杯である。杯部は皿状で端部を内側に丸める。口縁内面に放射状暗文を施す。227は土師器甕である。口縁部は肩部から強く外反するが、端部はほぼ直立して面をなす。胎土は粗く、粘土紐の継目が外面に残る。228は土師器杯である。口縁端部は細く、内面に幅広の浅い凹線が巡る。内面はナデ調整で、外面はユビオサエを行ったあと上半部にヨコナデ調整を行う。231は土師器蓋のつまみ部分である。235は判読不明の墨書がある須恵器片である。230・232~234は須恵器杯

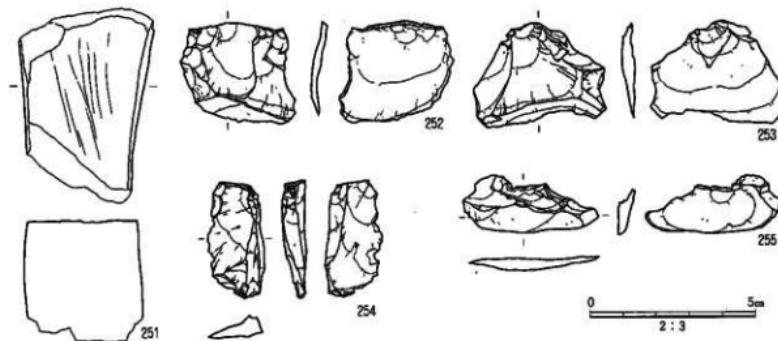


図37 各層出土遺物(2)

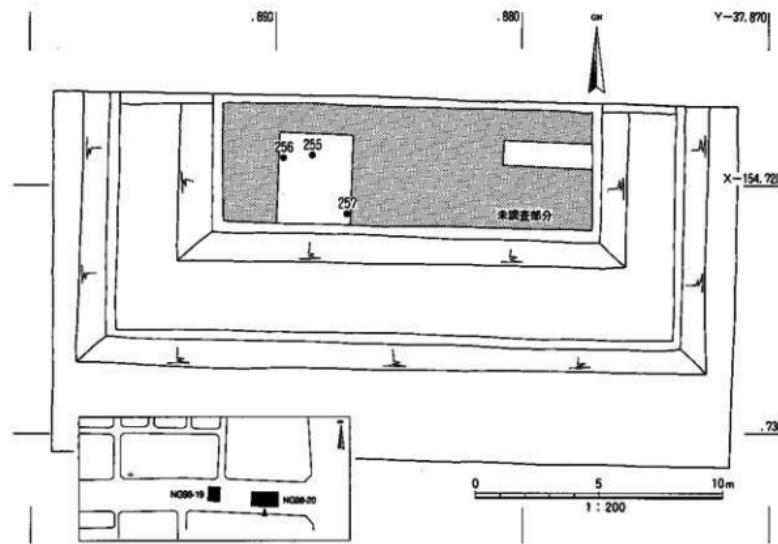


図38 第13a層中遺物の出土位置

蓋である。230は扁平な擬宝珠形のつまみが付く。232は端部が丸く、内傾する。233は端部が尖り、内傾する。234は端部が尖り、小さく外反する。外面の中央寄りに「匂甲」の墨書がある。236～238・241は須恵器杯Bである。236は高い高台が付き、ていねいな回転ナデ調整で仕上げられている。237は断面が正方形の低い高台が付く。238は細く高い高台が付く。外底面に墨画がある。241は断面が正方形の高台が付く。239は墨書がある土師器片である。これらは飛鳥II～平城宮土器IIIに属する。243～247は丸底III式の製塙土器である。色調は灰白色で、胎土には0.5～2.0mm大の砂粒を多く含む。器壁は0.7cm前後で厚く、胎土のきめは粗く軽い。すべて口縁部にヨコナデ調整を行い、体部はユビナデ・ユビオサエによる調整で仕上げる。これら以外に、粗い布目痕が残る破片も出土している。

251は堆積岩製の砥石である。直方体の一端が残る。長側面の3面を使用している。

第6bi層出土の遺物(図36、図版25)

240は土師器高杯である。杯部の内底面に菊花状暗文を施す。外底面はユビオサエによって調整し、底部と口縁部を画する屈曲部には擬口縁がある。242は須恵器杯身である。立上がりは短く内傾し、外底面に施した回転ヘラケズリは粗雑である。TK209型式に相当する。これらは飛鳥Iに相当する。第8a層出土の遺物(図36・37、図版25)

248は弥生土器壺である。口縁部は「く」字に屈曲し、端部に面をもつ。内・外面ともていねいなヨコナデ調整で仕上げる。249は弥生土器壺の底部である。外面の調整は密な右上がりのタタキである。内面の調整は横方向のハケである。底部外面は凹んでいる。これらは畿内第V様式に相当する。

252はサヌカイト製の横形剥片である。自然面を叩き、薄く削取られている。背面には底面状の広い剥離面と、主要剥離面と同方向の先行剥離面が並ぶ。

第9ai層出土の遺物(図36・37、図版25)

250は長原式土器深鉢である。SX702下層の第9ai層から出土した。色調は灰褐色で、焼成は良好である。胎土は生駒西麓産で0.5mm大の角閃石を含む。口縁端部と、そこから4.4cm下に突帯を貼付ける。刻目は5mm前後の間隔で垂直に工具を当てている。縄文時代晩期から弥生時代前期のものである。

253はサヌカイト製の横形剥片である。打点・打面は打撃の際にはじけ飛んでいる。背面にも同時に見られる同方向の剥離面が見られる。254はサヌカイト製の縦方向に割れた剥片である。最後の打撃は団で上とした平らな自然面に加えられており、そこから垂直に割れが生じている。下からも同様な割れが生じていることから、クサビとして使用されたことがわかる。

第13a層出土の遺物(図37・38、図版25)

255はサヌカイト製の横形剥片である。背面には主要剥離面とほぼ同方向の小さな剥離面が複数認められる。末端には石核の素材となった剥片のボジティブな剥離面が残る。風化の具合から、旧石器時代にさかのほるものと考えられる。256・

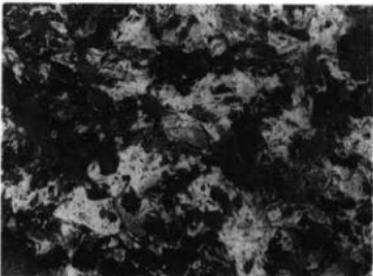


写真10 生駒化石と剥片255の出土状況

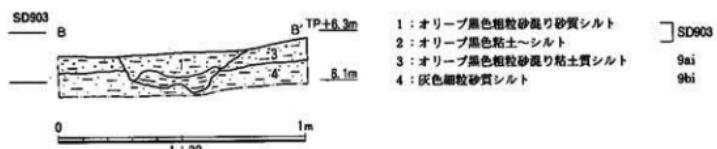
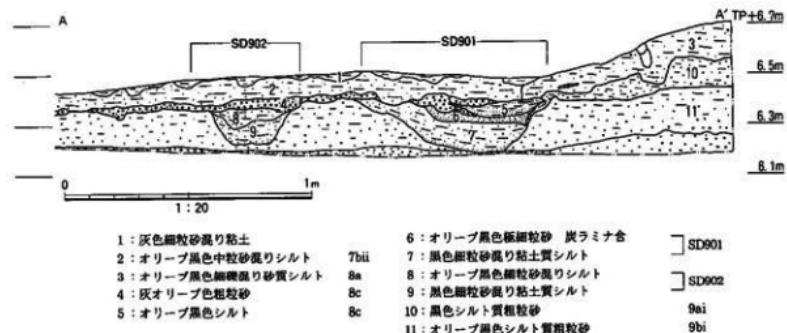
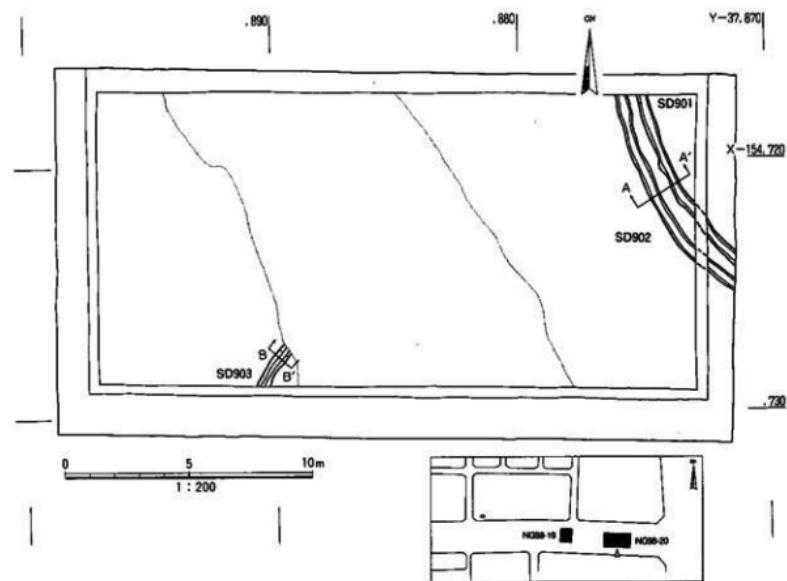


図39 SD901～903の平・断面図

257は軽石である(図版25)。これらはいずれも第13a層の生痕中から見つかった(写真10)。

2) 弥生時代の遺構と遺物

i) 溝

SD901・902(図39、図版9)

北東部に位置し、第9ai層上面で検出した平行する溝である。調査区の北東隅は第9ai層段階では周囲より約0.3m高い微高地であり、2条の溝はその裾に沿って弧状に掘られている。底面の標高は両方の溝とも北部が低い。SD901は幅0.5m、深さ0.2mで横断面は浅いU字形である。埋土は上部に極細粒砂を主体とする水成層が堆積し、下部にも粘土質シルトを主体とする水成層が堆積する。下底部にはわずかに細粒砂のラミナが見られる。SD902は幅0.4m、深さ0.2mで横断面はU字形である。埋土は上部に細粒砂混りシルトが堆積し、下部に細粒砂混り粘土質シルトが堆積する。下底部にはわずかに細粒砂のラミナが見られる。埋土から弥生土器の細片が出土した。

SD903(図39、図版9)

西部に位置し、第9ai層上面で検出した溝である。幅0.5m、深さ0.2mで、横断面は浅いU字形である。埋土は上部が粗粒砂混り砂質シルトで、下部が粘土～シルトからなる水成層である。溝の北部は古墳時代のNR702によって失われている。

3) 古墳時代中期の遺構と遺物

i) 壴穴式住居

SB701(図40、図版10)

調査区の北東隅で第7bv層の掘削中に検出した方形の竪穴式住居である。周壁溝は全体の西半分しか確認できなかったが、幅0.2m、深さ0.1m、西辺の長さは4.4mである。周壁溝より内側では、溝に沿って柱穴SP701(写真11)・702を、中央部で方形の浅い窪みを検出した。また、西辺の中央から直角に東へ延びる小溝を検出した。SP701は上部の直径0.35m、深さ0.4mで、底部が1段低い。埋土は下底部が粘土で、中位がシルト質粘土の偽礫を含む砂混り粘土、上位が砂混り粘土である。最上部には拳大の石が乗っていた。SP702はトレチの壁面で確認した。方形の浅い窪みは1辺が1.3m、深さ0.03m以下で、周壁溝と4辺の方向が一致している。埋土は粗粒砂混りの砂質粘土で、砂粒と炭粒を周囲より少し多めに含んでいる。東へ延びる小溝は深さ0.03m以下、幅0.15mである。埋土は方形の窪みと同様で、炭粒を含む砂質粘土である。周壁溝の外側では、西側で直線的に並んだ小穴を検出した。小穴は直径、深さともに0.07



写真11 SP701の断面

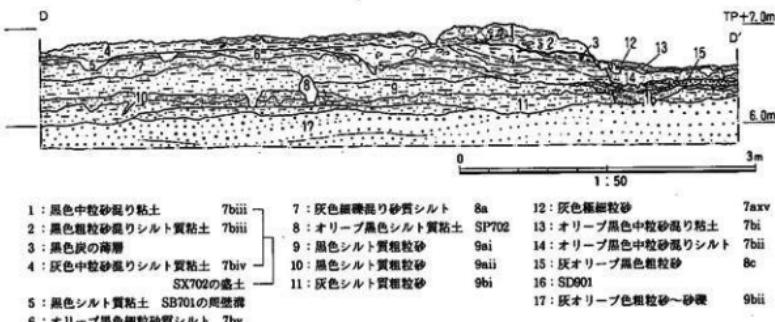
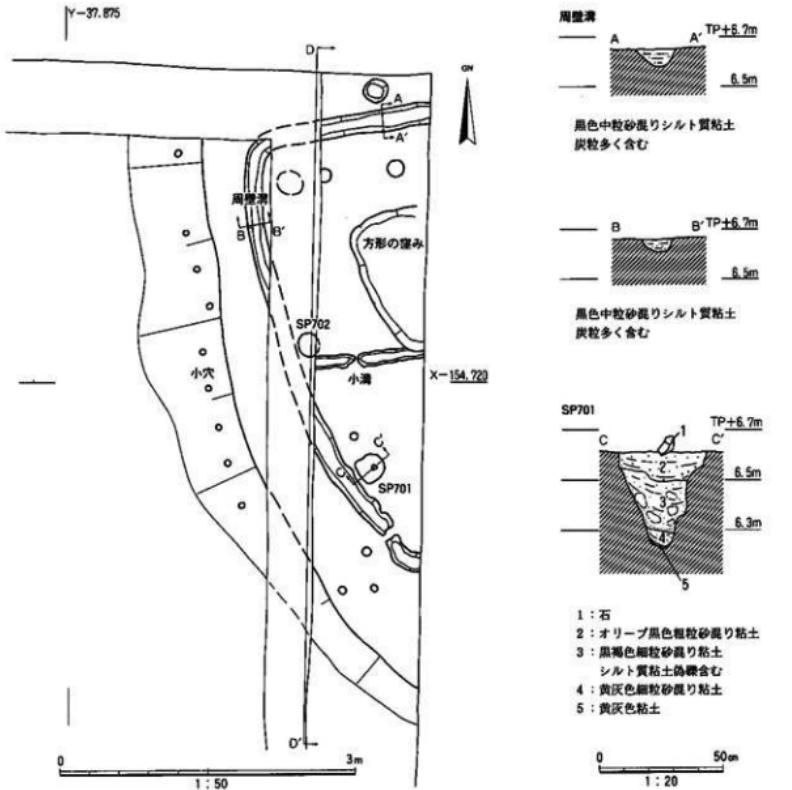


図40 SB701の平・断面図

m前後で、断面は三角形であった。埋土は灰オリーブ色粘土質シルトである。周壁溝と平行して、ほぼ等間隔に並ぶことからSB701に伴う施設であると考えられる。周壁溝より内側からはわずかに土師質の土器が出土しているが、器形や時期などが判別できるものはない。SB701以後に築かれた土壇状遺構SX702と第9a層に含まれる遺物との関係から、古墳時代中期頃のものと考えられる。

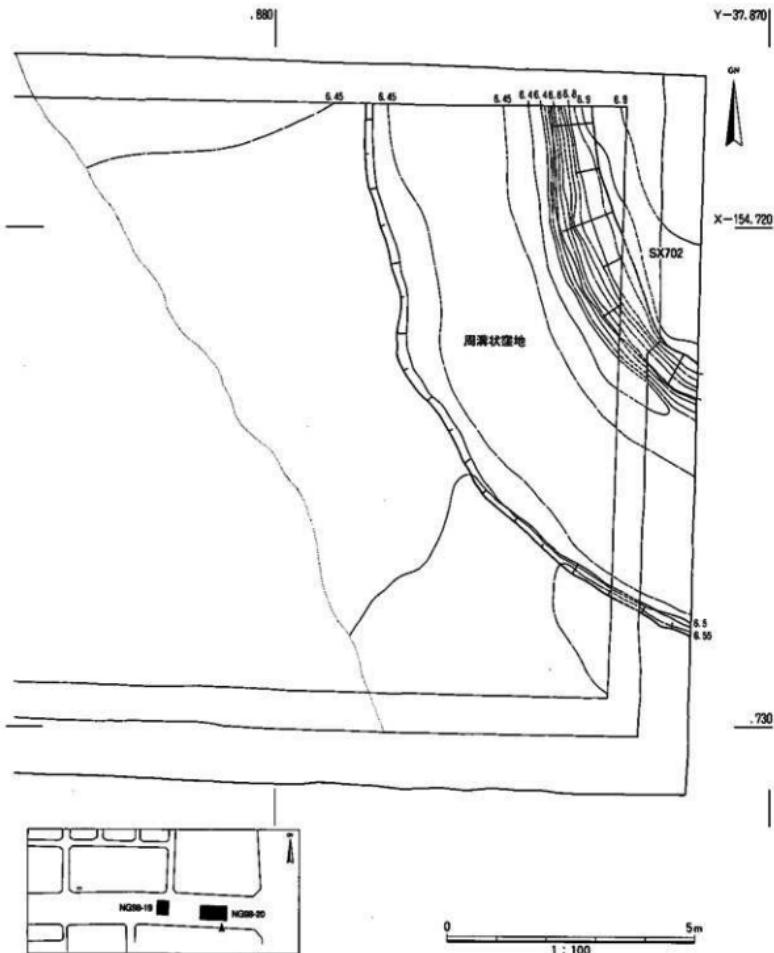


図41 SX702の平面図

ii) 土壌状遺構

SX702(図40~43、図版11・12・26)

調査区の北東隅において、第7a層の水成層を除去したのちに現われた土壌状遺構である。検出面は第7bv層の上面で、位置的にはSB701の真上にあたる。遺構の北側および東側が調査区外であるため、正確な規模は不明だが、現状の規模は東南3.0m、南北7.0mである。第7bi層の上面からは0.4m突出している。上面は平坦で、直径0.2m、深さ0.1mの小穴が1つある。

盛土の厚さは高まりの縁辺部で0.5m、頂上部で0.1mある。層相は主として中粒砂混りシルト質粘土で、植物遺体や細かな炭化物を含んで暗色化している。これらの層相は下位の第8a~9a層と一致

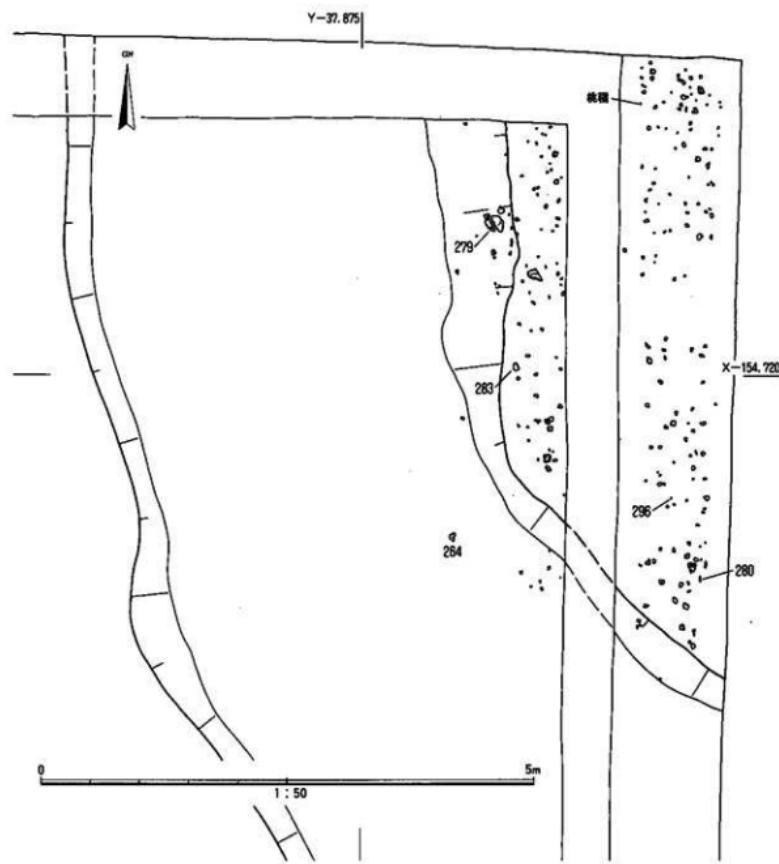


図42 SX702の遺物出土状況

することから、第8a～9a層を削って盛土にしたと考えられる。盛土は炭の薄層を挟んで上・下層に分けられる。上層の第7biii層は灰オリーブ色粘土の偽縛を含むシルト質粘土で、土師器・白玉・桃核を含む。下層の第7biv層は上層より暗色化しているが、遺物の量は少ない。上層と下層から出土した土師器は互いに接合するため、これらの盛土は一連の作業として行われたことがわかる。SX702の西側で検出した幅4.0m、深さ0.1mの周溝状の窪地は、盛土を採取した名残りと考えられる。埋土である第7bii層は第8a層の偽縛を含み、第7bi層段階の耕作によって著しく擾乱されている。

土壇状遺構SX702が築かれた調査地の東北部は弥生時代から既に微高地であったが、古墳時代の第7bv層段階でも周囲より約0.2m高かった。SX702はその微高地を利用し、縁辺部に厚く土を盛り上げて周囲より明確に突出した土壇を形成したものである。SX702の周囲には作土である第7bi・ii層が分布しているが、ともに最初に第7axv層によって埋積されることから、これらは同時に存在していたものとわかる。

遺物はほとんどが盛土中から出土した(図42、図版11)。周辺の第7bi・iii層からも少量の土師器が出土しているが、いずれも盛土の中にあったものが耕作によって移動したと考えられる。よって、図42には盛土中に含まれていた遺物の出土位置だけを示した。種類は土師器・製塙土器・白玉・弥生土器である。土師器はすべて小さな破片で完形に復元できるものはなく、全面に散在していた。観察などの詳細は別表4・5を参照されたい。

土師器(図43、図版26)

258～262は小型丸底土器である。258は口縁部がやや厚く、直線的に開く。口径は体部の最大径よりも小さい。体部内面の調整は、下半部と頸部にヘラケズリ、外面はハケを行う。口縁内面もハケで調整するが、大半がのちのナデ調整によって消えている。259は体部外面の調整は258と同様であるが、内面はすべてユビオサエ・ユビナデ調整を行う。260～262は口縁部のみの破片である。260は頸部以下をタテハケで調整し、262は口縁部内面をヨコハケによって調整する。

263は小型の鉢である。器壁は薄く、口縁部は外反する。外面下半部の調整は粗いハケを行う。

268～277は壺である。268～270は口縁部の内面端部が肥厚せず、直線的に開くものである。外面は全面をハケによって調整する。内面の調整は口縁部にハケを行い、体部の頸部以下にヘラケズリを加える。271～277は、口縁部の内面端部が肥厚するものである。271は体部内面にヘラケズリを行い、272は体部外面にハケを、内面にヘラケズリによる調整を行う。275は口縁部が全体的に厚い。278は土師器壺である。口縁端部に面をもつ。

279～295は高杯の杯部および脚部である。279・280は杯部が楕形で、口縁部が外反して端部に面をなす。内・外面とも密な放射状ハケを施す。脚部上端に粘土塊を充填して杯部を形成している。脚内面には刺突痕が残る。281は口縁部は外反せず、端部が面をなす。282は杯部が半球形に近く、深いものである。外面の調整はハケを施す。283は杯部外面の調整に3段以上の粗いハケを、内面には弱いハケを行う。脚内面に刺突痕はない。284は口縁部が外反し、285は口縁部が直線的に開くものである。内面の調整はハケを行う。286～289は脚柱部である。286は柱状部が短く、中ほどに3方向の円形スカシ孔がある。外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリを行う。287は内面にヘラケズリを行

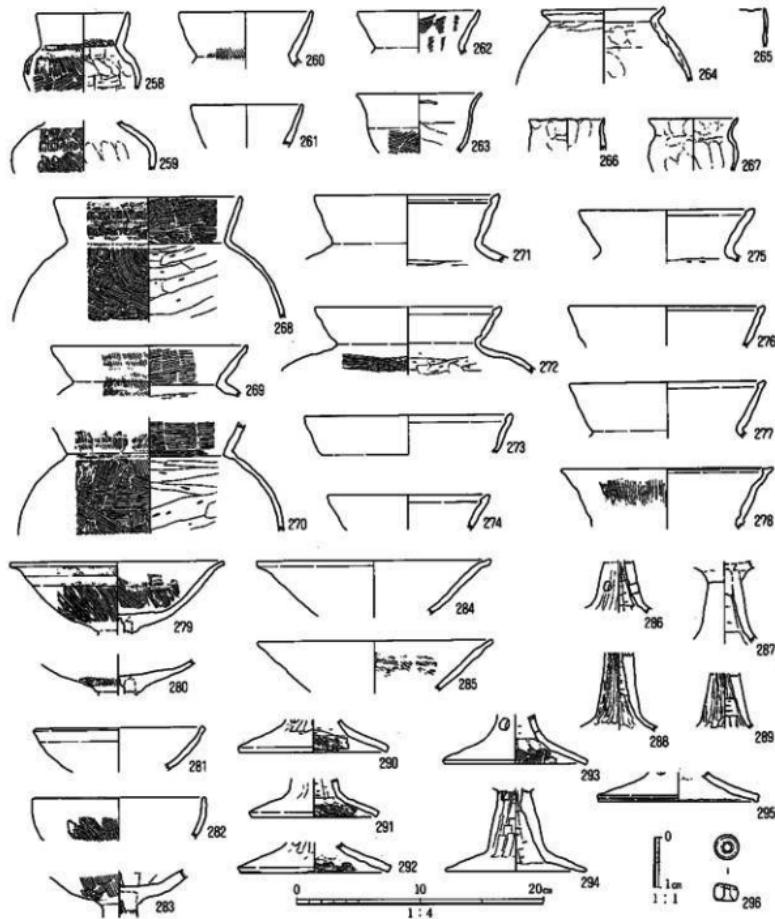


図43 SX702出土遺物

う。脚部上端には比較的大きな粘土塊を充填している。刺突痕はない。288・289は外面をハケによつて調整したのち、ヘラミガキを行う。内面は上部に2段のヘラケズリを行う。290～293は脚裾部である。外面はヘラミガキを行う。内面は脚柱部以上にヘラケズリを行い、裾部に1段ないし2段のハケによる調整を行う。290・292・293には柱状部と裾部との間に3方向の円形スカシ孔がある。また、290・291・293の裾端部はヘラで切ったままであるが、292はナデ調整を加えている。294は裾部が強く屈曲する脚部である。脚柱部外面の調整はハケののち、粗いヘラミガキを施す。内面は2段のヘラケズリを行う。裾部はナデを行い、端部を丸くおさめている。

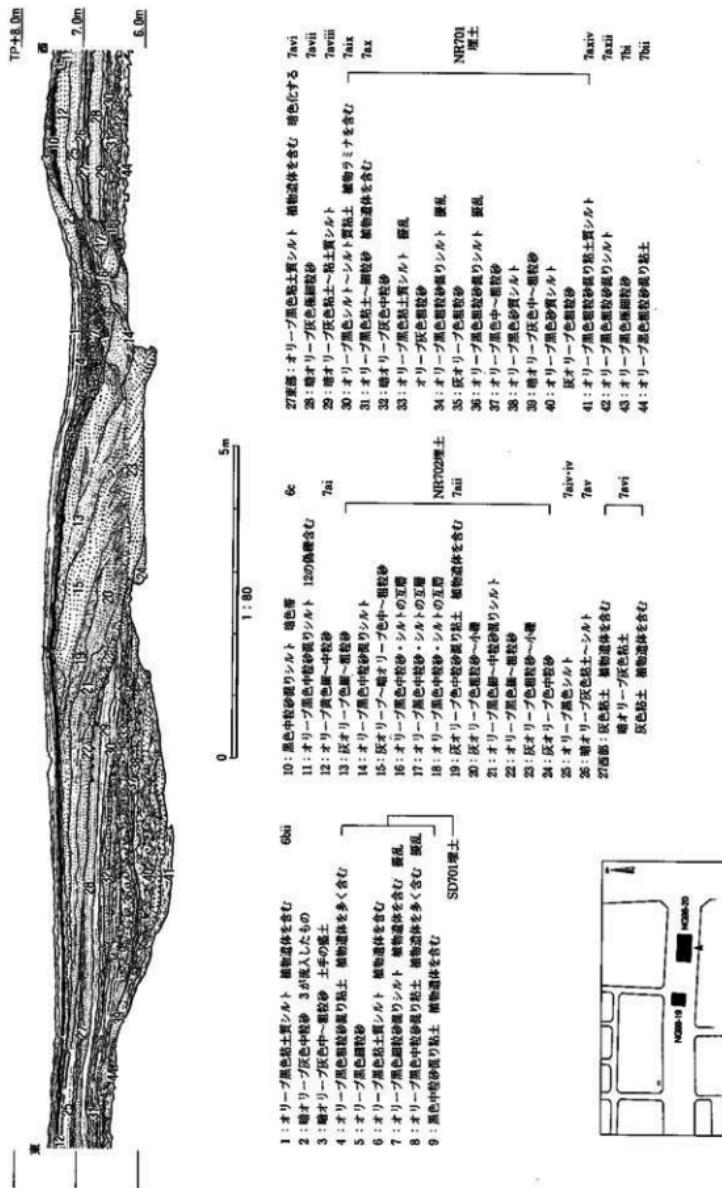


図44 NR701・702、SD701断面図

第三章 調査の結果

267は手づくね成形のミニチュア壺である。口縁部が強く外反し、器壁は薄い。

製塩土器(図43、図版26)

265・266は製塩土器である。色調は明褐灰色で、焼成は良好である。器壁は約2mmと薄く、全面をユビナデ・ユビオサエによる調整で仕上げている。

弥生土器(図43)

264は弥生土器壺である。口縁部を「く」字に屈曲させる。内・外面ともナデ調整で、内面には粘土紐の継目が残る。色調は黒褐色で、胎土には1mm大の角閃石を多く含む。畿内第II様式に属する。下位層からの混入品である。

玉類(図43、図版26)

296はオリーブ灰色の滑石製白玉である。表面が滑らかに磨かれ、全体に丸味を帯びている。

これらの遺物は264を除き、すべて5世紀前半のものと考えられる。264はSX702西側の周溝状窓地から出土しており、盛土を採取した際の擾乱で下位層から混入したものと考えられる。

iii) 自然流路

NR701(図44~47、原色図版3、図版13・27)

調査区の中央に位置し、第7axv層上面で検出した自然流路である。検出状況で幅5.0~8.0m、深さ

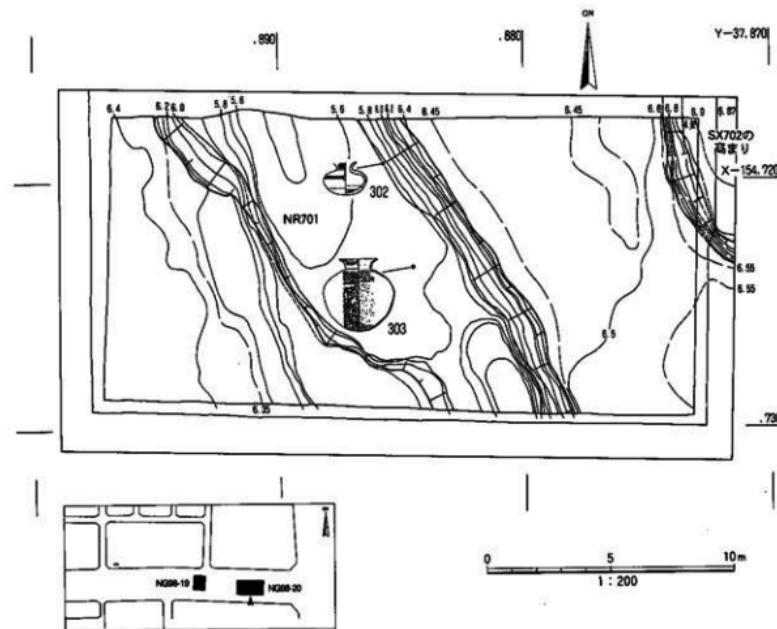


図45 NR701平面図

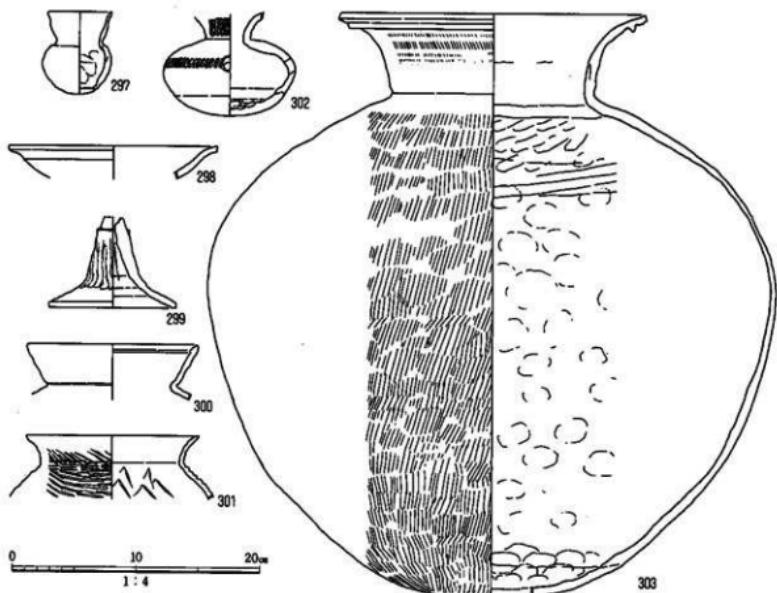


図46 NR701出土遺物(1)

1.0mであるが、西岸の一部はのちのNR702の流れによつて削られている。流れの方向は南東-北西で、下底部は第9b層の厚い水成層を著しく浸食している。埋土は上・中・下層に大別できる。下層の第7axiv層は粗粒砂混り粘土質シルトからなり、東側にのみ堆積している。中層の第7ax~xiii層は砂質シルト・中粒砂・粗粒砂が互層となつて堆積している。いずれも河成層であるが、踏込みや生痕の擾乱によつて著しく変形している。流路の東側や西側はシルトを主体とする粒径の細かい水成層で埋積されている。上層の第7aix層は炭化物のラミナを含む粘土シルトで構成される。ラミナは水平方向に見られることから、第7ax層と同様に滞水状態で堆積したものとわかる。以後、第7avi層の暗色帯が形成されるまで、滞水状態のまま粘土～極細粒砂の水成層が堆積し、人間の出入りはなかったもようである。

遺物は第7axiii層から土師器ミニチュア壺297・高杯298・299、壺300、須恵器壺303、弥生土器壺301が、第7axi層から須恵器壺302、杭状の木製品304が出土している。

297はほぼ完形の土師器ミニチュア壺である。焼成は良好で灰黄色を呈し、体部に黒斑がある。口縁部は長く、ヨコナデ調整で端部を薄くつくる。体部は内・外面にナデ調整を行う。内面に粘土織の

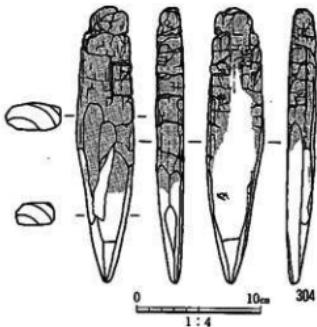


図47 NR701出土遺物(2)

縦目が残る。298は土師器高杯の杯部である。椀形で口縁部は外反し、端部に面をなす。内・外面に調整のハケは認められない。299は土師器高杯の脚部である。柱状部の外面は縦方向のヘラミガキを施し、内面は柱部に1段の横方向のヘラケズリを行ったあと裾部にヨコナデ調整を行う。裾端部はヨコナデ調整で丸く仕上げる。300は土師器壺である。体部の頸部上面に口頭部を貼付ける。口縁端部は肥厚し、内面に巻込んで断面三角形につくる。これらの土師器は5世紀前半から中頃に属する。

302は須恵器壺である。口縁部を欠いている。頸部は外面にヨコナデ調整したあと波状文を施す。体部は外面にヨコナデ調整を行ったあと、最大径よりやや上位に櫛先刺突文を施す。底部は内面に直径8mm前後のオサエ痕がある。外面の調整は不定方向ナデで仕上げる。肩部の全面に緑灰色の自然釉が掛かることから、焼成は正位置で行われたとわかる。303は須恵器壺である。体部は器高と体部最大径がほぼ等しい倒卵形である。口縁部は大きく外反し、端部に面をもつ。外面の1.5cm下がったところに断面三角形の突帯が1条巡る。頸部の外面の調整はタテハケのあとヨコナデを行う。体部は外面の全面に平行タタキを行い、頸部にはナデを施している。もっとも器壁の薄い肩部の厚さは約3mmである。内面は肩部以下に刻目ない丸い当て具痕が残る。肩部以上にはユビオサエのあとナデ調整を行う。底部内面に粘土紐の縦目が残る。これらの須恵器はTK216型式に属する。

301は弥生土器壺である。口縁部は外反し、端部は丸い。外面は体部から口頭部にかけて左上がり

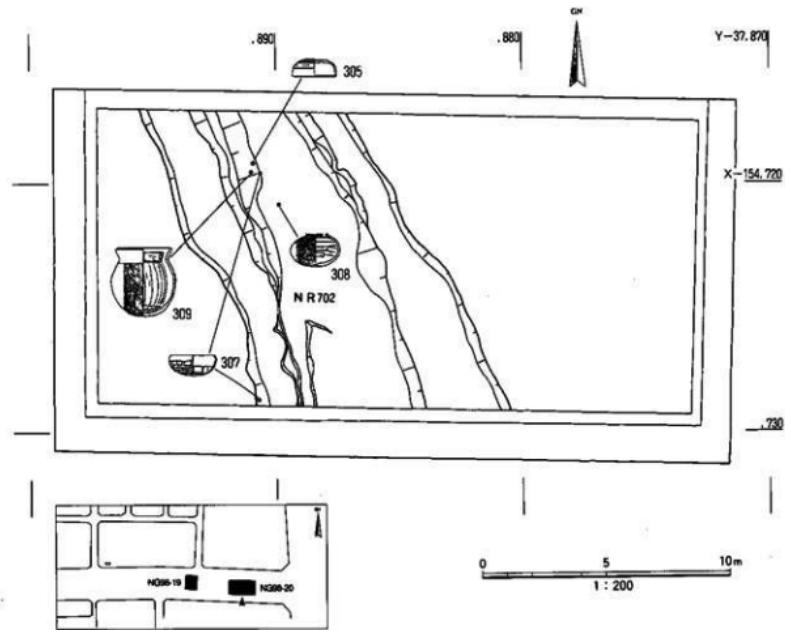


図48 NR702平面図

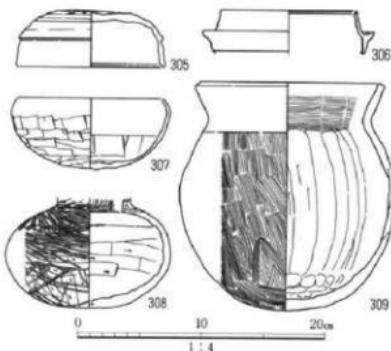


図49 NR702出土遺物

の平行タタキを施す。内面は板ナデによる調整を行う。畿内第V様式に属する。

304は杭状の木製品である。下端を削って尖らせてある。上部は焼けて炭化している。横断面は長方形ないし楕円形である。

以上のような出土遺物の年代観から、NR701は5世紀中頃を中心に形成されたと考えられる。

NR702(図44・48・49、原色図版3、図版13・27)

調査区の中央に位置し、第7avi層上面で検出した自然路である。下位のNR701と一部重なって南東—北西の方向に流れている。横断面は2段になっており、上段は幅7.0~9.0m、下段は幅4.5mで、全体の深さは1.6mである。最深部は第9b層を浸食しているが、シルト質の第9biii層は堅いために一部が平坦なテラスとなって残っている。流路内に埋める第7aii層は斜行葉理が顕著な細粒砂～小礫からなる水成層で、小枝や葉などの植物遺体を多く含んでいる。第7ai~iv層はNR702の東側や西側に向かって堆積物の粒子が細くなり、シルト～極細粒砂層となる。

遺物はすべて下段に堆積した細粒砂層中から出土した(写真12)。305~310のはかは、少量の土師器小片が出土している。

305は完形の須恵器杯蓋である。端部の内面に凹線が巡る。外面は回転ナデ調整のあと、天井部の約2/3に回転ヘラケズリを施す。天井部と口縁部の境にある稜は明瞭である。天井部にヘラ記号がある。306は須恵器杯身である。立上がりは薄く高く、端部の内面には凹線が巡る。底部外面に施された回転ヘラケズリは受け部の近くまで及んでいる。これらの須恵器はTK23型式に相当する。

307は土師器椀である。丸底で、口縁部は鉄鉢状に内傾する。外面は底部をユビオサエによって調整し、口縁部をヨコナデ調整したあと、不定方向のヘラケズリや左方向のヘラケズリを行う。内面は下半部に板状工具でのヨコナデ調整、底部にユビナデ調整を施したのちに口縁部に強いヨコナデ調整を行う。308は土師器長頸壺の体部である。色調は橙色を呈し、胎土は精良である。体部の調整は外面の底部に縦方向のヘラケズリ、中位に左方向のヘラケズリを行う。そのあと底部にまばらなヘラミガキを行い、中位に横方向ヘラミガキ、肩部に放射状ヘラミガキの順で調整している。内面は、底部は調整せず、中位に横方向のヘラケズリを行い、その後肩部に回転ナデ調整を行う。回転ナデ調整

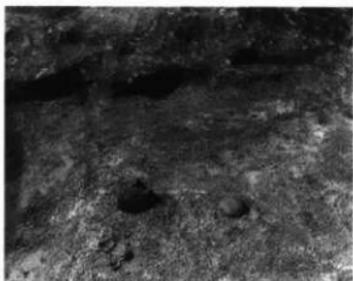


写真12 NR702の遺物出土状況

によって体部の頭部端を整えたのち、内側に口頸部を接合している。口頸部の調整は外面に斜方向の太いヘラミガキを、内面に縦方向のヘラミガキを施す。309は完形の土師器壺である。外面の全面に煤が付着している。口縁部は直線的に開き、端部は面をなす。内面の調整はヨコハケを行い、そのあと内・外面にヨコナデ調整を行う。体部は球形で外面の調整にタテハケを施す。内面は底部にユビオサエを施したのち、タテハケを加え、そのあと強い縦方向のユビナデ調整によってハケメを消している。310は土師器小型丸底土器である(図版27)。口縁部は直線的に開き、端部を丸くおさめる。体部の調整は外面にタテハケのあとヨコハケ、内面には上半部にユビオサエを施したのち、下半部に横方向のヘラケズリを行う。流水によって磨耗している。これらの土師器は310を除いて、すべて5世紀末頃に属するものと考えられる。

以上のような出土遺物の年代観から、NR702は5世紀末頃を中心に形成されたと考えられる。

4) 古墳時代後期の遺構

i) 溝

SD701と土手(図44・50、図版13)

調査区の西部に位置し、第6c層上面で検出したSD701とそれに伴う土手である。溝は幅4.0m、深

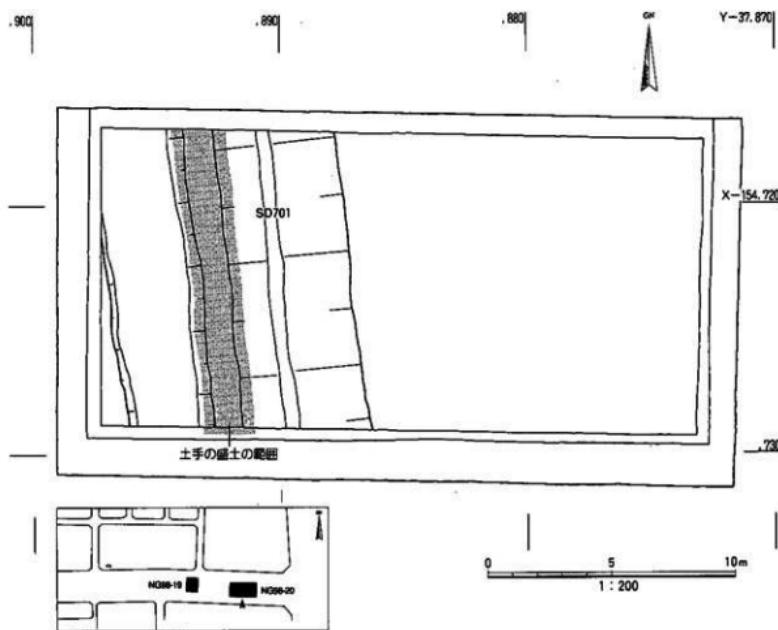


図50 SD701と土手の平面図

さ0.9mで、下位のNR702の西岸に沿うように南一北に向って流れている。溝の西側には流れの方向に沿って幅1.5m、厚さ0.2mの盛土を施した土手があり、土手のさらに西側には盛土を採取した痕跡が幅3.0m、深さ0.2mの溝状の窪地となって残る。窪地内の埋土はオリーブ黒色中粒砂混りシルトで、下面是凸凹しており第7ai層の偽礫を含んでいる。SD701の東側は西側と比べて第6c層上面の標高が低いが土手は造られていない。溝の東岸が第6c層の上面へとなだらかに続き、境は不明瞭である。

SD701は横断面がU字状で、下底面が凸凹している。埋土は上・中・下層に大別できる。下層は厚さ約0.4mで、溝全体の半分を埋めており、さらに3層に分けられる。3層とも中粒砂のラミナと広葉樹の葉・種子・小枝などの植物遺体を多く含む、暗色化した水成の粘土である。これらは擾乱が著しく、ラミナが変形している。中層は層厚5cm以下の水成の細粒砂で、植物遺体は含まない。本層に擾乱はない。上層は層厚10cmの粗粒砂を含む水成の粘土で、植物遺体を含んでいる。生痕による擾乱でラミナが変形している。溝の西斜面には土手の盛土が崩れて中層と上層の上面に流入している。上層の上面に盛土が流入したのち、全面を第6bi層の水成層が覆い、これ以後、第6a層が作土化されるまで一帯は滲水状態のままで厚い水成層が堆積している。

SD701および第6c層の年代は遺物が出土しなかったため不明である。しかし、下位のNR702から出土したTK23型式の須恵器・土師器と上位の第6bi層から出土したTK209須恵器との関係から、その年代は6世紀初頭から7世紀初頭の間に求められる。ここでは古墳時代後期の遺構としたが、今後、周辺の調査で第6c層の時期を決定づける遺構・遺物が検出されることが期待される。

5) 平安・鎌倉時代の遺構と遺物

i) 流路

SD401(図51~53、原色図版3、図版14・28)

北東部に位置しており、東南東-西北西の方向に流れる流路である。第4bi層上面で検出した。深さは1.3mで、現状で幅7.0mまで確認できる。北岸は調査区外であるため不明であるが、幅は約8.0mと推定できる。底面は比較的平らであるが、南岸の下部は流水によって垂直にえぐり取られている。埋土は上・中・下層に大別できる。上層は厚さ約25cmの水成の粘土層で、SD401の最後の窪みを静かに埋めている。上面に踏込みが見られる。中層は厚さ約25cmのシルト～砂質シルトからなる河成層である。上部は中粒砂のラミナを含み、下部には炭化物のラミナを含む。北側には周辺からの流入土と見られる砂質シルトが垂れ込んでいる。下層は厚さ約90cmの粗粒砂を主体とする河成層である。ラミナが著しく発達し、激しく水が流れていたことがわかる。

遺物は大半が下層内から出土した。土器は完形品が多く、ほとんど磨耗していない。ただし、黒色土器碗321~323は中層からたがいに近接して出土した(写真13)。322と323は上下に重なっており、溝の北岸から土砂とともにずり落ちたものと考えられる。

311~316は土師器のいわゆる「て」字口縁皿である。口径9.0~9.8cm、器高1.2~1.6cm、器厚は0.2~0.3cmである。色調はすべて灰白色で、胎土中に砂粒は含まない。調整はすべてナデであり、底部外面にはユビオサエ痕が残る。317~320は土師器小皿である。口径8.6~10.1cm、器高2.0~2.7cm、

器厚は0.3~0.6cmである。色調はにぶい橙色で、胎土中に0.5~1.0mm大の砂粒を含んでいる。すべて口縁端部に1段のヨコナデを行い、外底面はユビナデ・ユビオサエを行う。318・320は口縁部に芯が接していたため黒褐色の油煤痕が付着している。

321~326は黒色土器である。321~323は完形のB類碗で、表面が光沢のある漆黒色を呈している。法量や調整手順はほとんど同じであるが、内底面のヘラミガキだけが異なっている。外面の調整はユ

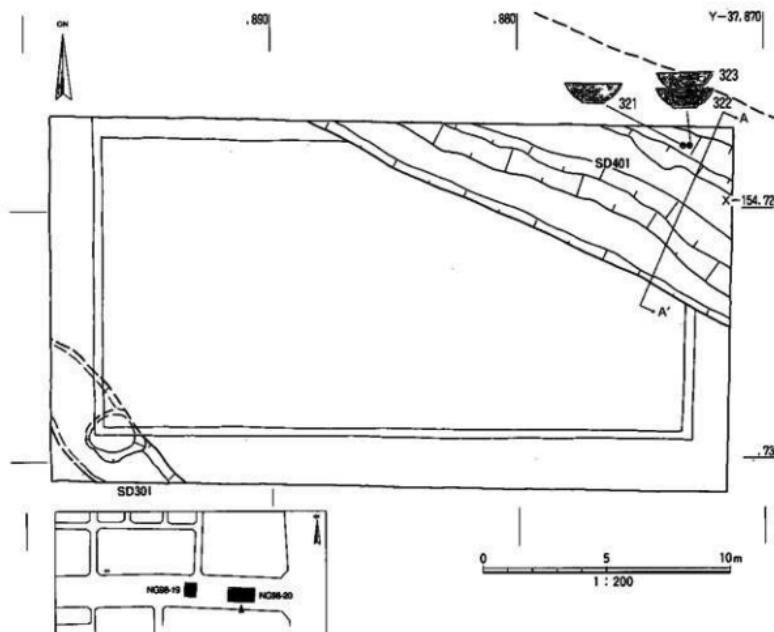


図51 SD401 · 301平面図

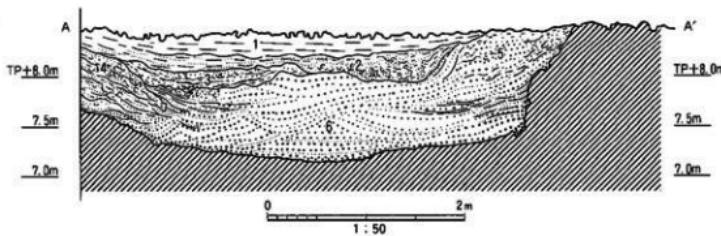


図52 SD401断面図

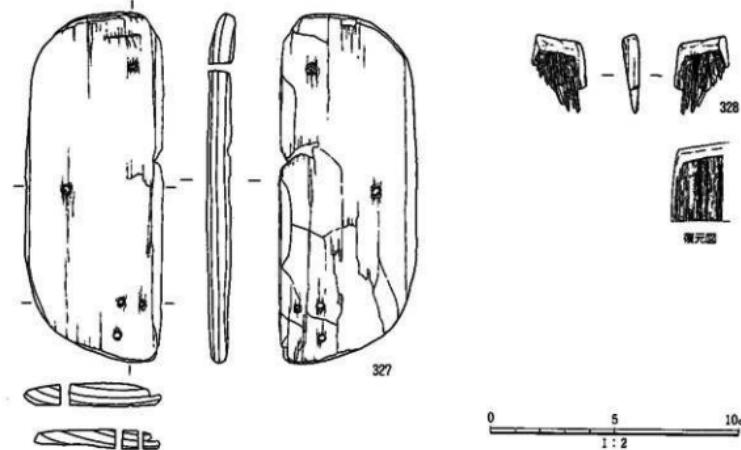
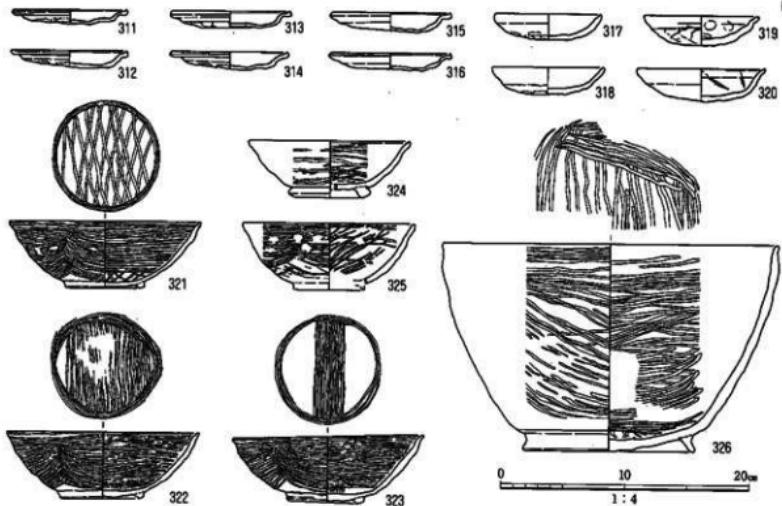


図53 SD401出土遺物

ビオサエのあと、口縁部に横方向のヘラミガキを行い、それ以下に3単位の弧状のヘラミガキを密に施している。内面は口縁端部に浅い凹線が巡り、まず内底面にヘラミガキを施したあと側面に横方向のヘラミガキを密に施している。内底面のヘラミガキは321が斜格子ヘラミガキ、322が全面を覆わない幅2.4cmの密な平行ヘラミガキ、323が内底面の全面を覆う少し粗い平行ヘラミガキである。高台はすべて断面が台形で低い。324は外面の上半部までが黒色のA類碗である。口縁端部の内面に浅い凹線が巡り、内・外面に粗い横方向のヘラミガキを行う。高台は太く、外側に張出している。325は

内・外面とも上半部が黒色のA類椀である。口縁端部は丸くおさめており、内面の調整は粗い斜方向のヘラミガキのあと、まばらな横方向のヘラミガキを施している。外面はヘラケズリのち弧状のヘラミガキを3単位行い、口縁部付近に横方向のヘラミガキを施す。326はA類鉢または片口である。口縁端部は丸くおさめており、高台は細く高い。内面の調整は底部に粗い平行ヘラミガキを施したあと、側面に横方向のヘラミガキを行う。外面は弧状のヘラミガキのあと口縁部付近に横方向のヘラミガキを行う。これらは平安時代Ⅲ期に属するものである。

327は板状の木製品である(図53、図版28)。平面形は細長い台形で、側面に面取りを行う。5個所に釘を打ちつけたと見られる方形の小孔が見られる。全体の厚さは0.4~1.0cmで、小孔の大きさは一辺が0.3cmである。328は木製横櫛である。峰はゆるい弧状で、高さは約3.0cm、歯は1cmの間に12本削り出されている。峰部の厚さは0.5cm、歯先端の厚さは0.1cmである。

以上のような出土遺物の年代観から、SD401は10世紀末から11世紀前半頃に機能していたと考えられる。

ii) 溝

SD301(図51)

南西部に位置する南東ー北西方向の溝である。幅2.5m、深さ0.1mである。埋土は上部が暗灰黄色砂質シルトで、粗粒砂を多く含んでいる。下部は灰色中~粗粒砂の水成層である。土師器・瓦器の細片を含む。

6) 小結

縄文時代の状況については詳細は第IV章第1節にゆずるが、縄文海進期の地層と生痕化石を検出し、古河内湾最南端の位置を押さえることができた。縄文海進以降は、淡水化と沖積作用による土砂の堆積と、一時的な乾燥による暗色化を繰返しながら古河内平野が形成されていったことも確認できた。第9c層や第12a層の暗色帯に遺構・遺物は見られなかったが、乾痕や植物痕の存在により生活面であったことが想定できる。周辺の調査でもこれらの暗色帯が分布していることがわかっていることから、将来的に同じ層準で遺構が見つかる可能性は高い。

縄文時代晩期から古墳時代中期にかけては、調査区内において大きな地形の変化はなく、生活面は比較的安定していたようである。SB701は検出面は確認できなかつたが、上・下位の地層との関係から古墳時代前期の遺構の可能性もある。調査区の東北隅は微高地になっており、1段高い水はけのよい場所を選んで造られたものと考えられる。古墳時代中期には広く耕作地が営まれ、土壇状遺構SX702が造られ、人間の活動が盛んであったことがわかる。SX702は周囲の耕作地より明瞭に突出しており、



写真13 黒色土器321~323の出土状況

上面を平坦に整形していることから作業場もしくは祭祀場所と考えられる。

古墳時代中期以降から飛鳥時代にかけては再び水成層が厚く堆積し、激しい沖積作用が起っていたことがわかる。中でもNR701・702は下位層を著しく浸食しながら大量の土砂を運んでおり、当時の洪水の威力を物語っている。古墳時代後期に形成された第6c層は遺構を伴う明瞭な暗色帯であるが、隣地のNG98-19次調査にはない。

飛鳥時代以降は洪水による土砂の堆積と耕地化が繰返されており、現代にいたるまで農地として利用されていたことがわかる。

(松本)

第IV章 遺構と遺物の検討

第1節 長原遺跡東北地区における花粉・珪藻分析

文化財調査コンサルタント株式会社 渡辺正巳

1)はじめに

長原遺跡は大阪市東南部に位置する。本報告は、遺跡周辺の古環境変遷を推定する目的で、財団法人大阪市文化財協会(以下、市文協と略称する)が川崎地質株式会社に委託して実施した報告書を、まとめなおしたものである。

2)試料について

図54に示す2地点で得られた試料を対象として分析を行った。NG98-20次調査地の試料は、市文協により、採取・保管されていたものである。またNG97-52次調査地の試料は、市文協により採取・保管されていた柱状の試料を、今回の分析にあたり分割したものである。

各地区での柱状図および試料採取層準を、図55の花粉ダイアグラム中に示す(註1)。柱状図右側の数字が試料番号で、採取深度に示した。また、柱状図左側に発掘地点の層序および推定堆積年代を示した。

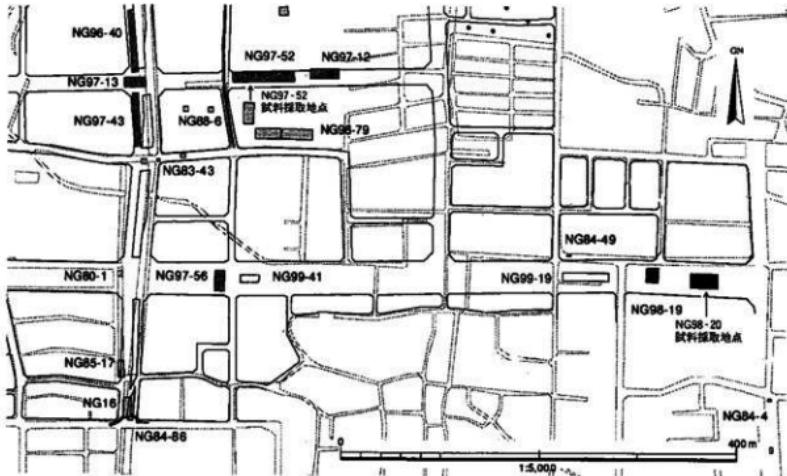


図54 NG97-52・98-20次調査試料採取地点

3) 分析方法および結果

花粉分析処理、珪藻分析処理は、[渡辺1995a・b]に従い行った。

顕微鏡観察は400倍、あるいは必要に応じ600倍、1000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本化石も同定した。また、珪藻分析では、原則的に珪藻化石総数が200個体以上になるまで同定を行った。しかし、一部の試料では花粉化石および珪藻化石の含有量が少なかったために、木本花粉化石総数あるいは、珪藻化石総数で200を超えることができなかつた。

花粉分析結果を図55の花粉ダイアグラムに、珪藻分析結果を図56の珪藻ダイアグラムおよび図57の珪藻総合ダイアグラムに示す。

花粉ダイアグラムでは、同定した木本花粉総数を基準にした百分率を各々の木本花粉、草本花粉について算出し、スペクトルで表した。また右端に各分類ごとの相対量を示すグラフを付けた。珪藻ダイアグラムでは、同定総数を基準にした百分率を各々の種類について算出し、スペクトルで表した。珪藻総合ダイアグラムのうち左端の「生息域別グラフ」は、同定したすべての種類を対象に、それぞれの要因(生息域)ごとに百分率で表したものである。その他の4つのグラフは、淡水種の珪藻についてそれぞれの要因ごとに百分率で表したものである。

4) 花粉分帯

花粉組成の特徴から以下のように地域花粉帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を示す。また、本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料No(ゴチック体数字)も下位から上位に向って記した。

i) III带(NG97-52: 100~94)

コナラ亜属が卓越し、アカガシ亜属を伴う。

ii) II带(NG97-52: 92~87、NG98-20: 59・61)

アカガシ亜属、コナラ亜属が卓越し、クマシデ属ーアサダ属、ブナ属、ムクノキ属ーエノキ属、ニレ属、ケヤキ属を伴う。

iii) I带(NG97-52: 84~79、NG98-20: 60・56~3)

アカガシ亜属が卓越する。アカガシ亜属の出現率の変化、および伴って出現する種類の出現率の変化から、g ~ a亜帯に細分した。以下にそれぞれの亜帯での特徴を示す。

g 亜帯(NG97-52: 84~79、NG98-20: 60・56~46)

アカガシ亜属は50~60%程度、コナラ亜属は10~15%程度。NG98-20地区の60では草本花粉の割合が相対的に高く、減少傾向にある。

f 亜帯(NG98-20: 45~39)

アカガシ亜属は70%程度以上と高率になる。またコナラ亜属は数~10%程度とやや低率になる。トノキ属がこの間を中心に、数%で連続して出現する。草本花粉はほとんど出現しない。

e 亜帯(NG98-20: 38・37)

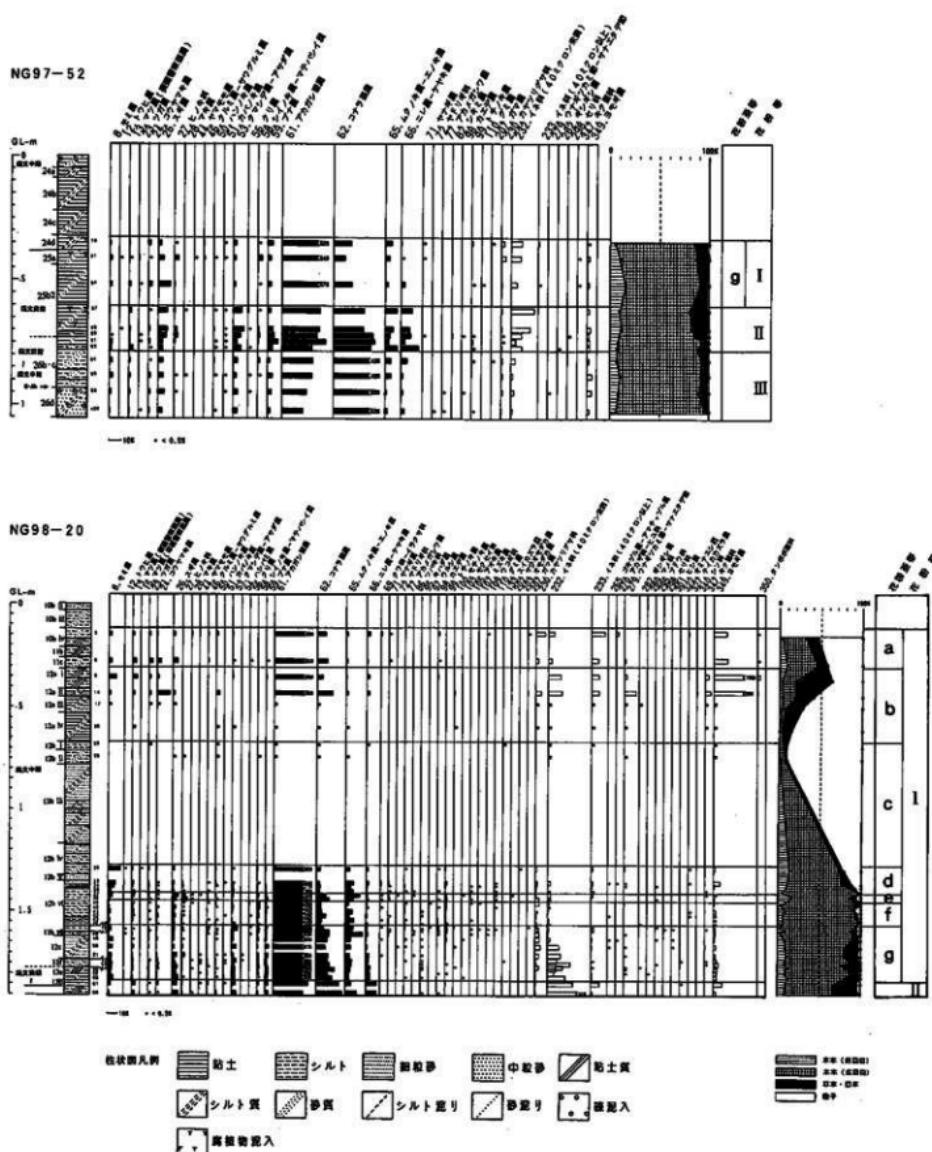


図55 NG97-52・98-20次調査地 花粉ダイアグラム

アカガシ亜属が50%程度に減少する一方、ほかのほとんどの種類が増加する。草本花粉の割合にはほとんど変化がない。

d 亜帯(NG98-20: 36~30)

アカガシ亜属が再び高率になり、70~80%程度を占める。モミ属が数~12%と増加傾向を示す。草本花粉の割合にはほとんど変化がない。

c 亜帯(NG98-20: 25・22)

花粉化石の含有量が少なく、上下の分析結果との整合性もない。

b 亜帯(NG98-20: 20~9)

アカガシ亜属が60~70%程度を占める。草本花粉、胞子の割合が非常に高く、特にヨモギ属が高率を示す。

a 亜帯(NG98-20: 6・3)

木本花粉はb亜帯と同傾向を示す。草木花粉、胞子の割合が引き続き高いが、ヨモギ属が低率になる。

5) 硅藻分带

各地点ごとに硅藻分析結果をもとに、地域硅藻帯を設定した。以下に各硅藻帯の特徴を示す。また硅藻帯の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載する。

i) NG98-20次調査地

98-IV帯(試料No59~53)

汽水種の*Melosira*属、*Rhopalodia*属、汽水種の*Diploneis smithii*が卓越するほか、海水種も検出される。

98-III帯(試料No50~30)

淡水種がほとんどを占める。淡水種の中では、浮遊種の*Melosira varians*が卓越するほか、底生種の*Cymbella*属、*Pinnularia*属などが高率を示す。

98-II帯(試料No22~9)

淡水種がほとんどを占める。淡水種の中では、底生種の*Eunotia*属、*Pinnularia*属、底生種の*Hantzschia amphioxys*などが高率を示す。

98-I帯(試料No6・3)

淡水種がほとんどを占める。淡水種の中では、底生種の*Thalassiosira bramaputra*が卓越するほか、底生種の*Cymbella tumida*、浮遊種の*Melosira varians*などが高率を示す。

ii) NG97-52次調査地

97-III帯(試料No100~84)

海水種の*Navicula marina*が卓越するほか、海水種~汽水種でほとんどを占める。

97-II帯(試料No81)

汽水種の*Melosira*属が卓越するほか、海水種~汽水種でほとんどを占める。

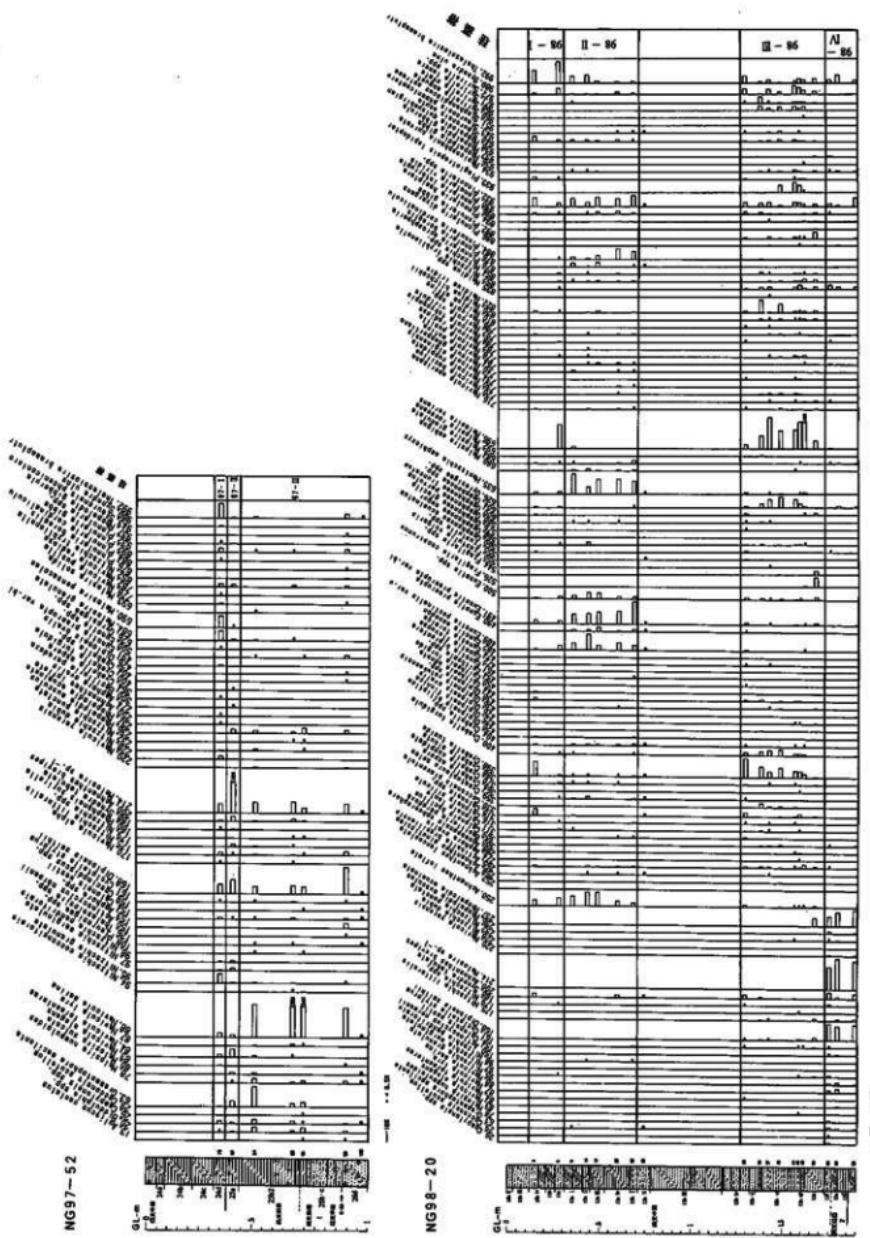


図56 NG97-52・98-20次調査地 硅藻ダイアグラム

97-I 帯(試料No79)

淡水・好塩性で汽水にも生育可能な *Thalassiosira bramaputra* が卓越する。このほか、海水種、汽水種が50%程度を占める。

6)既知の資料との比較

河内平野(古河内湾)は北を北摂山地、東を生駒山地、西を上町台地、南をなだらかな泉北丘陵で囲まれている。今回の調査地である長原遺跡は、河内平野の南端に位置している。

古河内湾内で、完新世の中半の試料を対象として花粉分析を実施し報告した例は、森の宮遺跡[川崎地質株式会社1996]のほか、鬼虎川遺跡[株式会社古環境研究所1997]がある。このほか、発掘調査に関連して多くの地点で分析が行われていると推定されるが、現在まではほとんど公表されていない。また、古河内湾のエリアからやや離れるが、本調査地南東7.5kmに位置する西大井遺跡でも同時期の花粉分析結果が公表されている[川崎地質株式会社1995]。

古河内湾西岸の森の宮遺跡では、縄文時代前期から中期の間で一時にコナラ亜属花粉の出現率が卓越するが、その後、古墳時代頃までアカガシ亜属花粉が卓越する。同じく西岸の宰相山遺跡[大阪市文化財協会・川崎地質株式会社(未公表a)]では、アカガシ亜属花粉の出現率は早期末から増加するものの、縄文時代後期頃までコナラ亜属花粉の出現率を越えることはない。南岸に位置する喜連東遺跡では[大阪市文化財協会・川崎地質株式会社(未公表b)]層準未確定の部分が多いものの、K-Ah火山灰層が認められている。K-Ah層準前後ではコナラ亜属が卓越し、アカガシ亜属はコナラ亜属の半分程度の出現率である。

一方、古河内湾東岸の鬼虎川遺跡では、縄文時代前期以降古墳時代頃までアカガシ亜属が卓越している。また、アカガシ亜属は縄文時代後期から晩期でもっとも高率になり、特徴的な増減は認められない。本調査地南東の西大井遺跡では、およそ5000年前頃から古墳時代頃までアカガシ亜属が卓越している。

今回の分析層準は、およそ縄文時代早期から中期にかけてである。Ⅲ帯でのアカガシ亜属の増加は、宰相山遺跡でPⅤ带～VI帯(早期末)で認められたアカガシ属の増加と一致する。また、Ⅲ帯からⅡ帯への変化はPⅥ帯からPⅦ帶c亜帯への変化に対応する。しかし宰相山遺跡では、PⅦ帶b亜帯以降もコナラ亜属が卓越し今回の結果と様相が異なる。また喜連東遺跡でも、今回の結果や宰相山遺跡同様にK-Ah層準ではコナラ亜属花粉が卓越する。また、今回の結果では縄文時代中期にアカガシ亜属が高率になる。同様の傾向は西大井遺跡でも認められ、アカガシ亜属に伴いムクノキ属-エノキ属、トチノキ属もわずかながら増加する傾向も同様に認められる。

7)花粉層序と火山灰層序の関係

NG98-20次調査地ではI帯g亜帯中にK-Ah火山灰層が認められる。一方、NG97-52次調査地ではK-Ah火山灰層は、Ⅲ帯中に認められている。

K-Ah火山灰層前後の花粉組成変遷については、大阪市天保山のT1ボーリング[古谷正和1979]、

大阪南部の大場遺跡[川崎地質株式会社1994]で明確に認められている。ここではK-Ah火山灰層の下位でコナラ亜属が卓越し、K-Ah火山灰層下からしばらくして(上位で)卓越種がアカガシ亜属に交代する。先の宰相山遺跡、喜連東遺跡での分析でも同様の傾向が得られている。つまり、K-Ah火山灰層降灰以前にはコナラ亜属花粉が卓越したことが、広範な現象であったことがわかる。

したがって、NG97-52次調査地での花粉層序と火山灰層序の関係が一般的傾向であり、NG98-20次調査地での関係が特異であることがわかる。

NG98-20次調査地においてこのような現象が認められた原因として、NG98-20次調査地において局的にカシ類を主要素とする照葉樹林が分布したとも考えられる。しかし、該当層準には生物擾乱が認められ、上位の層準からアカガシ亜属花粉が混入した可能性が高い。

8) 古環境変遷

ここでは、花粉分析結果および珪藻分析結果より遺跡周辺の古環境を推定する。

i) III带期(縄文時代早期から前期)

この時期からI带g亜帶期下部にかけて珪藻化石で海水種の出現率が高く、海水域で堆積したことがわかる。NG97-52次調査地、NG98-20次調査地の試料はいずれも谷状地形内部で採取されている。したがって縄文海進期には、両地点ともに古河内湾奥の小河川下流～河口域であったと推定される。つまり、両地域は古河内湾周辺のいわゆる「汽水域」であり、汽水・淡水が複雑に混り合う地域であったことが容易に想像される。

花粉化石ではブナ属を伴いコナラ亜属が卓越し、生駒山地から金剛・葛城山地の山麓から山頂にかけて、ミズナラを主要素としブナを伴う冷温帯林が分布していたと考えられる。一方でアカガシ亜属も検出され、古河内湾の周辺や低地はカシ類を主要素とする照葉樹林に覆われていたと考えられる。

ii) II带期(縄文時代前期)

前時期同様に珪藻化石で海水種の出現率が高く、引き続きNG97-52次調査地は古河内湾奥の小河川下流～河口域であったと推定される。またNG98-20次調査地でも汽水種の出現率が高い。さらに、イネ科(40ミクロン未満)花粉が高率であることから、NG98-20次調査地一帯は古河内湾奥の小河川下流～河口域のヨシ原であったと考えられる。

花粉化石ではアカガシ亜属、シノキ属-マテバサイ属が、ブナ属、コナラ亜属と同程度の出現率を示すようになる。照葉樹林にはシイ類が加わり、平地から山麓にかけて分布を拡大したと考えられる。一方、ミズナラを主要素とし、ブナを伴う冷温帯林は分布を縮小したと考えられる。

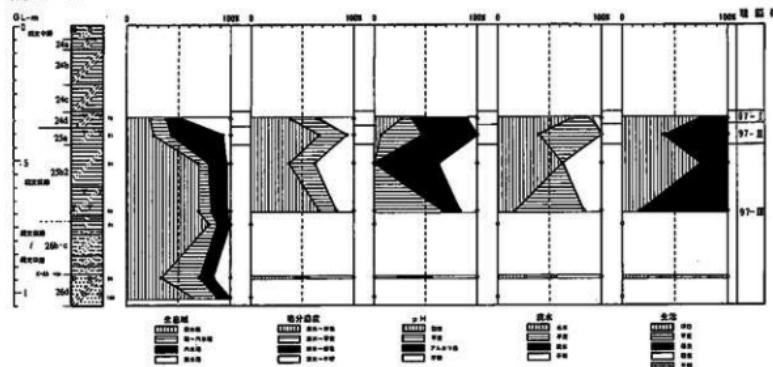
また、草本花粉の割合が高くなり、湾岸線がNG97-52次調査地に迫ったと考えられる。岸近くにはヨシ原が拡がっていたと考えられる。

iii) I带期(縄文時代前期から中期)

g亜帶期(縄文時代前期から中期初頭?)

NG97-52次調査地、NG98-20次調査地ともに海水種、汽水種の珪藻化石が減少し、淡水種が増加していく。古河内湾内は急激に淡水化していったと考えられる。分析試料を採取した地点での海水

NG97-52



NG98-20

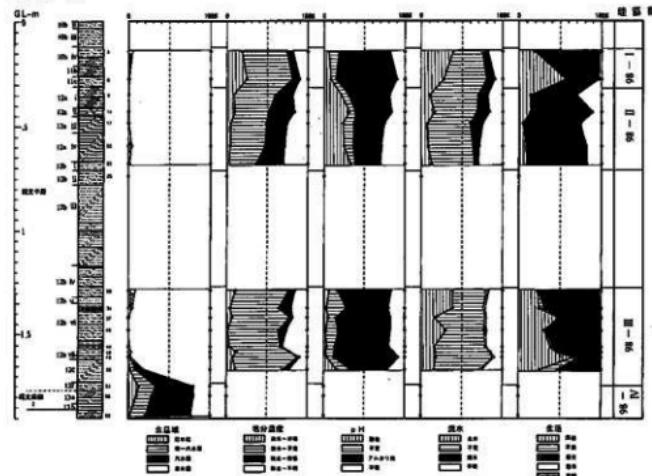


図57 NG97-52・98-20次調査地 硅藻総合ダイアグラム

あるいは汽水と考えられるもっとも高い水準は、NG97-52次調査地でTP+2.75m、NG98-20次調査地でTP+2.65mである。NG97-52次調査地、NG98-20次調査地ともにイネ科(40ミクロン未満)花粉が高率であり、長原遺跡一帯はヨシ原で覆われていたと考えられる。

アカガシ亜属、シノキ属-マテバシイ属がさらに高率になり、カシ類やシイ類を要素とする照葉樹林がさらに分布を拡げる一方で、冷温帶林は山地上部に追いやられたと考えられる。

またⅢ带期からⅠ带g亜带期にかけて、気温の上昇が顕著であったと考えられる。

f 亜帯期(縄文時代中期前半)

淡水・底生種が増加傾向を示し、水深が徐々に浅くなっていたと考えられる。また、アルカリ種が卓越し草本花粉も少ないとから、NG98-20次調査地周辺は開放的な水面を持つ沼沢湿地が拡がったと考えられる。

アカガシ亜属、シイノキ属-マテバシイ属の出現率はさらに高くなる。つまり、カシ類やシイ類を要素とする照葉樹林がさらに分布を拡げる一方で、冷温帯林は山地上部に追いやられたと考えられる。また、ムクノキ属-エノキ属、トチノキ属がやや増加し、山地縁辺での渓谷林あるいは河畔林の発達が考えられる。

e 亜帯期(縄文時代中期前半?)

水域の環境は、f 亜帯期と大きな変化は考えられない。

コナラ亜属、スギ属、ヒノキ属の出現率がやや高くなることから、一時的に気温が低下した可能性がある。山地部では、冷温帯林がやや分布を拡げ、スギ、ヒノキなどを要素とする温帯針葉樹林(中間温帯林)が顕著になってきた。

d 亜帯期(縄文時代中期)

水域の環境は、f・e 亜帯期と大きな変化は考えられない。

再度アカガシ亜属が高率になり、照葉樹林が拡大したと考えられる。

c 亜帯期(縄文時代中期)

陸生珪藻が検出され、淡水・酸性種も高率になる。さらに、花粉化石の含有量が少なくなり、相対的に草本花粉、胞子の割合が高くなる。f 亜帯期以降の水深の浅くなる傾向が続き、NG98-20次調査地周辺には干陸した場所(河原やそれに続く低地のような場所?)が多く認められるようになる。一方で、沼沢湿地にはヨシ原も拡がっていたと考えられる。

b 亜帯期(縄文時代中期後半?)

引き続き陸生珪藻が検出され、淡水・酸性種も高率である。花粉化石の含有量はやや多くなるが、草本花粉、胞子の割合は相対的に高い。NG98-20次調査地周辺には引き続き干陸した場所が認められ、ヨモギ類などのキク科植物や、ススキなどが繁茂していたと考えられる。一方で、NG98-20次調査地は沼沢湿地であり、ヨシ原が拡がっていたと考えられる。このような場所には腐植が貯まり、酸性の水質であったと考えられる。

a 亜帯期(縄文時代中期末or後期初頭)

陸生珪藻がほとんど認められなくなり、淡水・浮遊種が高率になる。また、淡水・アルカリ種が高率になる。花粉化石の含有量は引き続き少なく、草本花粉の割合も低くなる。再びNG98-20次調査地周辺には沼沢湿地が増え、干陸した場所が減っていった。また、水質も改善されアルカリ性に変わり、ヨシなどに覆われない開放的な水面も拡がっていたと考えられる。しかし、ここで認められる沼沢湿地が古河内湾と一連のものであるか、局地的なものであったかは不明である。

森林植生はd～b 亜帯期から変化したようすはない。

9)まとめ

長原遺跡東北地区のNG97-52次調査地、NG98-20次調査地における花粉分析および珪藻分析の結果、以下のことが明らかになった。

i) 花粉分析により、後期旧石器時代後半から縄文時代中期にかけての本地域における地域花粉帯をI～Ⅲ帯に分帶した。これらのうち、I帯をa～g亜帯に細分した。

ii) 珪藻分析結果から、NG97-52次調査地の地域珪藻帯を97-I～Ⅲ帯、NG98-20次調査地の地域珪藻帯を98-I～Ⅳ帯に分帶した。

iii) 花粉分析結果、珪藻分析結果を基に、調査地周辺での古環境変遷を推定した。特筆すべき点は以下の事柄である。

① 縄文時代前期から中期初頭の時期までは古河内海湾奥の小河川河口域であり、いわゆる「汽水域」に位置した。

② 海水の影響を受けた最高水準は分析試料を採取した地点においてNG97-52次調査地でTP+2.75m以上、NG98-20次調査地でTP+2.65m以上と考えられる。

③ K-Ah層準ではコナラ亜属花粉が卓越し、しばらくしてアカガシ亜属花粉が卓越するようになる。

④ 縄文時代中期の間に徐々に水深が浅くなり、干上がった場所も拡がっていった。

⑤ 縄文時代中期末あるいは後期初頭には一転して水深が増し、沼沢湿地が拡がるようになった。

註)

(1) 実際の試料採集箇所は、NG97-52次調査については図64に、NG98-20次調査については図61に赤字で示す。

第2節 土壇状遺構と出土土器の編年的位置づけ

土壇状遺構SX701・702は、盛土で築かれており、その中から一括性の高い古墳時代中期の土師器が出土した。SX701では古い段階の須恵器も共伴しており、年代を知ることのできる良好な資料となっている。ここでは、土師器の出土状況などによって土壇状遺構の用途を想定し、また、土師器についても編年的位置づけを行ってみたい。

1) 土壇状遺構について

土壇状遺構のSX701とSX702は65m離れた場所にあり、それぞれNG98-19・20次調査地の西端と東端で見つかった(図58)。両方とも基盤となった長原7Biii層に周辺の土砂を盛ったもので、周囲から約0.5m突出している。盛り上げた高まりの上面はさらに粘土を貼付けて平らに整形されているが、柱が立てられていたようすはない。土壇状遺構の周辺には1段低い地面が広がっているが、SX701の東側は盛土を採取した廃地が大半を占めている。しかし、SX702の西側では、畦畔の痕跡と踏込みが著しい作土層を確認することができた。よって、土壇状遺構の周辺の低地には基本的に水田が広がっていたと推定できる(註1)。

土師器はすべて土壇状遺構の盛土中から出土した(註2)。SX701では完形に近いものや、破片であっても復元すると完形に近くなるもの、また、故意に打欠いたものが含まれていた(註3)。滑石製・土製の玉類なども土器に混って出土した。また、遺物がもっとも密集している場所では炭化米や炭・焼

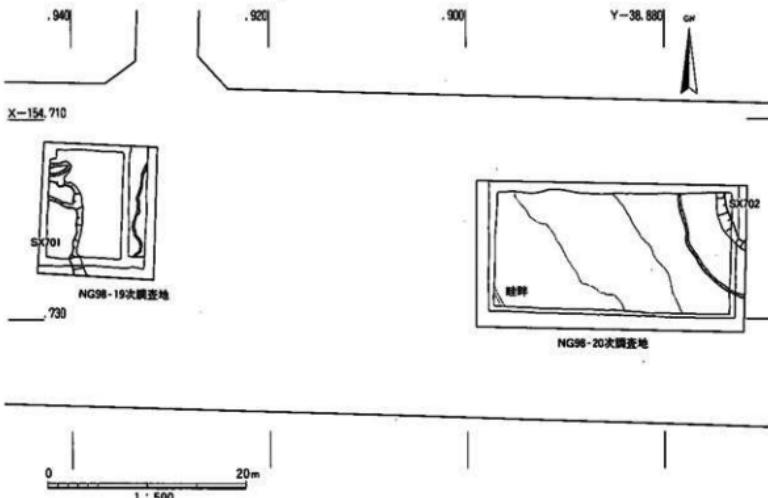


図58 土壇状遺構SX701・702の位置

土塊が見つかり、通常の煮炊きとは異なる二次的に被熱した土器も見つかっていることから、周辺で火を焚いていたことは確実である。一方、SX702は小さい破片がわずかに散在しているのみで、SX701のように土器は密集していなかった。しかし、炭化物の薄層が盛土中に確認できたことから、ここでも火が焚かれていたことがわかる。

以上のように、土壇状遺構は水田面から一段高く突出し、一定の間隔を置いて点在することから、休憩場や作業場のような役割を持っていたと考えられる。造成の途中には盛土とともに完形に近い土器や火を受けた土器、また玉類を埋めており、何らかの祭祀が行われていたようである。このような地鎮のためともいえる遺物を伴う遺構は周辺の遺跡からは見つかっておらず、土壇状遺構が祭祀に係る遺構とする想定が正しければ、今のところ長原遺跡の当地区だけに見られる特異な祭祀形態といえる。

2) SX701とSX702の土師器

土器はともに土壇状遺構から出土しており、盛土を行った時点で同時に廃棄された一括資料である。出土量はSX701の方が圧倒的に多く、器種も豊富である。

SX701出土の土師器は、型式的にはある程度の時期幅が認められる。しかし、古い様相を示すものはいずれも全体を復元できない小さな破片であるため、盛土に用いた土の中にもともと混っていた可能性が高い。よって、これらを除くと、おのずと盛土を行ったころに用いられていた土器が抽出できる。その中でも、完形に近く復元できたものを示したのが図59である。これらをもとに土師器の特徴を見てゆきたい。

壺は体部が倒卵形で口縁端部が肥厚するものと、体部が長胴形で口縁端部が肥厚しない直口のものがある。外面の調整は粗雑化したハケを多用し、内面の調整にはヘラケズリとハケを併用している。壺は擬口縁をつくる二重口縁をもつものが多く、同様な二重口縁をもつ大型鉢も存在している。小型丸底土器はハケによる調整は少數で、内・外面ともヘラケズリのみを行うものが多い。口縁部はすべて体部上端の内側に接合している。高杯は杯部の口縁端部が外反するもの、あるいはまっすぐ外上方に伸びる椀形のものと、杯底部が水平に伸びて擬口縁をつくる大型のものが主体である。いずれもハケによる外面調整が主であり、杯・脚接合部の内面に細い棒状工具による刺突痕が見られる(註4)。また、脚端部の面はヘラで切ったままのものが多い。大型高杯は杯部の内・外面にていねいなヘラミガキを施す装飾性が高いものと、全面をナデ調整のみで仕上げるものがある。高杯は以上の2系統が主流である。これら以外には、杯部がラッパ状に開くものや半球形に近い薄手のもの、弥生時代後期の要素を残すものなどさまざまな器形があるが、個体数はいずれも少數である。また、これらは接合部の内面に刺突痕がなく、脚部には裾部を強く屈曲させて端部をナデ調整で仕上げるものが多い(註5)。

SX702の土師器は出土量が少なく資料的には不十分であるが、破片からあえていうならば(図60)、壺・壺類では調整にハケが多用されており、体部内面はヘラケズリを行っている。小型丸底土器は口縁部が短く退化している。高杯は杯部の口縁端部が外反するものと、内傾する椀形のものがある。外

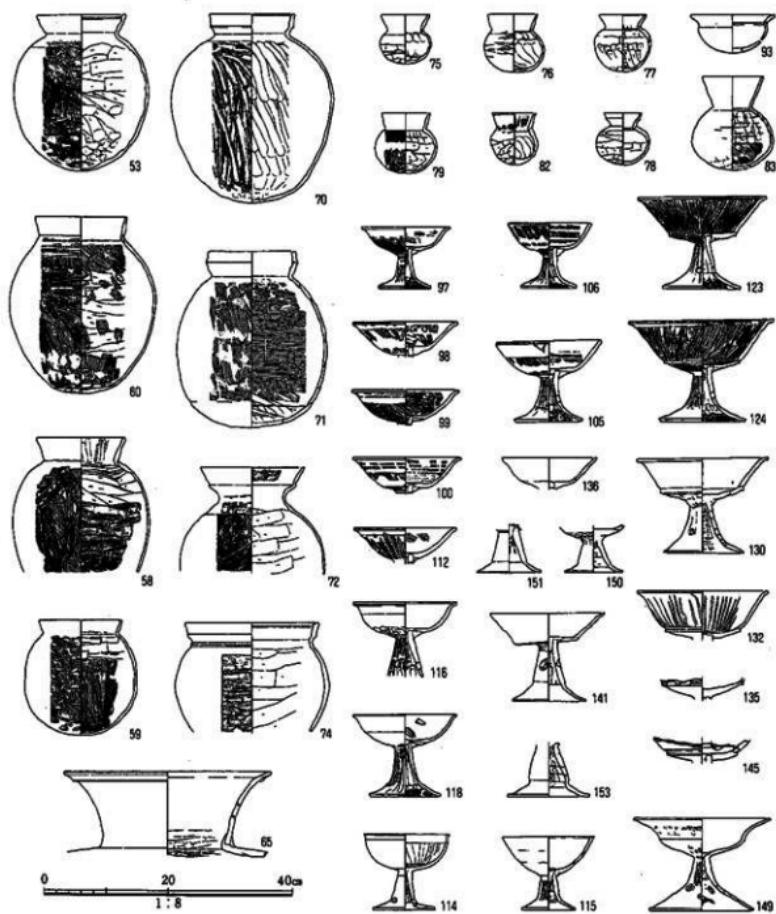


図59 SX701出土土器

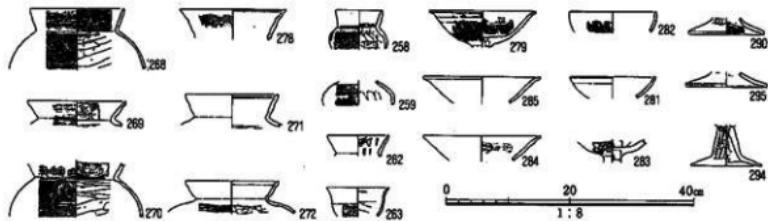


図60 SX702出土土器

面の調整はハケやナデを行う。脚部は柱部内面を横方向にヘラケゼリで調整するものが多い。よって、SX702の土師器はSX701のものよりわずかに新しい要素が認められるが、ほぼ同時期のものといえる。

3) SX701出土土師器の編年的な位置づけ

長原遺跡では古墳時代中期以降の土器の変遷について、1～5期までの区分がなされている[京嶋覚1992・1993]。近年では、[田中清美1999]によって1期がさらに前半と後半に分けられている。それによると、1期前半の土器の様相は布留式土器の基本的な組成が崩れた段階であり、韓式系土器・初期須恵器を含むとされている。ただし、初期須恵器の資料は未確認であった。SX701出土の土師器について見れば、やはり布留式土器の特徴であるいわゆる小型三種の組成は崩れているものの、高杯の特徴や二重口縁壺・鉢の存在などから1期前半の資料とされた八尾南遺跡SE21[八尾南遺跡調査会1981]、船橋遺跡O-I [原口省三他1962]の土器よりもさかのほる要素が見て取れる。また、平底鉢や甌に代表される韓式系土器をまったく含んでいないことは、それらが採用される以前のものである可能性も示唆している。よって、これらは1期前半とされた土器群よりさらにさかのほる年代が与えられよう。並行関係にある土器は船橋遺跡O-I [原口省三他1962]、あるいは八尾南遺跡SE26[八尾南遺跡調査会1981]出土のものであると考えられる。また、共伴した須恵器壺は、口縁端部の形態や頸部の接合方法からTG232型式に相当するものであり、その意味でもSX701出土の土師器は須恵器の発生と布留式土器の終末の間を埋めることのできる資料といえる。

4)まとめ

土壇状遺構はその立地から、水田の所々に点在する休憩場あるいは作業場のようなものであったと推定できる。構築年代は土師器の様相やTG232型式の須恵器の存在によって5世紀前半でも古い時期に求められよう。水田に係わる祭祀の中で、畦畔の中に土器を埋める水口の祭祀はいくつか知られているが、今回のように盛土の中に土器や玉類を埋める例は管見では見当らない。SX701やSX702は、このような地鎮と呼べる祭祀が古墳の構造以外でも行われていたことを示しているのである。古墳時代の祭祀形態を考える上で、新たな資料を加えることができたといえよう。 (松本)

註)

- (1) SX701とSX702の間に拡がる低地部分の標高はTP+6.4～6.5mで、ほとんど高低差がない。
- (2) 土師器は土壇状遺構の周囲に拡がる低地からも出土している。これらは盛土中の個体と接合することから、もとはすべて盛土中に含まれていたと考えられる。
- (3) 器種は、壺・二重口縁壺・直口壺・小型丸底土器・鉢・高杯などがある。各器種の個体数は遺構全体を完掘していないため確定することはできない。
- (4) 高杯のうち楕形のものは、口縁端部が外反・直口にかかわらず製作方法は同じである。まず、柱状部上端が開口した脚部をつくり、その上部の外面に粘土を横方向に足したり下部に補強したりしながら杯部を成形している。柱状部の開口部には粘土塊を充填して杯部の底を兼ねている。粘土塊は上方から強く押し込まれて

いるため脚部内面に半球状に突出しており、柱状部上端と杯部内面の底は厚さ1mmもないほど接近している。また、突出した粘土塊の中央には先端の直径が2~5mmの棒状あるいは竹管状工具による刺突痕が見られる。深さは4~10mmで、杯部内面の底付近にまで達しているものがあるため、粘土塊がまだ十分に柔かいときに刺していることがわかる。この刺突痕についてはさまざまな説があるが、柱状部内面を横方向に削る際のヘラ先の支点とする説は、ヘラケズリを行わないものにも刺突痕が見られるためにあたらない。粘土塊は脚柱部内面のヘラケズリのうちに充填され、製作手順では比較的あとのはうであることから、充填のうちに棒を刺すという行為はさらに最終段階であるといえる。[寺沢薫1986]は「接合部の乾燥を助けたこと」としているが、それとともに焼成前の最終段階で行うべき重要なことは、全体を均一に乾燥させることであろう。もっとも乾燥しにくい脚部内面を杯部と同じように乾燥させるためには、脚部内に棒を刺して土器を宙釣りにして風通しをよくする必要があったと思われる。杯底部が水平に伸びて外面に突帯をもつ大型の高杯は、基本的には杯部が楕形のものと製作方法は同じである。しかし、脚部の上端を塞ぐものが柔かい粘土塊ではなく、粘土板である点が異なっている。粘土板は厚さ3~4mmほどで、直径が脚上端の直径とはほぼ等しい。また、粘土塊ほど柔かくなかったことは、脚部内面に粘土があり突出していないことでわかる。この粘土板を脚上端にのせたあと、脚上部の外側に粘土を水平に貼付けて杯底部を形成している。杯底部は端部にいったん擬口縁をつくり、その上に大きく広がる口縁部を貼付けているため、外面には明瞭な突帯状の棱線ができる。

- (5)これらの高杯については製作方法を明らかにすることはできなかった。たとえば130は123・124といった大型の高杯と形態はほとんど同じであるが、杯・脚接合部に刺突痕がない。また、114・115・149といった類例のないものについても、杯・脚接合部に粘土塊を充填していることはわかるが刺突痕がなく、詳しい製作方法は不明である。



第V章　まとめ

本年度の長原遺跡東北地区の調査は、八尾市との市境に近い2箇所で行った。その中でも、NG98-20次調査では現地表下8.0mの低位段丘構成層まで調査を行うことができた。また、植生や地層の堆積環境の変遷を追うために、花粉・珪藻分析用の試料を探取し(図61・62)、前年度に採取しておいたNG97-52次調査の試料(図63・64)と合わせて分析を行った。これらをもとに、長原遺跡東北地区における縄文時代から飛鳥時代にかけての調査地周辺のようすをまとめたい。

1) 縄文時代

NG98-20次調査では、TP+2.6m前後の深さで第13a・b層を埋土とする無数の生痕化石を検出した(写真10、図版8)。同様の生痕化石は、西方に約500m離れたNG97-41・52次調査(図2)でもTP+2.6~2.8mの深さで見つかっており、これらが長原遺跡東北地区で広く分布していることがわかった。生痕化石は2種類あるが、いずれもカニなど小型の甲殻類がつくる巣孔と形が似ており、周辺の環境が水辺に近かったことがうかがえる。生痕化石が形成された時期は、第13a・b層に横大路火山灰の火山ガラスを含むことから縄文時代早期末以降であり、縄文海進の時期と重なっていることがわかる。したがって、見つかった生痕化石は当時の汀線の位置を示している可能性が高い。今まで古河内湾で確認されている縄文海進の最高潮位は、鬼虎川遺跡[趙哲済1999]や龟井遺跡[那須孝悌・樽野博幸1980]においてTP+2.0m前後と確認されているが、干潟や湾奥の入り組んだ地形での干満差がしばしば1mに及ぶことを考えれば、同じ時期の生痕化石がTP+2.8m前後に形成されていても不思議ではない。これは、NG97-52・98-20次調査地の花粉・珪藻分析からもいえる。分析によると、第IV章で記した分析区分によるⅢ帶～Ⅰ帶g亜帶期にかけての地層は海水の影響を受けた汽水域の特徴が見られ、Ⅰ帶f亜帶期以降の地層は急激に淡水化が進む傾向があるという。NG97-52次調査の長原12Ci層前後の地層やNG98-20次調査の第13a・b層(長原12Cii～13A層)は、まさにⅠ帶g亜帶期に含まれ、海水が影響を及ぼしたものっとも高地に分布する地層といえるのである。しかも、生痕化石によってカニなどの浅瀬に住む生物の繁殖が確認され、当時の水深は比較的浅かったと推定できる。よって、縄文海進期の長原遺跡東北地区は、最高TP+2.8m付近まで海水の影響を受けた古河内湾の最深部、もしくは陸地から流れ出る小河川の河口域であったことが想定できるのである。

第12層から第9層にかけては、厚い水成層と暗色帯が交互に形成されている。水成層は大規模な冲積作用で運ばれたシルト～粗粒砂で構成される。堆積した時期は第12c～b・第11～10・第9b層の3期に大別でき、それぞれの厚さは1m前後に及ぶ。これらは下位層をほとんど浸食しておらず、穏やかな水流で堆積しているようですが見て取れる。暗色帯は第12b～a・第9c層に見られ、明確な黒色を呈している。これも緩やかな起伏はあるが、広い範囲で安定した面を保っていたことがわかる。しか

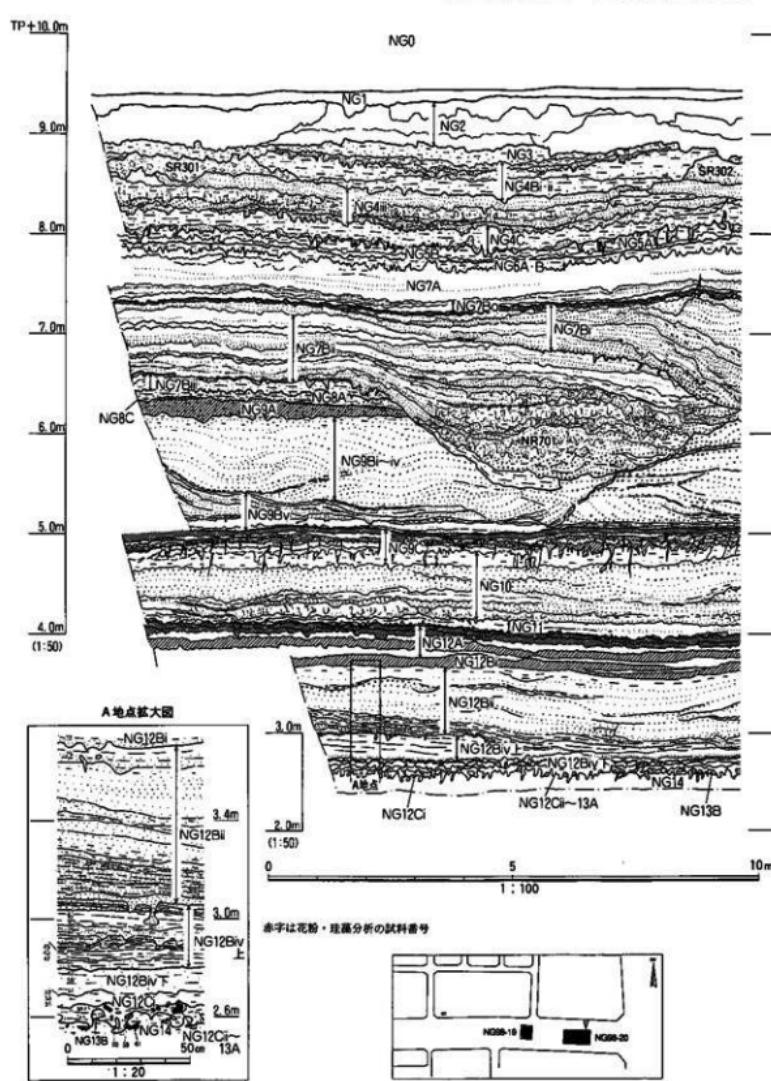


図61 NG98-20次調査南壁地層断面図(東半)

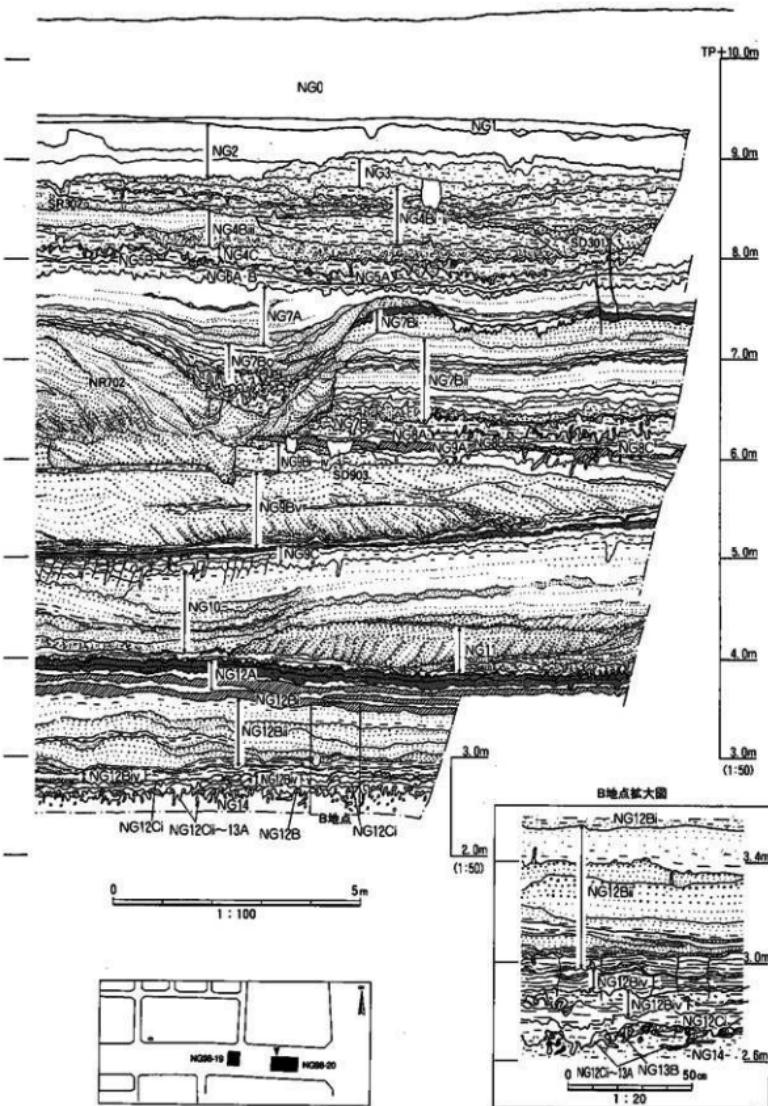


図62 NG98-20次調査南壁地層断面図(西半)

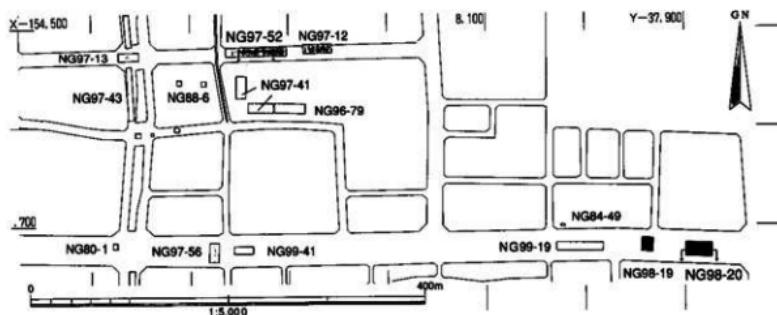
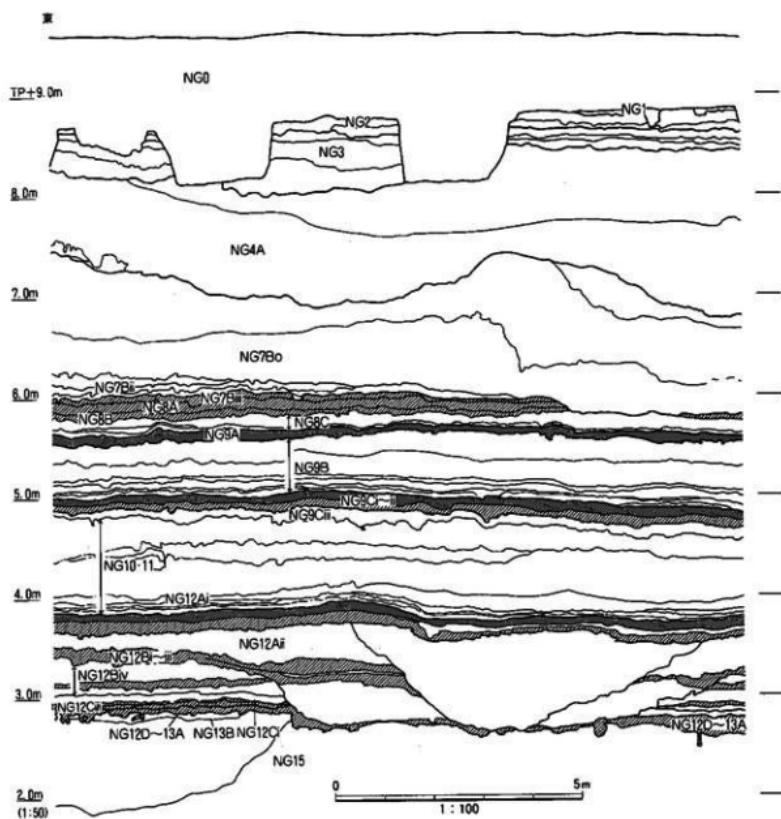


図63 NG97-52次調査南壁中央地層断面図(東半)

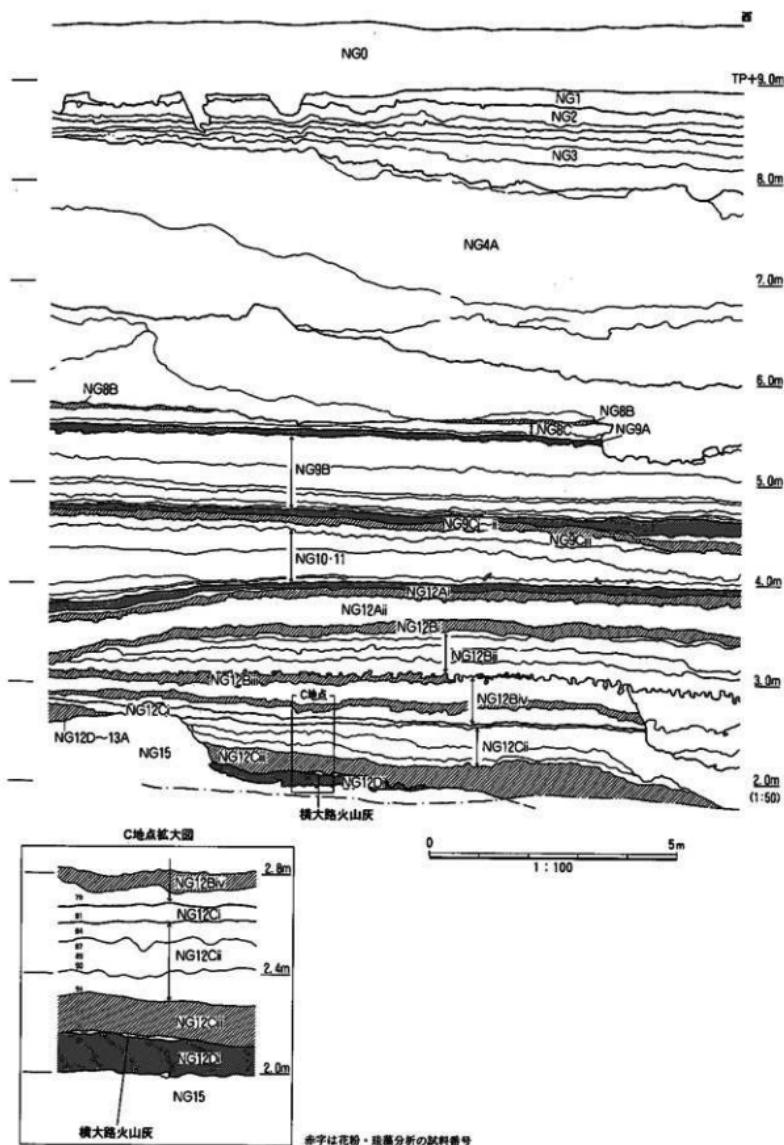


図64 NG97-52次調査南壁中央地層断面図(西半)

し、今回の調査区内では遺構や遺物は見あたらず、人間が活動していた痕跡は見い出せなかった。地層内の堆積物の状況からも乾燥した堅い地面ではなく、植物が生い茂った湿地状の環境であったと推定できる。このことは花粉・珪藻分析からも裏付けられる。NG98-20次調査地の第12層(長原12層)は分析区分によるI带 f ~ b亜帯期であり、急激に淡水化が進んで水深が浅くなる時期にあたっている。第12a層(長原12A層)の暗色帯からは、ある程度乾燥した地面に生えるキク科植物やススキなどの花粉が検出されている。さらに、I带 a亜帯期にあたる第11・10層(長原11・10層)からは、花粉の含有量が減るなど、再び水深が増して開放的な水面が広がっていたことを示す結果が得られている。つまり、第12層以降の地層からは、縄文海進後に海平面の下降に従って陸地からの沖積作用が強まり、地表面の乾燥と洪水による氾濫を繰返しながら古河内湾が徐々に埋積されてゆくようが見て取れるのである。縄文時代前期から後期にかけてたびたび起った洪水は安定した生活を脅かし、当地は人にとて住みよい場所でなかったようである。洪水が治まるのは第9a層(長原9A層)が形成されるところであり、それ以後によく溝などの遺構によって人間の活動を明確に捉えることができる。

2)弥生時代から古墳時代中期

弥生時代から古墳時代中期初頭にかけては、NG98-19・20次調査地では大きな地形の変化はなく、地表面は比較的安定していた。沖積作用は弱まり、水成層も厚さ5cm以下の第8c層(長原8C層)のほかは見あたらない。古墳時代中期になると、双方の調査区で縄文時代晩期以来の微高地を利用して土壇状遺構SX701・702が造られる。同時に周辺では水田が営まれ、当地区において最初の生産地としての開発が行われたことがわかる。しかし、水田の作土に含まれる遺物は土壇状遺構に含まれる遺物と時期差がないことから、耕作は短期間しか行われなかった。水田が営まれて間もなく、洪水によって厚い第7a層(長原7Bi・ii層)が全面を覆うのである。第7a層は基本的にはラミナが水平堆積し、粒径が細かい堆積物で構成される氾濫性の堆積層である。しかし、これらの水成層の供給源であるNR701・702は、下位層を激しく削りながら砂礫を運んでおり、洪水本体の勢いを示している。自然流路はそれぞれ5世紀中頃と末頃の遺物を含んでおり、大規模な洪水は50年に1回程度の間隔で起きていたことがわかる。

3)古墳時代後期以降

古墳時代後期になると、NG98-20次調査地で明確な暗色帯である第6c層(長原7Bi層の最上部)が形成される。上面ではSD701やそれに伴う土手が造られており、安定した生活面であったことがわかる。しかし、第6c層はNG98-19次調査地には存在しないため、双方の調査地の間に地層の堆積を大きく変えるような遺構の存在、あるいは地形の変化が想定できる。第6c層が形成されたのちは、再び氾濫性の堆積層である第6bi~iii層(長原7A~7B0層)が全面を厚く覆う。飛鳥時代以降は洪水による土砂の堆積と耕作が繰返されており、集落に関係する建物跡なども見られないことから、調査地の周辺は現代にいたるまで農地として活用されていた。

(松本)

別 表

別表1 遺物一覧

告 番号	遺跡・地区	調査地	層位・遺構	種類	器形	基高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	高(cm)	備考
1	長原遺跡東北地区	NG98-19	第7axi層	木製品	建蔽部材?	長73.8	幅7.0	-	厚2.7	
2	長原遺跡東北地区	NG98-19	第9bi層	陶文土器	鉢	-	-	-	-	長原式
3	長原遺跡東北地区	NG98-19	第8層	弥生土器	壺	(2.0)	15.0	-	-	
4	長原遺跡東北地区	NG98-19	第8層	弥生土器	壺	-	-	-	-	タキ
5	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土範	勾玉	長4.50	幅2.30	厚0.80~1.60	-	手くね 真11.7g
6	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	滑石製	勾玉	長3.05	幅1.95	厚0.85	孔径0.18	重6.3g
7	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	滑石製	勾玉	長1.10	幅0.65	厚0.30	孔径0.12	重0.3g
8	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	滑石製	臼玉	厚0.23	径0.43	-	孔径0.18	重0.1g以下
9	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	滑石製	臼玉	厚0.18~0.20	径0.40	-	孔径0.15	重0.1g以下
10	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	滑石製	臼玉	厚0.18~0.23	径0.45	-	孔径0.15	重0.1g以下
11	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	滑石製	臼玉	厚0.12	径(0.32)	-	孔径0.15	重(0.1g以下)
12	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	滑石製	臼玉	厚0.18	径0.35	-	孔径0.17	重(0.1g以下)
13	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	滑石製	臼玉	厚0.15~0.21	径0.38	-	孔径0.18	重0.1g以下
14	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	滑石製	臼玉	厚0.20~0.25	径0.30	-	孔径0.12	重0.1g以下
15	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	滑石製	臼玉	厚0.18~0.30	径0.38	-	孔径0.15	重0.1g以下
16	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	滑石製	臼玉	厚0.29	径0.37	-	孔径0.17	重0.1g以下
17	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	滑石製	臼玉	厚0.15	径0.35	-	孔径0.18	重(0.1g以下)
18	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	滑石製	臼玉	厚0.30	径(0.25)	-	孔径0.10	重(0.1g以下)
19	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	滑石製	臼玉	厚0.21	径0.37	-	孔径0.13	重0.1g以下
20	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	滑石製	臼玉	厚0.22~0.25	径0.35	-	孔径0.14	重0.1g以下
21	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	滑石製	臼玉	厚0.21	径0.41	-	孔径0.13	重0.1g以下
22	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	滑石製	臼玉	厚0.17~0.22	径0.31	-	孔径0.12	重0.1g以下
23	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	滑石製	臼玉	厚0.30~0.30	径0.32	-	孔径0.12	重0.1g以下
24	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	滑石製	臼玉	厚0.28~0.30	径0.35	-	孔径0.18	重0.1g以下
25	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	滑石製	臼玉	厚0.30	径0.40	-	孔径0.15	重0.1g以下
26	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	滑石製	臼玉	厚0.20	径0.38	-	孔径0.13	重0.1g以下
27	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	滑石製	臼玉	厚0.20	径0.36	-	孔径0.17	重0.1g以下
28	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	滑石製	臼玉	厚0.20	径0.39	-	孔径0.11	重0.1g以下
29	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	滑石製	臼玉	厚0.30	径0.38	-	孔径0.15	重0.1g以下
30	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	弥生土器	壺	(4.2)	15.0	-	-	
31	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	弥生土器	壺	(4.8)	12.0	-	-	
32	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壺	(4.5)	17.6	-	-	
33	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壺	(2.7)	16.8	-	-	
34	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壺	(3.2)	15.0	-	-	
35	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壺	(3.0)	14.6	-	-	
36	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壺	(3.0)	15.0	-	-	
37	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壺	(6.0)	14.8	-	-	内面に焦げ
38	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壺	(9.5)	14.8	-	-	
39	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壺	(4.5)	-	-	-	瓶径12.4
40	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壺	(10.0)	16.0	-	-	
41	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壺	(13.5)	12.8	-	-	
42	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壺	(6.4)	11.4	-	-	
43	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壺	(5.0)	11.0	-	-	
44	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壺	(4.0)	13.4	-	-	
45	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壺	(9.0)	14.4	-	-	
46	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壺	(3.4)	16.0	-	-	
47	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壺	(3.9)	13.6	-	-	
48	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壺	(3.1)	12.6	-	-	
49	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壺	(4.7)	13.1	-	-	
50	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壺	(3.7)	12.8	-	-	
51	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壺	(3.5)	14.6	-	-	
52	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壺	(4.8)	13.0	-	-	
53	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壺	25.3	14.0	-	-	体径21.8
54	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壺	(21.6)	15.6	-	-	体径25.0 内面に焦げ
55	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壺	(12.0)	-	-	-	体径27.0
56	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壺	(12.4)	-	-	-	内面に米焦げ
57	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	大型壺	(9.0)	-	-	-	腰径20.0
58	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	大型壺	(21.7)	14.0	-	-	体径22.3
59	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	中型壺	18.5	13.4	-	-	体径18.4 内面に焦げ

報告番号	道跡・地区	調査地	肩位・横幅	種類	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	他(cm)	備考
60	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	長柄甕	28.0	14.8	-	体部径23.9	
61	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	長柄甕	(4.5)	13.8	-	口縁部に爪跡	
62	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	台付鉢	(7.2)	-	頸径9.4	体部径10.5	
63	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	甕	(2.3)	-	4.0		
64	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	甕	(2.3)	-	4.4		
65	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	甕	(13.0)	33.8	-	TG23.2?	
66	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	広口甕	(3.7)	13.8	-		
67	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	二重口縁甕	(4.2)	-	-	頸径5.7	
68	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	二重口縁甕	(5.9)	16.0	-	口縁部に小孔	
69	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	二重口縁甕	(5.5)	11.0	-		
70	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	二重口縁甕	30.0	13.8	-	体部径26.5	
71	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	二重口縁甕	(27.5)	14.0	-	体部径24.6	
72	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	二重口縁甕	(17.0)	16.8	-	体部径23.7	
73	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	二重口縁甕	(12.5)	15.6	-		
74	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	大型鉢	(17.5)	22.4	-	内面に焦げ	
75	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	小型丸底土器	(5.2)	7.6	-	体部径8.3	内面に焦げ
76	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	小型丸底土器	9.2	8.8	-	体部径9.9	裏部にヘラ記号
77	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	小型丸底土器	9.1	7.6	-	体部径9.2	
78	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	楕円錐	8.2	6.0	-	体部径8.7	
79	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	小型丸底土器	5.6	7.6	-	体部径10.0	
80	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	小型丸底土器	(6.6)	8.8	-	体部径9.9	
81	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	小型丸底土器	(2.7)	6.4	-		
82	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	小型丸底土器	8.3	7.0	-	体部径7.7	
83	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	直口甕	(14.6)	9.5	-	体部径13.1	
84	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	直口甕	(9.7)	9.2	-		
85	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	直口甕	(7.7)	10.8	-		
86	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	直口甕	(7.7)	9.8	-	体部径14.4	
87	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	直口甕	(3.8)	9.6	-		
88	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	直口甕	(5.5)	10.0	-		
89	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	直口甕	(6.7)	11.5	-		
90	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	直口甕	(3.2)	-	-	頸径5.4	
91	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	直口甕	(4.0)	10.0	-		
92	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	直口甕	(4.2)	11.0	-		
93	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	鉢	(6.0)	13.2	-	体部径11.1	
94	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	鉢	(5.1)	12.4	-	体部径10.4	
95	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯	11.7	16.0	9.5		
96	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯	(11.4)	16.6	-	口縁部に打欠き	
97	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯	9.9	14.2	8.4	脚部部にヘラ記号	
98	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯	(5.7)	16.8	-	口縁部に打欠き	
99	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯	(5.7)	17.1	-		
100	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯	(6.0)	18.2	-	口縁部に打欠き	
101	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯	(6.5)	17.2	-		
102	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯	(6.0)	17.4	-		
103	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯	(3.0)	18.2	-		
104	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯	(5.6)	17.4	-		
105	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯	12.3	16.6	10.7	脚部部にヘラ記号	
106	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯	10.4	13.0	8.7		
107	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯	(14.3)	16.0	10.8		
108	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯	12.2	17.8	10.8		
109	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯	(2.7)	-	-		
110	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯	(3.5)	16.0	-		
111	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯	(5.2)	18.4	-		
112	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯	(5.7)	16.6	-		
113	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯	(5.4)	16.4	-		
114	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯	12.2	14.0	10.0		
115	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯	12.0	14.2	8.6	脚柱部に刺突痕	
116	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯	(12.3)	16.7	-		
117	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯	(12.6)	16.4	11.2		
118	長原道跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯	13.3	16.8	11.4		

報告番号	調跡・地区	調査地	層位・調査	種類	基形	基高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	他(cm)	備考
119	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(3.8)	-	-		
120	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(3.5)	-	-		
121	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(3.0)	-	-		
122	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(2.0)	-	-		
123	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	14.8	20.6	12.5		
124	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	16.4	23.5	13.5		脚部にヘラ記号
125	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(12.9)	22.3	-		口縁部に打欠き
126	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(7.2)	22.4	-		
127	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(5.2)	22.4	-		
128	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(13.2)	21.6	-		
129	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(4.8)	-	-		
130	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	15.2	21.4	12.8		
131	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(5.3)	-	-		杯径12.4
132	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(7.9)	21.0	-		
133	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(2.5)	-	-		杯径15.0 口縁部に打欠き
134	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	-	-	-		杯径12.0 口縁部に打欠き
135	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(3.0)	-	-		杯径13.0 口縁部に打欠き
136	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(5.2)	17.4	-		
137	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(5.1)	15.6	-		
138	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(4.5)	14.8	-		
139	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(5.2)	17.6	-		
140	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(5.2)	12.8	-		
141	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	14.2	18.6	12.2		脚柱部に剥突痕
142	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(5.8)	17.0	-		
143	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(3.2)	17.4	-		
144	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(6.9)	23.0	-		
145	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(3.8)	-	-		杯径11.5 口縁部に打欠き
146	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(4.2)	15.8	-		
147	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(5.6)	16.6	-		
148	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(4.8)	-	-		
149	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	14.9	11.0~11.8	16.8		
150	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(7.6)	-	9.4		
151	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(7.6)	-	10.4		
152	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(7.2)	-	10.8		
153	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(8.8)	-	13.2		
154	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(1.5)	-	11.0		
155	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(1.0)	-	10.0		
156	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(0.8)	-	12.0		
157	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(0.7)	-	12.4		
158	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(1.2)	-	10.0		
159	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(0.9)	-	8.6		
160	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(1.5)	-	9.0		
161	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(2.4)	-	10.6		
162	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(3.2)	-	14.8		
163	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(3.2)	-	11.2		脚部にヘラ記号
164	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(8.7)	-	13.2		脚部にヘラ記号
165	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(7.4)	-	10.8		
166	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(7.6)	-	13.2		
167	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(6.4)	-	13.0		
168	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(1.8)	-	13.0		
169	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(7.8)	-	11.2		
170	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(4.3)	-	13.0		
171	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	-	-	11.0		
172	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(2.5)	-	10.0		
173	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(2.7)	-	12.6		
174	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(1.1)	-	12.0		
175	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(1.0)	-	11.0		脚部にヘラ記号
176	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(3.1)	-	10.0		
177	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701底土	土器群	高杯	(5.1)	-	-		

報告番号	沿革・地区	調査地	層位・地層	種類	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	幅(cm)	備考
178	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯	(3.2)	-	-	-	
179	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯	0.9	径1.6	-	孔径0.3	光燒粘土
180	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	製塙土器	(3.4)	6.0	-	-	-	
181	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	製塙土器	(2.5)	6.0	-	-	-	
182	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	製塙土器	(2.4)	5.0	-	-	-	
183	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	製塙土器	(1.5)	(5.0)	-	-	-	
184	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	製塙土器	(2.2)	6.0	-	-	-	
185	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	製塙土器	(1.8)	6.0	-	-	-	
186	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	製塙土器	(2.1)	8.0?	-	-	-	
187	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	製塙土器	(3.2)	4.0	-	-	-	
188	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	製塙土器	(2.1)	6.0	-	-	-	
189	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	製塙土器	(1.9)	5.0	-	-	-	
190	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	製塙土器	(3.5)	6.6	-	-	-	
191	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	製塙土器	(3.5)	-	-	-	-	
192	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	製塙土器	(3.5)	-	-	5.0	-	
193	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	ミニチュア壺	(4.4)	-	-	-	
194	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器?	(1.3)	-	-	5.0	-	
195	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	(2.4)	-	-	5.8	-	
196	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器?	(2.3)	-	-	9.6	-	
197	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	ミニチュア器台	5.1	8.1	6.0	-	
198	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	(3.2)	-	-	5.4	-	
199	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壳小片	-	-	-	-	厚0.5 側面研磨
200	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壳小片	-	-	-	-	厚0.4 側面研磨
201	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壳小片	-	-	-	-	厚0.3 側面研磨
202	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	鉢小片	-	-	-	-	厚0.5 側面研磨
203	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壳小片	-	-	-	-	厚0.3 側面研磨
204	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壳小片	-	-	-	-	厚0.4 側面研磨
205	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	壳小片	-	-	-	-	厚0.3 側面研磨
206	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師器	高杯小片	-	-	-	-	厚0.4~0.8 側面研磨
207	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師質	土製品	幅1.2	長1.9	厚0.6	-	
208	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師質	棒状土製品	幅0.8	長(1.5)	厚0.5	-	
209	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師質	棒状土製品	幅0.6	長(1.1)	厚0.6	-	
210	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師質	棒状土製品	幅0.6	長(2.1)	厚0.6	-	
211	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	土師質	土鍬	厚(1.3)	長(5.1)	-	孔径(0.3)	
212	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	須生土器	底部	(2.0)	-	2.6	-	
213	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	須生土器	底部	(2.0)	-	4.1	-	
214	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	須生土器	底部	(3.4)	-	5.0	-	
215	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	須生土器	底部	(3.0)	-	5.8	-	
216	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	須生土器	要	(2.4)	13.0	-	-	
217	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	須生土器	要	(2.3)	?	-	-	
218	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	縄文土器	鉢	-	-	-	-	長原式
219	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701盛土	縄文土器	鉢	-	-	-	-	長原式
220	長原遺跡東北地区	NG98-19	SX701西辺	木製品	建築部材	幅(11.0)	幅(7.8)	-	-	厚(3.0)
221	長原遺跡東北地区	NG98-20	第3層	瓦器	瓦	(4.3)	16.0	-	-	
222	長原遺跡東北地区	NG98-20	第4c層	黑色土器A類	碗	5.7	14.8	-	-	高台径7.6
223	長原遺跡東北地区	NG98-20	第5a層	土師器	皿	(1.9)	16.8	-	-	
224	長原遺跡東北地区	NG98-20	第5a層	土師器	杯	(2.9)	15.8	-	-	
225	長原遺跡東北地区	NG98-20	第6a層	土師器	高杯	(2.8)	21.0	-	-	
226	長原遺跡東北地区	NG98-20	第6a層	土師器	高杯	(2.0)	23.6	-	-	
227	長原遺跡東北地区	NG98-20	第6a層	土師器	要	(7.5)	17.0	-	-	
228	長原遺跡東北地区	NG98-20	第6a層	土師器	杯	(4.4)	11.8	-	-	
229	長原遺跡東北地区	NG98-20	第5a層	土師器	把手部分	厚0.7	-	-	-	
230	長原遺跡東北地区	NG98-20	第6a層	須恵器	杯B蓋	(1.9)	-	-	-	つまみ径2.8
231	長原遺跡東北地区	NG98-20	第6a層	土師器	蓋	(1.2)	-	-	-	つまみ径2.9
232	長原遺跡東北地区	NG98-20	第6a層	須恵器	杯B蓋	(1.9)	17.4	-	-	
233	長原遺跡東北地区	NG98-20	第6a層	須恵器	杯B蓋	(1.9)	14.6	-	-	
234	長原遺跡東北地区	NG98-20	第6a層	須恵器	杯B蓋	(0.7)	14.2	-	-	墨色
235	長原遺跡東北地区	NG98-20	第6a層	須恵器	?	-	-	-	-	墨色
236	長原遺跡東北地区	NG98-20	第6a層	須恵器	蓋	(1.8)	-	10.0	-	

報告番号	追跡・地区	調査地	層位・遺構	種類	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	側径(cm)	備考
237	長原遺跡東北地区	NG98-20	第6a層	須恵器	杯B	(1.1)	-	12.0	-	
238	長原遺跡東北地区	NG98-20	第6a層	須恵器	杯B	(1.9)	-	13.4	-	器身
239	長原遺跡東北地区	NG98-20	第6a層	土師器	杯B	-	-	-	-	器面
240	長原遺跡東北地区	NG98-20	第6b1層	土師器	高杯	(1.5)	-	-	-	杯径2.0
241	長原遺跡東北地区	NG98-20	第6a層	須恵器	杯B	(1.3)	-	-	-	高台径7.0
242	長原遺跡東北地区	NG98-20	第6b1層	須恵器	杯身	(4.0)	11.2	-	-	TK209
243	長原遺跡東北地区	NG98-20	第6a層	製塙土器		(7.3)	12.8	-	-	
244	長原遺跡東北地区	NG98-20	第6a層	製塙土器		(6.6)	10.0	-	-	
245	長原遺跡東北地区	NG98-20	第6a層	製塙土器		(2.7)	10.0	-	-	
246	長原遺跡東北地区	NG98-20	第6a層	製塙土器		(3.0)	-	-	-	
247	長原遺跡東北地区	NG98-20	第6a層	製塙土器		(4.8)	-	-	-	
248	長原遺跡東北地区	NG98-20	第8a層	弥生土器	甕	(2.5)	13.8	-	-	
249	長原遺跡東北地区	NG98-20	第8a層	弥生土器	甕	(2.5)	-	3.0	-	
250	長原遺跡東北地区	NG98-20	第8a層	純土器	深鉢	(3.2)	? -	-	-	
251	長原遺跡東北地区	NG98-20	第6a層	シルト岩	砾石	長(6.0)	幅3.2-4.2	3.6	-	
252	長原遺跡東北地区	NG98-20	第9a層	サヌカイト	剥片	長3.10	幅3.50	厚0.35	重39g	98AC163
253	長原遺跡東北地区	NG98-20	第9a層	サヌカイト	剥片	長3.10	幅4.10	厚0.38	重50g	98AC143
254	長原遺跡東北地区	NG98-20	第9a層	サヌカイト	剥片	長3.50	幅1.60	厚0.70	重38g	98AC141
255	長原遺跡東北地区	NG98-20	第13a層	サヌカイト	剥片	長1.65	幅4.18	厚0.42	重23g	98AC276
256	長原遺跡東北地区	NG98-20	第13a層	砾石	砾	長2.78	幅1.72	-	重18g	98AC277
257	長原遺跡東北地区	NG98-20	第13a層	砾石	砾	長3.48	幅1.60	-	重0.9g	98AC281
258	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	小型丸底土器	(6.2)	7.3	-	体部径9.3	
259	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	小型丸底土器	(4.0)	頻径6.2	-	体部径11.8	
260	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	小型丸底土器	(6.0)	10.8	-	-	
261	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	小型丸底土器	(3.5)	9.0	-	-	
262	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	小型丸底土器	(3.5)	9.8	-	-	
263	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	钵	(4.7)	10.0	-	-	
264	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	弥生土器	甕	(5.8)	10.0	-	-	
265	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	製塙土器		(3.0)	? -	-	-	厚0.25
266	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	製塙土器		(2.5)	6.0	-	-	
267	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	ミニチュア甕	(4.2)	7.2	-	-	
268	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	甕	(9.8)	15.0	-	-	
269	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	甕	(4.1)	16.0	-	-	
270	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	甕	(9.0)	-	-	-	頻径13.4
271	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	甕	(5.4)	13.0	-	-	
272	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	甕	(5.3)	15.0	-	-	
273	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	甕	(3.2)	17.0	-	-	
274	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	甕	(2.8)	13.0	-	-	
275	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	甕	(4.2)	14.0	-	-	
276	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	甕	(3.4)	16.0	-	-	
277	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	甕	(4.6)	16.0	-	-	
278	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	広口甕	(4.9)	17.0	-	-	
279	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	高杯	(5.7)	17.4	-	-	
280	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	高杯	(2.8)	-	-	-	ねもと径3.1
281	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	高杯	(3.6)	13.4	-	-	
282	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	高杯	(3.4)	13.8	-	-	
283	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	高杯	(3.8)	-	-	-	ねもと径2.9
284	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	高杯	(4.4)	19.0	-	-	
285	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	高杯	(4.1)	19.0	-	-	
286	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	高杯	(4.1)	-	-	-	ねもと径2.4
287	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	高杯	(6.5)	-	-	-	ねもと径2.7
288	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	高杯	(6.4)	-	-	-	ねもと径2.4
289	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	高杯	(4.5)	-	-	-	ねもと径2.4
290	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	高杯	(2.8)	-	12.0	-	
291	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	高杯	(3.2)	-	16.0	-	
292	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	高杯	(2.5)	-	12.0	-	
293	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	高杯	(4.1)	-	11.0	-	
294	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	高杯	(6.6)	-	11.5	-	
295	長原遺跡東北地区	NG98-20	SX702	土師器	高杯	(2.4)	-	13.0	-	

報告 番号	道路・地区	調査地	層位・遺構	種類	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	幅(cm)	備考
296	長原道路東北地区	NG98-20	SK702	滑石製	白玉	厚0.28~0.32	径0.46	-	孔径0.14	重0.1g以下
297	長原道路東北地区	NG98-20	NR701	土師器	ミニチュア壺	6.5	5.2	-		
298	長原道路東北地区	NG98-20	NR701	土師器	高杯	(2.6)	17.0	-		
299	長原道路東北地区	NG98-20	NR701	土師器	高杯	(7.1)	-	10.4		
300	長原道路東北地区	NG98-20	NR701	土師器	甕	(4.3)	13.8	-		
301	長原道路東北地区	NG98-20	NR701	弦生土器	甕	(5.0)	14.0	-		
302	長原道路東北地区	NG98-20	NR701	須恵器	甕	(7.6)	胴径10.8	-	頭径3.5	TK216
303	長原道路東北地区	NG98-20	NR701	須恵器	甕	46.6	24.8	-		TK216
304	長原道路東北地区	NG98-20	NR701	木製品	杭	長(22.6)	幅4.6	-	厚2.2	上半炭化
305	長原道路東北地区	NG98-20	NR702	須恵器	杯垂	4.5	12.0	-		TK23
306	長原道路東北地区	NG98-20	NR702	須恵器	杯身	(3.4)	11.0	-		TK23
307	長原道路東北地区	NG98-20	NR702	土師器	碗	5.7	11.8	-	最大径13.0	
308	長原道路東北地区	NG98-20	NR702	土師器	長颈甕	(8.8)	胴径13.4	-	頭径5.8	
309	長原道路東北地区	NG98-20	NR702	土師器	甕	18.2	16.5	-		
310	長原道路東北地区	NG98-20	NR702	土師器	小型九底甕	8.8	(8.6)	-		
311	長原道路東北地区	NG98-20	SD401	土師器	て字口縁皿	1.2	9.0~9.5	-		
312	長原道路東北地区	NG98-20	SD401	土師器	て字口縁皿	1.5	9.4	-		
313	長原道路東北地区	NG98-20	SD401	土師器	て字口縁皿	1.3	9.8	-		
314	長原道路東北地区	NG98-20	SD401	土師器	て字口縁皿	1.5	9.6	-		
315	長原道路東北地区	NG98-20	SD401	土師器	て字口縁皿	1.6	9.8	-		
316	長原道路東北地区	NG98-20	SD401	土師器	て字口縁皿	1.4	9.6	-		
317	長原道路東北地区	NG98-20	SD401	土師器	小皿	2.0	8.4~8.6	-		
318	長原道路東北地区	NG98-20	SD401	土師器	小皿	2.2	9.0	-		
319	長原道路東北地区	NG98-20	SD401	土師器	小皿	2.3	9.2	-		
320	長原道路東北地区	NG98-20	SD401	土師器	小皿	2.7	10.1	-		
321	長原道路東北地区	NG98-20	SD401	黒色土器B類	碗	5.3	15.5~15.1	6.8~6.4		
322	長原道路東北地区	NG98-20	SD401	黒色土器B類	碗	5.3	15.4	6.8		
323	長原道路東北地区	NG98-20	SD401	黒色土器B類	碗	5.5	15.0~16.0	6.5		
324	長原道路東北地区	NG98-20	SD401	黒色土器B類	碗	4.6	13.2	5.4		
325	長原道路東北地区	NG98-20	SD401	黒色土器B類	碗	(4.8)	13.8	-		
326	長原道路東北地区	NG98-20	SD401	黒色土器A類	鉢	16.5	27.0	13.6		片口?
327	長原道路東北地区	NG98-20	SD401	木製品	板	長13.9	幅5.6	厚1.0	くぎ穴	
328	長原道路東北地区	NG98-20	SD401	木製品	横櫛	長(2.9)	幅(2.2)	厚0.7		

別表2 NG98-19次調査 SX701出土の甕・壺・鉢類觀察表

種子	土壌形態	法線(cm)	口端部	全体	底面	土・色調
30	土壌砂質	表面(4.0) 砂質(4.0)	やや外反しながら、上方に開く。腹面に瘤もつ。内面はヨコハナ。	1.0mm大的の瘤を多く含む。内面灰白。	口端部のみが赤る。	
31	土壌砂質	表面(4.0) 砂質(4.0)	やや外反しながら、上方に開く。瘤はヨコナナ。	0.5mm大的の瘤を多く含む。内面灰白。	口端部から腹面にかけて1/8 厚。外側はヨコナナ。	
32	土壌砂質	表面(4.0) 砂質(4.0)	やや外反しながら、上方に開く。瘤は少しつまみ上がりで、内面は瘤底以下に下方に向う。	1.5mm大的の瘤を多く含む。内面にぶつ	口端部から腹面にかけて1/8 厚。外側はヨコナナ。	
33	土壌砂質	表面(4.0) 砂質(4.0)	外方に開く。瘤はつまみ上がり。内面はヨコナナ。外側はヨコナナ。	0.5mm大的の瘤を多く含む。内面にぶつ	口端部のみが赤る。	
34	土壌砂質	表面(4.0) 砂質(4.0)	外方に開く。瘤はつまみ上がり。内面はヨコナナ。外側はヨコナナ。	0.5mm大的の瘤を多く含む。内面灰白。	口端部から腹面にかけて1/8 厚。外側はヨコナナ。	
35	土壌砂質	表面(4.0) 砂質(4.0)	やや外反しながら外方に開く。内面はヨコナナ。外側はヨコナナ。	1.0-2.0mm大的の瘤を多く含む。内面 灰白。外側にぶつ。	口端部のみが赤る。	
36	土壌砂質	表面(4.0) 砂質(4.0)	やや外反しながら上方に開く。瘤はヨコナナ。外側はヨコナナ。	0.5mm大的の瘤を多く含む。内面灰白。	口端部のみが赤る。	
37	土壌砂質	表面(4.0) 砂質(4.0)	やや外反しながら上方に開く。瘤はヨコナナ。外側はヨコナナ。内面は瘤底以下に下方に向う。	1.0mm大的の瘤を多く含む。内面灰白色。	口端部から腹面にかけて1/8 厚。外側はヨコナナ。	
38	土壌砂質	表面(4.0) 砂質(4.0)	内面は瘤底以下に上方に開く。内面はヨコナナ。	1.0mm大的の瘤を多く含む。内面灰白色。	口端部から腹面にかけて1/8 厚。外側はヨコナナ。	
39	土壌砂質	表面(4.0) 砂質(4.0)	内面は瘤底以下に上方に開く。内面はヨコナナ。外側は瘤底以下に下方に向う。	1.0mm大的の瘤を多く含む。内面灰白色。	口端部のみが赤る。外側全体 に瘤がある。	
40	土壌砂質	表面(4.0) 砂質(4.0)	内面は瘤底以下に上方に向う。瘤はヨコナナ。外側はヨコナナ。	1.0mm大的の瘤を多く含む。内面灰白。	口端部から腹面にかけて1/8 厚。外側全体に瘤がある。	
41	土壌砂質	表面(4.0) 砂質(4.0)	内面は瘤底以下に上方に向う。瘤はヨコナナ。外側はヨコナナ。	0.5-1.0mm大的の瘤を多く含む。内面 灰白。外側は瘤底以下に瘤がある。	口端部から腹面にかけて1/8 厚。外側全体に瘤がある。	
42	土壌砂質	表面(4.0) 砂質(4.0)	瘤はヨコナナ。内面はヨコナナ。外側はヨコナナ。	0.5-1.0mm大的の瘤を多く含む。内面 灰白。外側は瘤底以下に瘤がある。	口端部から腹面にかけて1/8 厚。外側全体に瘤がある。	
43	土壌砂質	表面(4.0) 砂質(4.0)	瘤はヨコナナ。内面はヨコナナ。外側はヨコナナ。	0.5mm大的の瘤を多く含む。内面 灰白。外側は瘤底以下に瘤がある。	口端部から腹面にかけて1/8 厚。外側全体に瘤がある。	
44	土壌砂質	表面(4.0) 砂質(4.0)	瘤はヨコナナ。内面はヨコナナ。外側はヨコナナ。	0.5mm大的の瘤を多く含む。内面 灰白。外側は瘤底以下に瘤がある。	口端部のみが赤る。外側に 瘤がある。	
45	土壌砂質	表面(4.0) 砂質(4.0)	外方に開く。内面はヨコナナ。外側はヨコナナ。	0.5mm大的の瘤を多く含む。内面 灰白。外側はヨコナナ。	口端部から腹面にかけて1/8 厚。外側全体に瘤がある。	
46	土壌砂質	表面(4.0) 砂質(4.0)	外方に開く。内面はヨコナナ。外側はヨコナナ。	0.5mm大的の瘤を多く含む。内面 灰白。外側はヨコナナ。	口端部のみが赤る。外側に 瘤がある。	

登録番号	種類・固形	法線(cm)	口面積	体形		脚上・色調	備考
				外上方に強く、側面は弱い。内面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面は強く、側面はヨコナガ。		
79	土脚筋小管充填土	筋幅56 口径76	外上方に強く、側面は弱い。内面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	1.0mm×0.6mmの形状を多く含む。内面灰褐色。	全体の1/4強ある。黒斑。
80	土脚筋小管充填土	筋幅60 口径80	すこし内方に傾く。外上方に強く、側面は弱い。内面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	1.0mm×0.6mmの形状を含む。内面灰褐色。	全体にかけて1/4強ある。
81	土脚筋小管充填土	筋幅62 口径84	底が高くなる。外上方に強く、側面は弱い。内面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	1.0mm×0.6mmの形状を含む。内面灰褐色。	全体に完存する。黒斑。
82	土脚筋小管充填土	筋幅63 口径83	底が高くなる。外上方に強く、側面は弱い。内面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	1.0mm×0.6mmの形状を含む。内面灰褐色。	全体の1/4強ある。
83	土脚筋口被	筋幅14.0 口径13.1	外上方に強制的に伸びる。側面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	0.5mm×0.1mmの形状を含む。内面灰褐色。	全体の1/4強ある。
84	土脚筋口被	筋幅9.7 口径2.1	外上方に強く、側面は弱い。内面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	0.5mm×0.1mmの形状を含む。内面灰褐色。	全体の1/4強ある。
85	土脚筋口被	筋幅10.4 口径10.4	外上方に強制的に伸びる。側面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	0.5mm×0.1mmの形状を含む。内面灰褐色。	全体の1/4強ある。
86	土脚筋口被	筋幅7.3 口径14.4	外上方に強く、側面は弱い。内面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	0.5mm×0.1mmの形状を含む。内面灰褐色。	全体の1/4強ある。
87	土脚筋口被	筋幅6.8 口径6.8	外上方に強く、側面は弱い。内面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	0.5mm×0.1mmの形状を含む。内面灰褐色。	全体の1/4強ある。
88	土脚筋口被	筋幅5.5 口径10.0	外上方に強く、側面は弱い。内面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	0.5mm×0.1mmの形状を含む。内面灰褐色。	全体の1/4強ある。
89	土脚筋口被	筋幅6.7 口径11.3	外上方に強く、側面は弱い。内面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	0.5mm×0.1mmの形状を含む。内面灰褐色。	全体の1/4強ある。
90	土脚筋口被	筋幅6.2 口径11.1	外上方に強く、側面は弱い。内面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	0.5mm×0.1mmの形状を含む。内面灰褐色。	全体の1/4強ある。
91	土脚筋口被	筋幅6.1 口径11.1	外上方に強く、側面は弱い。内面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	0.5mm×0.1mmの形状を含む。内面灰褐色。	全体の1/4強ある。
92	土脚筋口被	筋幅6.1 口径11.1	すこし内方に傾ながれ上方に傾く。側面は弱く、裏面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	0.5mm×0.1mmの形状を含む。内面灰褐色。	全体にかけて1/4強ある。
93	土脚筋口被	筋幅6.0 口径11.1	外上方に強く、側面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	0.5mm×0.1mmの形状を含む。内面灰褐色。	全体の1/4強ある。
94	土脚筋	筋幅6.1 口径10.4	外上方に強く、側面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	外上方に弱く、側面はヨコナガ。	0.5mm×0.1mmの形状を含む。内面灰褐色。	全体にかけて1/4強ある。

別表3 NG98-19次調査 SX701出土の高杯銀茶表

番号	種類・形態	海拔(m)	種類	体羽組合	地上・色調	備考
脚						
108	土蜘蛛科 脚幅12.2 脚長17.8 足長10.5	地面	脚	1.0~1.5mmの歩行足を含む。 内面は脚部は白地で、頭部は白地に黒斑。 外側は黒地に白地の斑点がある。	全体が灰白色。歩行足を多く 使って體面に出す。脚先は 4mm。	
109	土蜘蛛科 脚幅2.7 脚長6.1	地面	脚	1.0~1.5mmの歩行足を含む。 内面は脚部は白地で、頭部は白地に黒斑。 外側は黒地に白地の斑点がある。	全体が灰白色。歩行 足は3mm。	
110	土蜘蛛科 脚幅6.0 脚長16.0	地面	脚	1.0~1.5mmの歩行足を含む。 内面は脚部は白地で、頭部 は白地に黒斑。	全体が灰白色。歩行足を 多く使って體面に出す。脚先 は4mm。	
111	土蜘蛛科 脚幅6.2 脚長18.4	地面	脚	1.0~1.5mmの歩行足を含む。 内面は脚部は白地で、頭部 は白地に黒斑。	全体が灰白色。歩行足を 多く使って體面に出す。脚先 は4mm。	
112	土蜘蛛科 脚幅5.7 脚長16.6	地面	脚	1.0~1.5mmの歩行足を含む。 内面は脚部は白地で、頭部 は白地に黒斑。	全体が灰白色。歩行足を 多く使って體面に出す。脚先 は4mm。	
113	土蜘蛛科 脚幅5.6 脚長16.4	地面	脚	1.0~1.5mmの歩行足を含む。 内面は脚部は白地で、頭部 は白地に黒斑。	全体が灰白色。歩行足を 多く使って體面に出す。脚先 は4mm。	
114	土蜘蛛科 脚幅12.2 脚長16.0 足長10.0	地面	脚	1.0~1.5mmの歩行足を含む。 内面は脚部は白地で、頭部 は白地に黒斑。	全体が灰白色。歩行足を 多く使って體面に出す。脚先 は4mm。	
115	土蜘蛛科 脚幅12.2 脚長14.2 足長8.6	地面	脚	1.0~1.5mmの歩行足を含む。 内面は脚部は白地で、頭部 は白地に黒斑。	全体が灰白色。歩行足を 多く使って體面に出す。脚先 は4mm。	
116	土蜘蛛科 脚幅12.0 脚長16.7	地面	脚	1.0~1.5mmの歩行足を含む。 内面は脚部は白地で、頭部 は白地に黒斑。	全体が灰白色。歩行足を 多く使って體面に出す。脚先 は4mm。	
117	土蜘蛛科 脚幅12.6 脚長16.4 足長11.2	地面	脚	1.0~1.5mmの歩行足を含む。 内面は脚部は白地で、頭部 は白地に黒斑。	全体が灰白色。歩行足を 多く使って體面に出す。脚先 は4mm。	
118	土蜘蛛科 脚幅13.3 脚長16.8 足長11.4	地面	脚	1.0~1.5mmの歩行足を含む。 内面は脚部は白地で、頭部 は白地に黒斑。	全体が灰白色。歩行足を 多く使って體面に出す。脚先 は4mm。	
119	土蜘蛛科 脚幅10.0	地面	脚	1.0~1.5mmの歩行足を含む。 内面は脚部は白地で、頭部 は白地に黒斑。	全体が灰白色。歩行足を 多く使って體面に出す。脚先 は3mm。	
120	土蜘蛛科 脚幅11.9	地面	脚	1.0~1.5mmの歩行足を含む。 内面は脚部は白地で、頭部 は白地に黒斑。	全体が灰白色。歩行足を 多く使って體面に出す。脚先 は3mm。	
121	土蜘蛛科 脚幅10.0	地面	脚	1.0~1.5mmの歩行足を含む。 内面は脚部は白地で、頭部 は白地に黒斑。	全体が灰白色。歩行足を 多く使って體面に出す。脚先 は3mm。	
122	土蜘蛛科 脚幅12.0	地面	脚	1.0~1.5mmの歩行足を含む。 内面は脚部は白地で、頭部 は白地に黒斑。	全体が灰白色。歩行足を 多く使って體面に出す。脚先 は3mm。	

試験番号	試験・測定	法口(m)	開閉部合	鉛土・色調	備考
123 土砂路条件 目口14.8 口目20.6 底口2.5	底部は大きく穂やかに開く。底部の表面はヘラ刃形のまま。内面は 穂根部に軽く筋模様を有する。底部の表面は外反し、底部をつ くり。内面は2段の斜状模様のものあと、ヨコナナ。そのあと ヨコハ。外側刃ヘラミチ。底部は表面にコロナダ。斜状部に1方向へヘ ラギ。斜状部に2方向の凹凸スカラップ。	開上地に軽く筋模様を ついて底板を含む。内面 は0.5mm次の部分を含む。外 面は0.5mm次の部分を含む。 底板は内面に斜筋 模様がある。	全体が生地とする。斜状模 様部はヘラミチ。外側刃部 はヨコハ。	全體が生地とする。斜狀模 樣部はヨコハ。	
124 土砂路条件 目口16.4 口目22.5 底口3.5	底部は大きく穂やかに開く。底部は外反し、底部に斜 筋模様がある。内面は斜状部のあと、ヨコナナ。そのあと ヨコハ。外側刃ヘラミチ。底部は表面にコロナダ。斜状部に2方向へヘ ラギ。斜状部に3方向の凹凸スカラップ。	開上地に軽く筋模様を ついて底板を含む。内面 は0.5mm次の部分を含む。 底板は内面に斜筋 模様がある。	全體が生地とする。斜狀模 樣部はヨコハ。	全體が生地とする。斜狀模 樣部はヨコハ。	
125 土砂路条件 目口12.9 口目22.3	底部は大きく穂やかに開く。底部は外反し、底部に斜 筋模様がある。内面は斜状部のあと、ヨコナナ。そのあと ヨコハ。外側刃ヘラミチ。底部は表面にコロナダ。斜状部に2方向へヘ ラギ。斜状部に3方向の凹凸スカラップ。	開上地に軽く筋模 様をついて底板を含む。 内面は0.5mm次の部分を含む。 底板は内面に斜筋 模様がある。	斜筋模様が完全である。 斜狀模樣部はヨコハ。	斜筋模樣が完全である。 斜狀模樣部はヨコハ。	
126 土砂路条件 目口2.2 口目22.4	底部は大きく穂やかに開く。底部は外反し、底部に斜 筋模様がある。内面は斜状部のあと、ヨコナナ。そのあと ヨコハ。外側刃ヘラミチ。底部は表面にコロナダ。斜状部に2方向へヘ ラギ。斜状部に3方向の凹凸スカラップ。	開上地に軽く筋模 様をついて底板を含む。 内面は0.5mm次の部分を含む。 底板は内面に斜筋 模様がある。	斜筋模樣部が完全である。 斜狀模樣部はヨコハ。	斜筋模樣部が完全である。 斜狀模樣部はヨコハ。	
127 土砂路条件 目口22.4	底部は大きく穂やかに開く。底部は外反し、底部に斜 筋模様がある。内面は斜状部のあと、ヨコナナ。そのあと ヨコハ。外側刃ヘラミチ。底部は表面にコロナダ。斜状部に2方向へヘ ラギ。斜状部に3方向の凹凸スカラップ。	開上地に軽く筋模 様をついて底板を含む。 内面は0.5mm次の部分を含む。 底板は内面に斜筋 模様がある。	斜筋模樣部が完全である。 斜狀模樣部はヨコハ。	斜筋模樣部が完全である。 斜狀模樣部はヨコハ。	
128 土砂路条件 目口21.6	底部は大きく穂やかに開く。底部は外反し、底部に斜 筋模様がある。内面は斜状部のあと、ヨコナナ。そのあと ヨコハ。外側刃ヘラミチ。底部は表面にコロナダ。斜状部に2方向へヘ ラギ。斜状部に3方向の凹凸スカラップ。	開上地に軽く筋模 様をついて底板を含む。 内面は0.5mm次の部分を含む。 底板は内面に斜筋 模様がある。	斜筋模樣部が完全である。 斜狀模樣部はヨコハ。	斜筋模樣部が完全である。 斜狀模樣部はヨコハ。	
129 土砂路条件 目口4.6	底部は大きく穂やかに開く。底部は外反し、底部に斜 筋模様がある。内面は斜状部のあと、ヨコナナ。そのあと ヨコハ。外側刃ヘラミチ。底部は表面にコロナダ。斜状部に2方向へヘ ラギ。斜状部に3方向の凹凸スカラップ。	開上地に軽く筋模 様をついて底板を含む。 内面は0.5mm次の部分を含む。 底板は内面に斜筋 模様がある。	斜筋模樣部が完全である。 斜狀模樣部はヨコハ。	斜筋模樣部が完全である。 斜狀模樣部はヨコハ。	
130 土砂路条件 目口5.2 口目21.4 底口2.8	底部は大きく穂やかに開く。底部は外反し、底部に斜 筋模様がある。内面は斜状部のあと、ヨコナナ。そのあと ヨコハ。外側刃ヘラミチ。底部は表面にコロナダ。斜状部に2方向へヘ ラギ。斜状部に3方向の凹凸スカラップ。	開上地に軽く筋模 様をついて底板を含む。 内面は0.5mm次の部分を含む。 底板は内面に斜筋 模様がある。	斜筋模樣部が完全である。 斜狀模樣部はヨコハ。	斜筋模樣部が完全である。 斜狀模樣部はヨコハ。	
131 土砂路条件 目口5.3 口目21.4	底部は大きく穂やかに開く。底部は外反し、底部に斜 筋模様がある。内面は斜状部のあと、ヨコナナ。そのあと ヨコハ。外側刃ヘラミチ。底部は表面にコロナダ。斜状部に2方向へヘ ラギ。斜状部に3方向の凹凸スカラップ。	開上地に軽く筋模 様をついて底板を含む。 内面は0.5mm次の部分を含む。 底板は内面に斜筋 模様がある。	斜筋模樣部が完全である。 斜狀模樣部はヨコハ。	斜筋模樣部が完全である。 斜狀模樣部はヨコハ。	
132 土砂路条件 目口7.9 口目21.0	底部は大きく穂やかに開く。底部は外反し、底部に斜 筋模様がある。内面は斜状部のあと、ヨコナナ。そのあと ヨコハ。外側刃ヘラミチ。底部は表面にコロナダ。斜状部に2方向へヘ ラギ。斜状部に3方向の凹凸スカラップ。	開上地に軽く筋模 様をついて底板を含む。 内面は0.5mm次の部分を含む。 底板は内面に斜筋 模様がある。	斜筋模樣部が完全である。 斜狀模樣部はヨコハ。	斜筋模樣部が完全である。 斜狀模樣部はヨコハ。	

番号	種類	基準	番号	種類	基準	番号	種類	基準
140	土壌毒害糞	基準(45) 目口16 送達865	141	土壌毒害糞	基準(45) 目口16 送達865	142	土壌毒害糞	基準(45) 目口16 送達865
150	土壌毒害糞	基準(45) 目口16 送達865	151	土壌毒害糞	基準(45) 目口16 送達865	152	土壌毒害糞	基準(45) 目口16 送達865
153	土壌毒害糞	基準(45) 目口16 送達865	154	土壌毒害糞	基準(45) 目口16 送達865	155	土壌毒害糞	基準(45) 目口16 送達865
156	土壌毒害糞	基準(45) 目口16 送達865	157	土壌毒害糞	基準(45) 目口16 送達865	158	土壌毒害糞	基準(45) 目口16 送達865
159	土壌毒害糞	基準(45) 目口16 送達865	160	土壌毒害糞	基準(45) 目口16 送達865	161	土壌毒害糞	基準(45) 目口16 送達865
162	土壌毒害糞	基準(45) 目口16 送達865	163	土壌毒害糞	基準(45) 目口16 送達865	164	土壌毒害糞	基準(45) 目口16 送達865

種類	学名	分類	特徴	出土・色調	年代
圓筒	165 土器器軸 扇形 細身(4)	絹束	表面は繊維がなく、裏面の繊維はハラ切りのまま。内面は柱状筋に2枚の内側にハサケのとくら。外側に2枚の内側にハサケのとくら。柱・横筋間に3方の内筋を有す。	0.5mm大的部分を含む。内面にぶい青色。外側にベニ色。	縄織のふみ穴である。
	166 土器器軸 扇形 細身(5)	絹束	表面は繊維がなく、裏面の繊維はコナアで仕上げるが、裏面の面ははうりで仕上げる。内筋は柱状筋に2枚の内側にハサケ。横筋間に3方の内筋を有す。	0.5mm大的部分を含む。10mm大的部分を含む。内面にぶい青色。外側にベニ色。	縄織のふみ穴である。
	167 土器器軸 扇形 細身(6)	絹束	表面は繊維がなく、裏面の繊維は柱状筋に2枚の内側にハサケ。外筋は柱状筋に2枚の内側にハサケ。柱・横筋間に3方の内筋を有す。	0.5mm大的部分を含む。内面にぶい青色。外側にベニ色。	縄織のふみ穴である。
	168 土器器軸 扇形 細身(7)	絹束	表面は繊維がなく、裏面の繊維は柱状筋に2枚の内側にハサケ。横筋間に3方の内筋を有す。	0.5mm大的部分を含む。内面にぶい青色。外側にベニ色。	縄織のふみ穴である。
	169 土器器軸 扇形 細身(8)	絹束	表面は繊維がなく、裏面の繊維は柱状筋に2枚の内側にハサケ。外筋は柱状筋に2枚の内側にハサケ。柱・横筋間に3方の内筋を有す。	0.5mm大的部分を含む。内面にぶい青色。外側にベニ色。	縄織のふみ穴である。
	170 土器器軸 扇形 細身(9)	絹束	表面は繊維がなく、裏面の繊維は柱状筋に2枚の内側にハサケ。外筋は柱状筋に2枚の内側にハサケ。柱・横筋間に3方の内筋を有す。	0.5mm大的部分を含む。内面にぶい青色。外側にベニ色。	縄織のふみ穴である。
	171 土器器軸 扇形 細身(10)	絹束	表面は繊維がなく、裏面の繊維は柱状筋に2枚の内側にハサケ。外筋は柱状筋に2枚の内側にハサケ。柱・横筋間に3方の内筋を有す。	0.5mm大的部分を含む。内面にぶい青色。外側にベニ色。	縄織のふみ穴である。
	172 土器器軸 扇形 細身(10)	絹束	表面は繊維がなく、裏面の繊維は柱状筋に2枚の内側にハサケ。外筋は柱状筋に2枚の内側にハサケ。柱・横筋間に3方の内筋を有す。	0.5mm大的部分を含む。内面にぶい青色。外側にベニ色。	縄織のふみ穴である。
	173 土器器軸 扇形 細身(27)	絹束	表面は繊維がなく、裏面の繊維は柱状筋に2枚の内側にハサケ。外筋は柱状筋に2枚の内側にハサケ。柱・横筋間に3方の内筋を有す。	0.5mm大的部分を含む。内面にぶい青色。外側にベニ色。	縄織のふみ穴である。
	174 土器器軸 扇形 細身(26)	絹束	表面は繊維がなく、裏面の繊維は柱状筋に2枚の内側にハサケ。外筋は柱状筋に2枚の内側にハサケ。柱・横筋間に3方の内筋を有す。	0.5mm大的部分を含む。内面に白色。外側に白色。	縄織のふみ穴である。
	175 土器器軸 扇形 細身(11)	絹束	表面は繊維がなく、裏面の繊維は柱状筋に2枚の内側にハサケ。外筋は柱状筋に2枚の内側にハサケ。柱・横筋間に3方の内筋を有す。	0.5mm大的部分を含む。内面に白色。外側に白色。	縄織のふみ穴である。
	176 土器器軸 扇形 細身(11)	絹束	表面は繊維がなく、裏面の繊維は柱状筋に2枚の内側にハサケ。外筋は柱状筋に2枚の内側にハサケ。柱・横筋間に3方の内筋を有す。	0.5mm大的部分を含む。内面に白色。外側に白色。	縄織のふみ穴である。
	177 土器器軸 扇形 細身(11)	絹束	表面は繊維がなく、裏面の繊維は柱状筋に2枚の内側にハサケ。外筋は柱状筋に2枚の内側にハサケ。柱・横筋間に3方の内筋を有す。	0.5mm大的部分を含む。内面に白色。外側に白色。	縄織のふみ穴である。
	178 土器器軸 扇形 細身(2)	絹束	表面は繊維がなく、裏面の繊維は柱状筋に2枚の内側にハサケ。外筋は柱状筋に2枚の内側にハサケ。柱・横筋間に3方の内筋を有す。	0.5mm大的部分を含む。内面に白色。外側に白色。	縄織のふみ穴である。
	179 土器器軸 扇形 細身(2)	絹束	表面は繊維がなく、裏面の繊維は柱状筋に2枚の内側にハサケ。外筋は柱状筋に2枚の内側にハサケ。柱・横筋間に3方の内筋を有す。	0.5mm大的部分を含む。内面に白色。外側に白色。	縄織のふみ穴である。

別表4 NG98-20次調査 SX702出土の甕・壺・鉢標本表

番号	器種・断形	高さ(cm)	口径(cm)	口縁形	体质	底土・底面	備考
268	土師器小壺丸土唇 口径7.3 外径10.3	高さ6.1 口径6.1	今や窓く・上方に直線的に張く窓く。腹部は丸い。外腹はヨコナラ。内腹はヨコハ。	直線形。内腹はヨビナガのあと、腹部と下腹部に張く窓方向へのカバナ。ヘビカズリ。外縁は下部特にアハナ、下半部特にヨコナラ。	0.5mm大的の砂粒を含む。内・外縁にない。	全体の2/3ほど。	
259	土師器小壺丸土唇 口径6.0 外径11.3	高さ6.0 口径6.0	今や内腹がやや外方に傾く。腹部は丸い。内腹はヨコナラ。外腹はヨコナラ。内腹はヨビナガのあと、ヨコナラ。外縁は直線的。	直線形。内腹はヨビナガのあと、ヨコナラ。外縁は直線的。	1.0mm大的の砂粒を含む。内・外縁にない。	全体の砂粒の片の半分。	
260	土師器小壺丸土唇 口径10.8	高さ6.0 口径10.8	今や内腹がやや外方に傾く。腹部は丸い。内腹はヨコナラ。外腹はヨコナラ。	直線形。内腹はヨビナガのあと、ヨコナラ。外縁は直線的。	1.0mm大的の砂粒を含む。内・外縁にない。	口縁のみが残る。	
261	土師器小壺丸土唇 口径9.0	高さ6.1 口径9.0	今や内腹がみに外方に傾く。腹部は丸い。内・外腹ヨコナラ。	直線形。内腹はヨビナガのあと、ヨコナラ。外縁は直線的。	1.0mm大的の砂粒を含む。内・外縁にない。	口縁のみが残る。	
262	土師器小壺丸土唇 口径9.3	高さ6.1 口径9.3	外上方に窓く・横筋はない。内腹はヨビナガのあとヨコナラ。外縁はヨコナラ。	直線形。内腹はヨビナガのあと、ヨコナラ。外縁は直線的。	1.0mm大的の砂粒を含む。内・外縁にない。	口縁のみが残る。	
263	土師器斜 口径10.0	高さ4.7 口径10.0	全体の最大幅よりも大きくな板する。内・外腹ともヨコナラ。	内腹は直線的。外腹はヨコナラ。内腹はヨビナガのあと、ヨコナラ。	0.5mm大的の砂粒を含む。内・外縁にない。	全体の1/3ほど。底盤は薄い。	
266	土師器斜 口径15.0	高さ9.5 口径15.0	上方に底筋的に窓く・横筋はない。内腹はヨビナガのあと、ヨコナラ。	内腹は直線的以下に横方向へのカタツミ。外腹は直線的以下に横方向へのカタツミ。外縁はヨコナラ。	1.0mm大的の砂粒を多く含む。内・外縁にない。	口縁のみが残る。	
269	土师器斜 口径16.0	高さ4.1 口径16.0	上方に底筋的に窓く・横筋はない。内腹はヨビナガのあと、ヨコナラ。	内腹は直線的以下に横方向へのカタツミ。外腹はヨコナラ。	1.5mm大的の砂粒を多く含む。内・外縁にない。	口縁のみが残る。	
270	土师器斜 口径13.4	高さ9.0 口径13.4	外上方に窓く・横筋はないヨコナラ。外腹はヨコナラ。	内腹は直線的以下に横方向へのカタツミ。外腹はヨコナラ。	1.5mm大的の砂粒を多く含む。内・外縁にない。	底盤から底盤にかけて2/3ほど残る。	
271	土师器斜 口径13.0	高さ5.4 口径13.0	外上方に窓く・横筋はないヨコナラ。外腹はヨコナラ。	内腹は直線的以下に横方向へのカタツミ。外腹はヨコナラ。	1.5mm大的の砂粒を多く含む。内・外縁にない。	口縁のみが残る。	
272	土师器斜 口径15.5	高さ5.1 口径15.5	外上方に窓く・横筋はないヨコナラ。外腹はヨコナラ。	内腹は直線的以下に横方向へのカタツミ。外腹はヨコナラ。	1.0mm大的の砂粒を含む。内・外縁にない。	口縁から底盤にかけて1/6ほど残る。	
273	土师器斜 口径17.0	高さ3.2 口径17.0	外上方に窓く・横筋はないヨコナラ。外腹はヨコナラ。	内腹は直線的以下に横方向へのカタツミ。外腹はヨコナラ。	1.0mm大的の砂粒を含む。内・外縁にない。	口縁のみが残る。	
274	土师器斜 口径13.0	高さ6.1 口径13.0	外上方に伸びる。輪筋は内腹が厚く、所三・角形となる。内腹はヨビナガのあとヨコナラ。	内腹は直線的以下に口縁まで付ける。外腹はヨコナラ。	1.0mm大的の砂粒を含む。内・外縁にない。	口縁のみが残る。	
275	土师器斜 口径14.0	高さ6.1 口径14.0	外上方に伸びる。輪筋は内腹が厚く、所三・角形となる。内腹はヨビナガのあとヨコナラ。	内腹は直線的以下に口縁まで付ける。外腹はヨコナラ。	1.0mm大的の砂粒を含む。内・外縁にない。	口縁のみが残る。	
276	土师器斜 口径16.0	高さ6.1 口径16.0	外上方に伸びる。輪筋は内腹が厚く、所三・角形となる。内腹はヨビナガのあとヨコナラ。	内腹は直線的以下に口縁まで付ける。外腹はヨコナラ。	0.5mm大的の砂粒を含む。内・外縁にない。	口縁のみが残る。	
277	土师器斜 口径16.0	高さ6.1 口径16.0	外上方に伸びる。輪筋は内腹が厚く、所三・角形となる。内腹はヨビナガのあとヨコナラ。	内腹は直線的以下に口縁まで付ける。外腹はヨコナラ。	1.0mm大的の砂粒を含む。内・外縁にない。	口縁のみが残る。	
278	土师器斜 口径17.0	高さ6.1 口径17.0	外上方に伸びる。輪筋は内腹が厚く、所三・角形となる。内腹はヨビナガのあとヨコナラ。	内腹は直線的以下に口縁まで付ける。外腹はヨコナラ。	1.0mm大的の砂粒を含む。内・外縁にない。	口縁のみが残る。	

別表5 NG98-20次調査 SX702出土の高杯観察表

品種名	学名	原産地	花被片	葉被片	葉被		花被合	花被合	花被合
					外側	内側			
新星	新星	新星	新星	新星	新星	新星	新星	新星	新星
279 土留野高杆	新星	新星(0m)	新星(0.7m)	新星(0.7m)	新星(0.7m)	新星(0.7m)	新星	新星	新星
280 土留野高杆	新星	新星(0.7m)	新星(1.4m)	新星(1.4m)	新星(1.4m)	新星(1.4m)	新星	新星	新星
281 土留野高杆	新星	新星(1.4m)	新星(2.1m)	新星(2.1m)	新星(2.1m)	新星(2.1m)	新星	新星	新星
282 土留野高杆	新星	新星(2.1m)	新星(2.8m)	新星(2.8m)	新星(2.8m)	新星(2.8m)	新星	新星	新星
283 土留野高杆	新星	新星(2.8m)	新星(3.5m)	新星(3.5m)	新星(3.5m)	新星(3.5m)	新星	新星	新星
284 土留野高杆	新星	新星(3.5m)	新星(4.2m)	新星(4.2m)	新星(4.2m)	新星(4.2m)	新星	新星	新星
285 土留野高杆	新星	新星(4.2m)	新星(4.9m)	新星(4.9m)	新星(4.9m)	新星(4.9m)	新星	新星	新星
286 土留野高杆	新星	新星(4.9m)	新星(5.6m)	新星(5.6m)	新星(5.6m)	新星(5.6m)	新星	新星	新星
287 土留野高杆	新星	新星(5.6m)	新星(6.3m)	新星(6.3m)	新星(6.3m)	新星(6.3m)	新星	新星	新星
288 土留野高杆	新星	新星(6.3m)	新星(7.0m)	新星(7.0m)	新星(7.0m)	新星(7.0m)	新星	新星	新星
289 土留野高杆	新星	新星(7.0m)	新星(7.7m)	新星(7.7m)	新星(7.7m)	新星(7.7m)	新星	新星	新星
290 土留野高杆	新星	新星(7.7m)	新星(8.4m)	新星(8.4m)	新星(8.4m)	新星(8.4m)	新星	新星	新星
291 土留野高杆	新星	新星(8.4m)	新星(9.1m)	新星(9.1m)	新星(9.1m)	新星(9.1m)	新星	新星	新星
292 土留野高杆	新星	新星(9.1m)	新星(9.8m)	新星(9.8m)	新星(9.8m)	新星(9.8m)	新星	新星	新星
293 土留野高杆	新星	新星(9.8m)	新星(10.5m)	新星(10.5m)	新星(10.5m)	新星(10.5m)	新星	新星	新星
294 土留野高杆	新星	新星(10.5m)	新星(11.2m)	新星(11.2m)	新星(11.2m)	新星(11.2m)	新星	新星	新星
295 土留野高杆	新星	新星(11.2m)	新星(12.0m)	新星(12.0m)	新星(12.0m)	新星(12.0m)	新星	新星	新星

引 用・参 考 文 献

大阪市文化財協会1978、「長原遺跡発掘調査報告」

- 1979a、「大阪市下水道管渠工事に伴う平野区所在遺跡発掘調査(NG12次)報告書」
1979b、「大阪市下水道発進口建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG16次)報告書」
1979c、「関西電力管路埋設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG17)略報」
1980a、「大阪市下水管渠築造工事(押込口)に伴う長原遺跡発掘調査(NG80-1)略報」
1980b、「八尾~富田林局間同軸ケーブル方式工事(土木)に伴う長原遺跡発掘調査(NG80-2)略報」
1980c、「大阪市下水管渠築造工事(到達窪坑)に伴う長原遺跡発掘調査計画書」
1983a、「下水工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-1)略報」
1983b、「大阪市住宅供給公社長原六反用地ボーリング調査(NG83-5)略報」
1983c、「大阪市平野区長吉出戸における下水道工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-22)略報」
1983d、「長原出戸六反地区幹線下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-43)略報」
1983e、「仲東産業店舗建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-54)略報」
1983f、「関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-65)略報」
1984a、「六反下水管渠推進工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-4)略報」
1984b、「長吉出戸地区下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-18)略報」
1984c、「地中送電線工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-49)略報」
1984d、「関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-86)略報」
1985、「大阪市土木局カルバート建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG85-17)略報」
1988、「(株)ビーバーハウスによる建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG88-6)略報」
1995、「大阪市教育委員会によるクラフトパーク建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG95-77)略報」
1996、「平成8年度大阪市都市整備局による長吉六反第1住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG96-79)略報」
1997、「平成9年度大阪市都市整備局による長吉六反第1住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG97-41)略報」
1998、「長原遺跡東部地区発掘調査報告」I
1999a、「長原遺跡東部地区発掘調査報告」II
1999b、「平成11年度長吉東部地区土地区画整理事業施工に伴う長原遺跡発掘調査(その1)(NG99-19)完了報告書」
1999c、「平成11年度長吉東部地区土地区画整理事業施工に伴う長原遺跡発掘調査(その2)(NG99-41)完了報告書」
2000、「長原遺跡東部地区発掘調査報告」III
2001、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」XVI

大阪市文化財協会・川崎地質株式会社(未公表a)、「大阪市建設局による建設工事に伴う宰相山遺跡発掘調査(SS95-2)に係る花粉・珪藻・樹種・種子同定および火山灰分析作業報告書」(内部文書)、pp.67

- 大阪市文化財協会・川崎地質株式会社(未公表b)、「喜連東遺跡発掘調査(KR94-7)に係る花粉・珪藻分析作業報告書」(内部文書)、pp.59
- 大阪府教育委員会・大阪府埋蔵文化財協会1995、「陶邑・大庭寺遺跡」IV
大阪文化財センター1980、「龟井・城山」
1986、「城山」その1~3
- 株式会社古環境研究所1997、「鬼虎川遺跡第35-1次調査の自然科学分析」: 大阪市文化財協会編「鬼虎川遺跡第35-1次発掘調査報告」、pp.49-103
- 川崎地質株式会社1994、「大場遺跡の花粉・珪藻分析および火山灰分析」: 大阪府埋蔵文化財協会編「日根野荘総合調査報告書」、pp.123-149
- 川崎地質株式会社1995、「西大井遺跡(93年度調査)における花粉・珪藻分析」: 大阪府文化財調査研究センター調査報告書1、pp.149-174
- 川崎地質株式会社1996、「森の宮遺跡発掘調査(MR94-8)における花粉・珪藻分析」: 大阪市文化財協会編「大阪市中央区森の宮遺跡II-中央労働総合庁舎新工事に伴う発掘調査報告書」、pp.175-192
- 京崎覚1992、「古墳時代後半期における土師器の器種構成」: 大阪市文化財協会編「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」III、pp.187-201
- 1993、「古墳時代後半期の土器の変遷」: 大阪市文化財協会編「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」V、pp.269-276
- 古代の土器研究会1992、「古代の土器1都城の土器集成」
小山正忠・竹原秀雄1967、「新版 標準土色帖」 日本色研事業株式会社
- 佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」: 大阪市文化財協会編「長原遺跡発掘調査報告」V、pp.102-114
- 佐原真1968、「近畿地方」: 「弥生土器集成」本編2 東京堂出版、pp.53-72
- 鈴木秀典1982、「瓦器焼の編年」: 大阪市文化財協会編「長原遺跡発掘調査報告」II、pp.278-282
- 田中清美1999、「SE703出土律式系土器と土師器の編年的位置づけ」: 大阪市文化財協会編「長原遺跡発掘調査報告」VI
- 田辺昭三1981、「須恵器大成」角川書店
- 趙哲濟1995、「本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語」: 大阪市文化財協会編「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」IV、pp.41-44
- 1999、「海から平野へ」: 地学団体研究会大阪支部編「台地のおいたち」、pp.147-166
- 2001、「長原遺跡の標準層序」: 大阪市文化財協会編「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」XVI
- 寺沢薰1986、「論考 犬内古式土師器の編年と二、三の問題」: 「矢部遺跡」 奈良県立橿原考古学研究所
- 那須孝悌・柳野博幸1980、「縄文時代の海成層について」: 大阪文化財センター編「龟井・城山」、pp.25
- 奈良国立文化財研究所1976、「平城宮発掘調査報告書」 VI 奈良国立文化財研究所学報第26号
- 1978、「川原寺西南部の調査」: 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告書」 II 奈良国立文化財研究所学報第31号
- 原口正三・田中琢・田辺昭三・佐原真1962、「船橋遺跡の遺物の研究」(II) 平安学園考古学クラブ
- 古谷正和1979、「大阪周辺地域におけるウルム氷河期以降の森林植生変遷」: 「第四紀研究」18、pp.121-141
- 八尾南遺跡調査会1981、「八尾南遺跡」
- 米田敏幸1991、「土師器の編年1、近畿」: 「古墳時代の研究」第6卷 雄山閣
- 渡辺正巳1995a、「花粉分析法」: 「考古学ライブリー-65. 考古資料分析法」 ニュー・サイエンス社、pp.84-85
- 渡辺正巳1995b、「珪藻分析法」: 「考古学ライブリー-65. 考古資料分析法」 ニュー・サイエンス社、pp.86-87

あとがき

長原遺跡東北地区の本格的な発掘調査も7年目を迎え、ここに4冊目の報告書を上梓することができた。これまで行ってきた10件余りの調査は地区全体から見るとわずかな面積であるが、調査するごとに遺跡は次々と新たな情報を与えてくれる。しかし、その一方で我々は情報の出現に追いついているのだろうか。発掘はやり直しがきかない一度きりの実験である。調査・研究を行う者は、あふれるほどの情報の中から真実を正しく理解するために常に基本に立ち返り、恐懼して取り組む必要があろう。

末筆ながら、本書を成すにあたり関係各位から多大なご協力を賜った。記して深謝の意を表したい。また、今後とも文化財保護と当協会事業へのご理解とご支援を賜るようお願ひする次第である。

(趙 哲済)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

- A AT火山灰 11
M MT15型式 10
T TG232(型式) 34
TK23型式 10, 71, 73
TK47型式 53
TK209型式 10, 48, 59, 73
TK216型式 53, 70
あ 飛鳥I 59
飛鳥II 59
い 生駒西遺産 22, 43, 44, 59
伊万里焼 17, 45
う 白玉 29, 32, 53, 65, 68
か 瓦器 9, 17, 45, 48, 57, 76
瓦質土器 9, 17
片口 76
滑石 29, 32, 44, 68, 89
花粉・珪藻分析 45, 79, 95, 100
唐津焼
鞋石 56, 61
乾瘦 52, 55, 76
韓式系土器 6, 92
き 摺口縁 36, 38, 59, 90, 93
北白川C式 11
北白川II~IV式 10
畿内第I様式 10, 68
畿内第II様式 10
畿内第IV様式 10
畿内第V様式 36, 59, 71
京焼 17, 45
く クサビ 59
櫛先刺突文 70
け 哇畔 17, 48, 53, 89, 92
こ 小型九底壺 30, 37, 65, 72, 90, 92
黒色土器 19, 48, 57
小里 74
- 昆蟲化石 20
さ 阪手火山灰 11, 56
里木II式 11
サヌカイト 8, 54, 56, 59
し 滋賀里IV式 10
信楽焼 17
構 3
自然流路 71, 100
庄内式 34, 44
繩文海進 6, 9, 76, 85, 95, 100
初期須恵器 6, 34, 44, 92
植物遺体 10, 11, 20~22, 53, 54
56, 64; 71, 73
す 水田 4, 6, 9, 10, 89, 90, 92
100
せ 製塙土器 21, 29, 32, 42, 48, 53,
59, 65, 68
生痕化石 8, 11, 55, 56, 76, 95
石器製作跡 4, 6
瀬戸焼 45
た 高師小僧 20
堅穴式住居 8, 61, 77
炭化米 21, 30, 89
ち 沖積層 5, 8, 9, 11, 17, 22, 45
55
直口壺 31, 38, 92
て 低位段丘 5, 8, 11, 57, 95
「て」字口縁皿 74
と 砥石 43, 48, 59
土鍤 43
土製品 21, 32, 43
土壤状遺構 7, 8, 20~22, 24, 27
44, 53, 63~65, 76, 89
90, 92, 100
長原式土器 10, 21, 22, 44, 54, 59

な 長原式土器	10, 21, 22, 44, 54, 59	平安時代Ⅳ期	57
に 二重口縁	30, 36, 90, 92	平安神宮火山灰	11, 56
二枚貝化石	20	平城宮土器Ⅲ	59
は 刺片	4, 8, 54, 59, 61	ヘラ記号	37, 71
	籠	方形周溝墓	10
ふ 船橋遺跡O-I	92	墨書	59
船橋遺跡O-II	92	据立柱建物	4
船元Ⅱ式	11	ま 勾玉	29, 32
踏込み	17, 19~21, 23, 27, 45	も 木製品	20, 22, 31, 32, 44, 69
	48, 53, 54, 69, 73, 89		71, 76
布留式	44, 92	よ 横大路火山灰	11, 56, 95
へ 平安時代Ⅱ期	57	横攬	76
平安時代Ⅲ期	76		

〈地名・遺跡名など〉

あ 跡部遺跡	5	こ 古河内湾	76, 84, 85, 87, 88, 95
い 生駒山地	84, 85		100
う 上町台地	84	さ 宰相山遺跡	84, 85
瓜破遺跡	6	し 津川廃寺	5
瓜破台地	5	た 太子堂遺跡	5
お 大庭寺遺跡	34	竹湊遺跡	5
か 亀井遺跡	5, 95	な 長原遺跡	1, 3~6, 9, 10, 15, 45 79, 84, 86, 87, 90, 92 95
河内台地	5	に 西大井遺跡	84
河内平野	9, 84	も 森の宮遺跡	84
き 鬼虎川遺跡	84, 95	や 八尾南遺跡	5, 92
木の本遺跡	5	八尾南遺跡SE21	92
旧東除川	5	八尾南遺跡SE26	92
久宝寺遺跡	5		
喜連東遺跡	6, 84, 85		

**Archaeological Reports
of the
Eastern Sector of Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume IV

A Report of Excavations
Prior to the Development of the Eastern Sector of the Nagayoshi Area
in 1998

March 2001

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

- SB : Building**
- SD : Ditch**
- SE : Well**
- SK : Pit**
- SP : Posthole**
- SX : Other feartures**

CONTENTS

Foreword

Explanatory Notes

Chapter I Excavation of northeastern sector of the Nagahara site	1
S.1 Background and location	1
1) Background of excavation	1
2) Geographical setting and historical background	5
S.2 Progress and outline of research	7
1) NG98-19	7
2) NG98-20	7
 Chapter II The standard stratigraphy of the northeastern sector of the Nagahara site	 9
1) Upper Alluvium	9
2) Middle Alluvium	11
3) Lower Alluvium	11
4) Lower Terrace Formation	11
 Chapter III Investigation results	 15
S.1 NG98-19	15
1) Strata and finds	15
2) Features and finds of the Yayoi Period	23
3) Features and finds of the Kofun Period	24
4) Conclusion	44
S.2 NG98-20	45
1) Strata and finds	45
2) Features and finds of the Yayoi Period	61
3) Features and finds of the Middle Kofun Period	61
4) Features and finds of the Late Kofun Period	72
5) Features and finds of the Heian and Kamakura Period	73
6) Conclusion	76
 Chapter IV Examination of the features and finds	 79
S.1 Pollen and diatom analysis at the northeastern sector of the Nagahara site	79
1) Introduction	79
2) Sampling	79
3) Methodology and results	80
4) Pollen analysis	80
5) Diatom analysis	82
6) Comparative study with former results	84
7) Pollen analysis and volcanic ash	84
8) Changes of the palaeo-environment	85
9) Conclusion	88

S.2 The mound features and chronological study of the excavated pottery	89
1) The mound features	89
2) Pottery from SX701 and SX702	90
3) Chronological study of the pottery from SX701	92
4) Conclusion	92
 Chapter V Summary	95
1) The Jomon Period	95
2) The Yayoi to the Middle Kofun Period	100
3) The Late Kofun Period and later	100
 Tables	101
 References and Bibliography	121
 Postscript/Index	
English Summary	
Reference Card	

ENGLISH SUMMARY

Outline and progress of the research

This volume details the results of excavations undertaken at the northeastern sector of the Nagahara site in 1998 prior to land rezoning in Eastern Nagayoshi, situated in south-eastern part of Osaka City. Two excavations, NG98-19, 20 in the eastern sector of the planned sector for land rezoning, were carried out between July 1998 and January 1999, totaling approximately 588 square meters.

At research area 98-20, investigation was carried out on soil 8m below the present surface. With the results of pollen/diatom analysis, the environmental/historical changes in the north-eastern sector of the Nagahara site from the Jomon to the Asuka period were clarified.

Following is a summary of the main results.

Results of the investigation

1. The Jomon period

The coast line of the Jomon period marine transgression and the change of sea levels during the Jomon period has been clarified. The Jomon period high tide mark for the investigated area has been found at approximately TP +2.8m(TP:Tokyo.Peil), this may have been either the inner most point of the former Kawachi Bay, or at the mouth of a small stream. The fossilized impressions of living creatures were found at TP +2.6m. Similar fossils had previously been found at NG97-41, 52 from TP +2.6m to 2.8m, and so the fossils are widely distributed around this area. There are two types of fossils and they are similar in form to a crab nesting-hole, and so we can assume that this area was close to the water at that time. The results of the pollen/diatom analysis also support this assumption. The strata from which the fossils were recovered also contained Yoko-ojoji volcanic ash (Akahoya volcanic ash). Based on this, the fossils have been dated to the Initial Jomon period, and therefore correlate to the time of the Jomon period marine transgression. It is therefore highly possible that these fossils indicate the position of the coastline at that time. In previous investigations at the Kitoragawa and Kamei sites, the high tide mark of the former Kawachi Bay, for this period, was determined at approximately TP +2.0m. The current result of TP +2.8m is not unreasonable.

Strata Beds 12 to 9 consist of alternating bands of thick aqueous and dark soil. It appears that the lowering of the sea level allowed the accumulation of soil from the land to increase and thus the former Kawachi Bay was gradually buried. The results of the pollen/diatom analysis indicate the presence of a swampy environment for this period. From the Early to Late Jomon period there is an evidence of extensive flooding which would have rendered this area unsuitable for habitation and so far there have been no features or remains recovered from this period.

2. The Yayoi to the Middle Kofun period

No major changes in the landscape were detected from the Yayoi to the early Middle Kofun period. From the Middle Kofun period onwards however there is an evidence of development in this area. The remains of paddy fields were detected on and around the soil mound features SX701 and 702. From the examination of the remains, it is apparent that they were used for only a short period of time. After the construction of the fields, two natural

streams (NR 701, 702) appeared, and floods associated with these streams deposited soil over the entire area. Remains of the Middle Kofun period were found from the streams, the remains of the mid 5th century from NR 701 and the end of 5th century from NR 702, which show that there have been large-scale flooding approximately several decades apart associated with the streams.

3. After the Late Kofun period

The former bank and channel of a Late Kofun period stream (SD 701) were found. From the Asuka period onwards, there is a continuing pattern of flood deposited soil followed by evidence of cultivation and no evidence of structures within the investigated area.

Further Reading

Osaka City Cultural Properties Association

1998-2000 *Archaeological Report of the Eastern sector of the Nagahara sites* Vols. I-III, Osaka. (In Japanese, with English summary)

Osaka City Cultural Properties Association

1978-1999 *Archaeological Reports of the Nagahara sites* Vols. I-VII, Osaka. (In Japanese, with English summary)

Osaka City Cultural Properties Association

1989-2000 *Archaeological Reports of the Nagahara and Uriwari sites* Vols. I-XV, Osaka. (In Japanese, with English summary)

報告書抄録

ふりがな	ながはらいせきとうぶちくはくつちょうさほうこく4						
書名	長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅳ						
副書名	1998年度大阪市長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	松本百合子・趙哲濟・小倉徹也						
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会						
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL 06-6943-6833						
発行年月日	西暦 2001年3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
長原遺跡	大阪市平野区 長吉六反	27126	市町村 道番号	34°	135°	19次 980701~981006 20次 980703~990122	168m ² 420m ²
				36°	35°		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		
長原遺跡	集落	旧石器時代			剥片		
	田畠	縄文時代			縄文土器		
	その他	弥生時代	溝・土塁		弥生土器		
		古墳時代	竪穴式住居・土壇状遺構 自然流路・土手・水田		土師器・須恵器・製塙土器・土製品・玉類 木製品		
		飛鳥時代			土師器・須恵器		
		奈良時代			土師器・須恵器		
		平安時代以降	溝・田畠		土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・木製品		

原色図版



SX701検出状況(北東から)



SX701上層盛土中の遺物検出状況(中央部)

原色圖版二 NG98-19次調查 SX701出土遺物



土師器 壺・壺・鉢



土師器 高杯



NR701・702出土遺物



SD401出土遺物

図 版

東壁地層断面
(第1~4ciii層)



南壁地層断面
(第6biii~7axiii層)

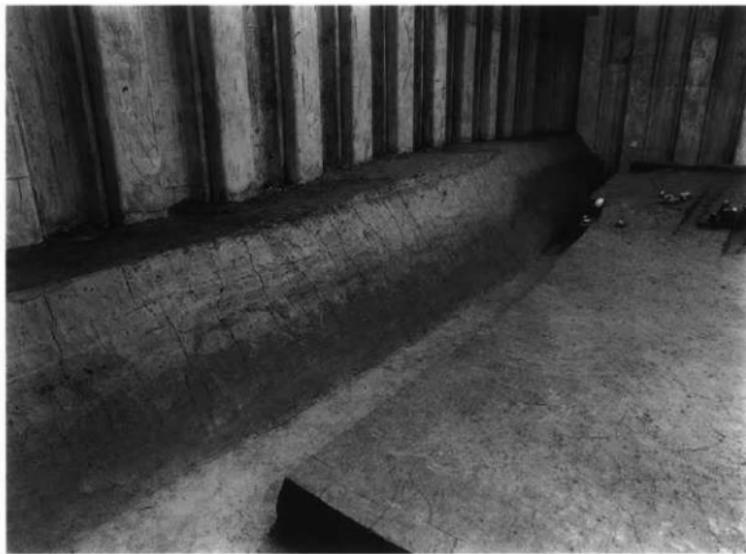


東壁地層断面
(第7avi~9bii層)





SX701検出状況(北東から)



SX701周辺の地層断面(南壁)



SX701上層盛土中の遺物検出状況(北東から)



SX701上層盛土中の遺物検出状況(北から)



遺物出土状況(南部)



遺物出土状況(中央部)



遺物出土状況(北部)



南壁地層断面(第1~4civ層)



南壁地層断面(第5a~6c層)

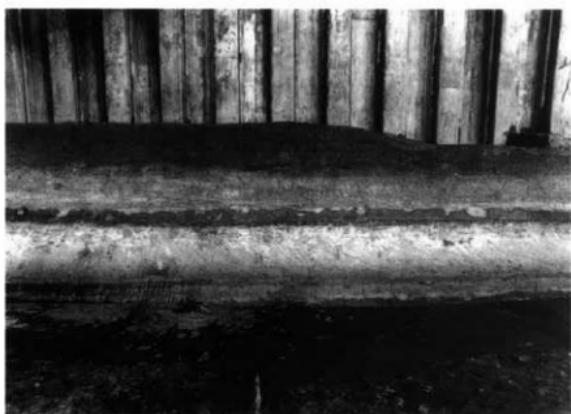


南壁地層斷面(第6bi~7axiii層)



南壁中央部地層斷面(第6bi~7axiii層)

東壁地層断面
(第8a~9ci層)



南壁地層断面
(第9ciii~12ai層)



南・西壁地層断面
(第9ciii~14層)





第13a層下面の生痕化石と遺物出土状況



南壁地層断面(第12a ii~14層)



SD901・902(北西から)



SD903(北から)



SB701検出状況(西から)



SB701完掘状況(西から)



SX702検出状況(西から)



SX702の断面(東壁)



SX702の周溝状遺構完掘状況(西から)



SX702上層盛土中の遺物出土状況(西から)



NR701・702完掘状況(東から)



SD701と土手の断面(南壁)



SD401(西から)



第5a層上面検出状況(西から)

図版一五 NG98-I 19次調査 SX701出土遺物(二)



53



59



70



71



60



58



75



79



76



82



77



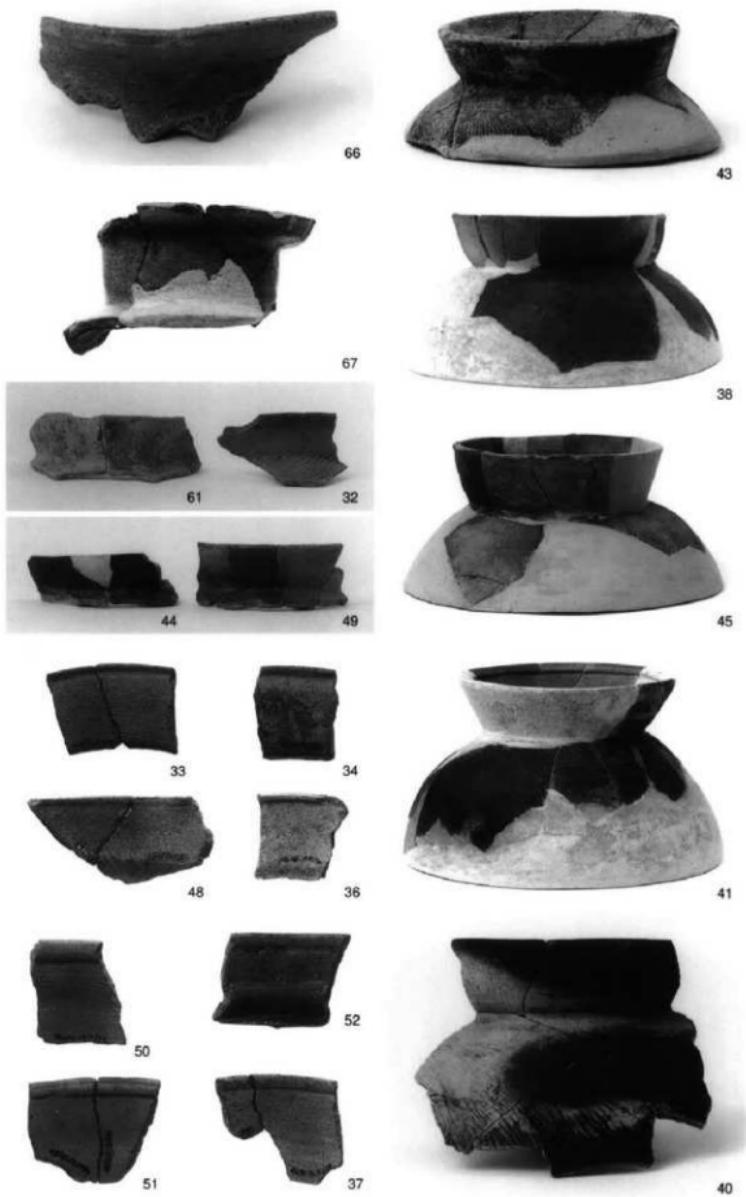
83



78



93

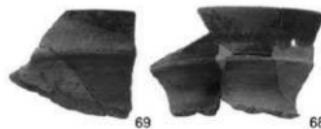




65



85



69

68



84



73



89



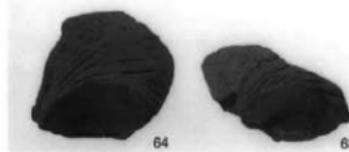
72



74



62



64

63

圖版一九 NG98-19次調查 SX701出土遺物(五)





98



179

121



99

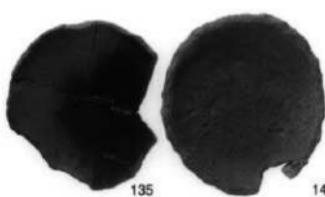


133

131



100



135

145



112



107



116



111



136



118



123



125



124



130



126



141



132



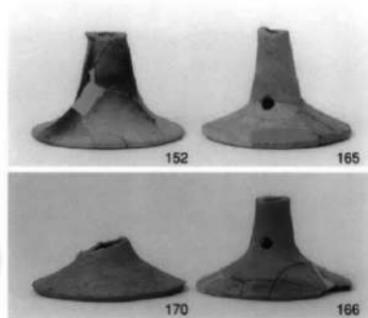
149



144



150



152

165

170

166



151



154

160

155



177

178

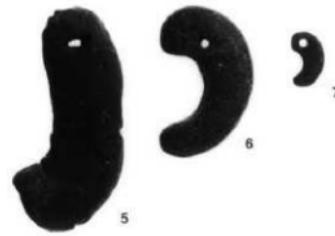


153

8	9	10	14	15	16
19	20	21	27	28	29
17	22	23	24	25	26



164

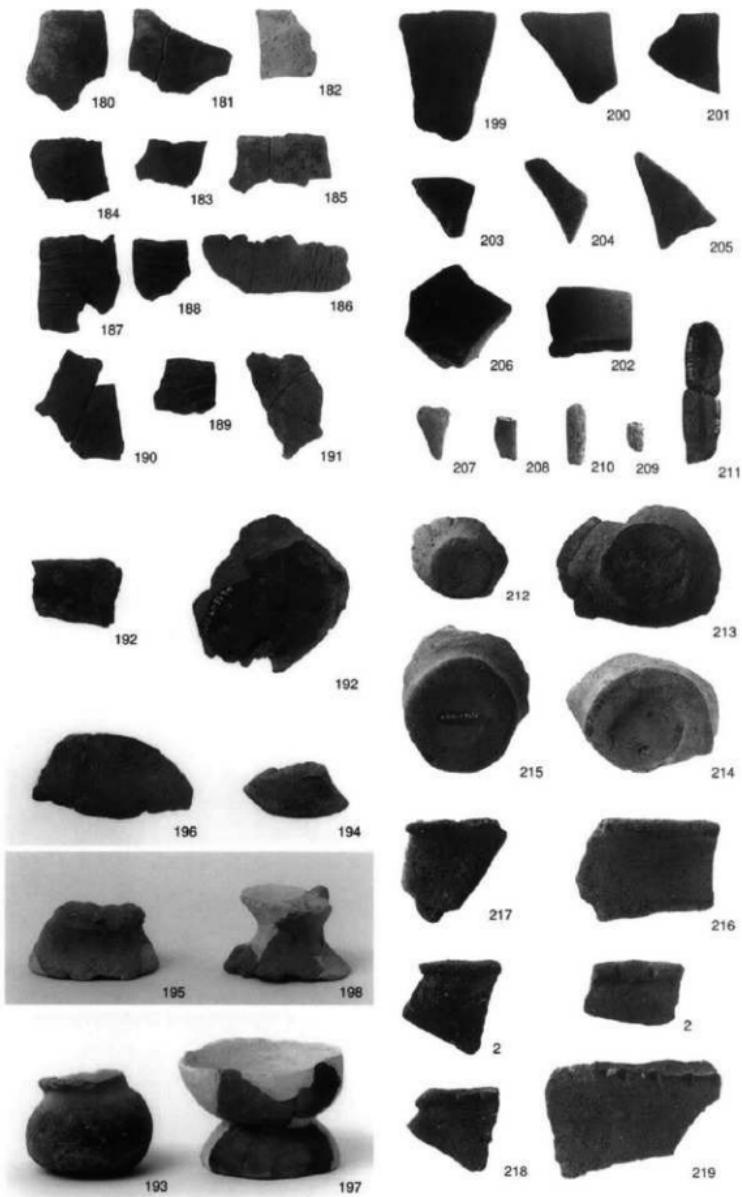


5

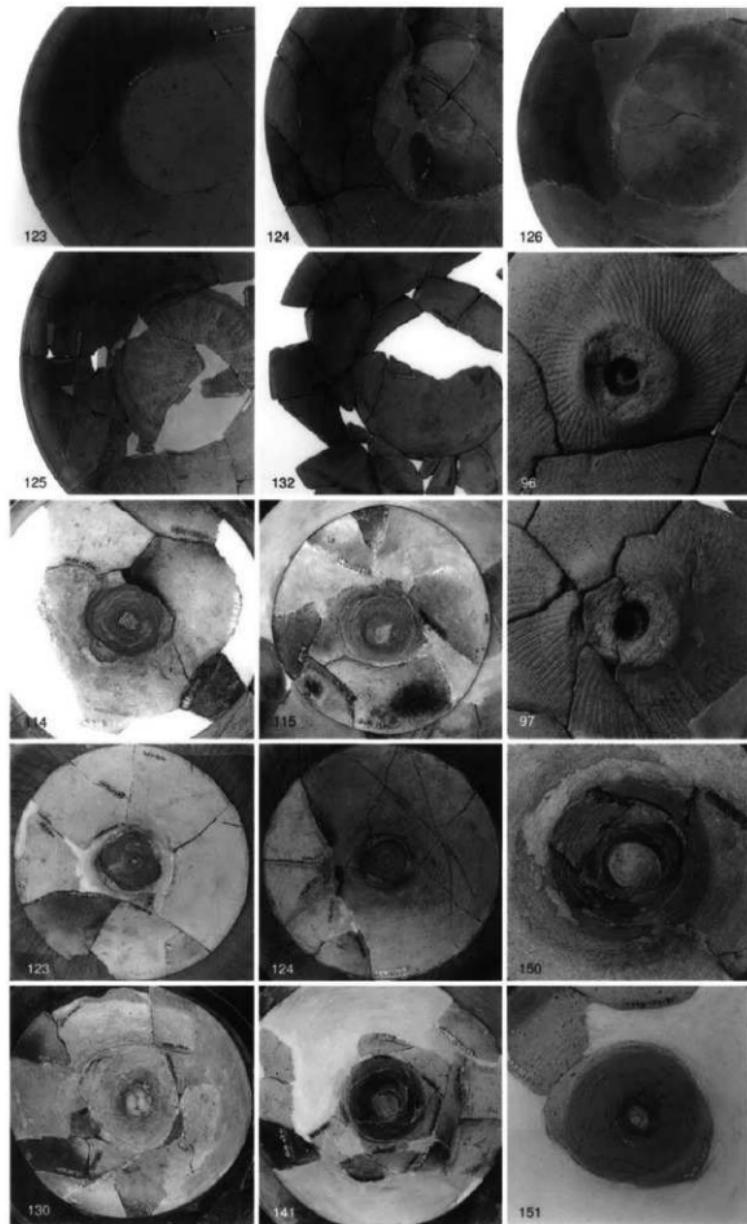
6

7

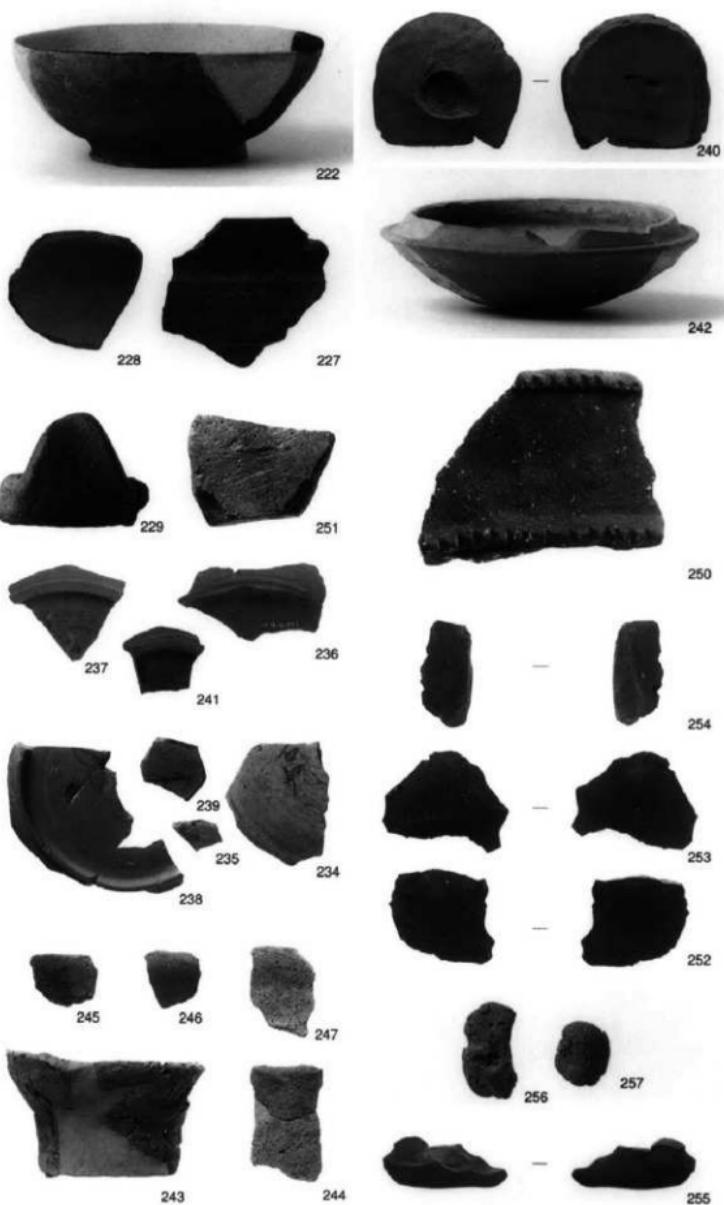
圖版一三 NG 98-19次調查 SX701出土遺物(九)



図版二四
NG98-19次調査
SX701出土高杯の細部



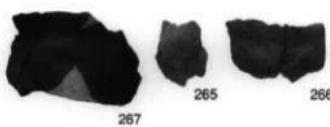
杯部内面：123～126・132 脚部内面：96・97・114・115・123・124・130・141・150・151



第4ci層：222 第5a層：229 第6a層：227・228・234～239・241・243～247・251
第6bi層：240・242 第8a層：252 第9a層：250・253・254 第13a層：255～257



279



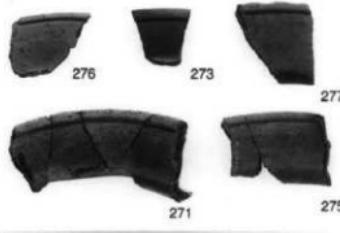
265

266

267



294



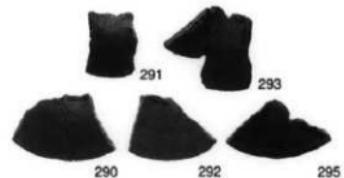
276

273

277

271

275



291

293

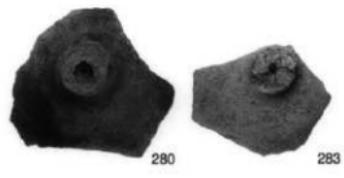
290

292

295



268

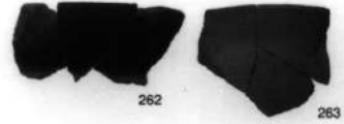


280

283



272



262

263



278



258



286

287

図版二七 NG98-20次調査 NR701・702出土遺物



305



307



297



310



302



308



303



309

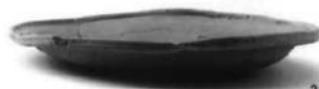
NR701 : 297・302・303 NR702 : 305・307～310



313



321



316



323



312



322



314

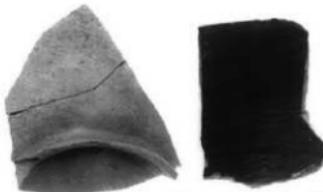


325

317



318



326

326



319



328

327

324

大阪市平野区 長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅳ

ISBN4-9006827-47-2

2001年3月30日 発行◎

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

<http://www.occpa.or.jp/>

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

印刷・製本 株式会社 中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪市東成区深江南2-6-8

**Archaeological Reports
of the
Eastern Sector of Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume IV

A Report of Excavations
Prior to the Development of the Eastern Sector of the Nagayoshi Area
in 1998

March 2001

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Reports
of the
Eastern Sector of Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume IV

A Report of Excavations
Prior to the Development of the Eastern Sector of the Nagayoshi Area
in 1998

March 2001

Osaka City Cultural Properties Association